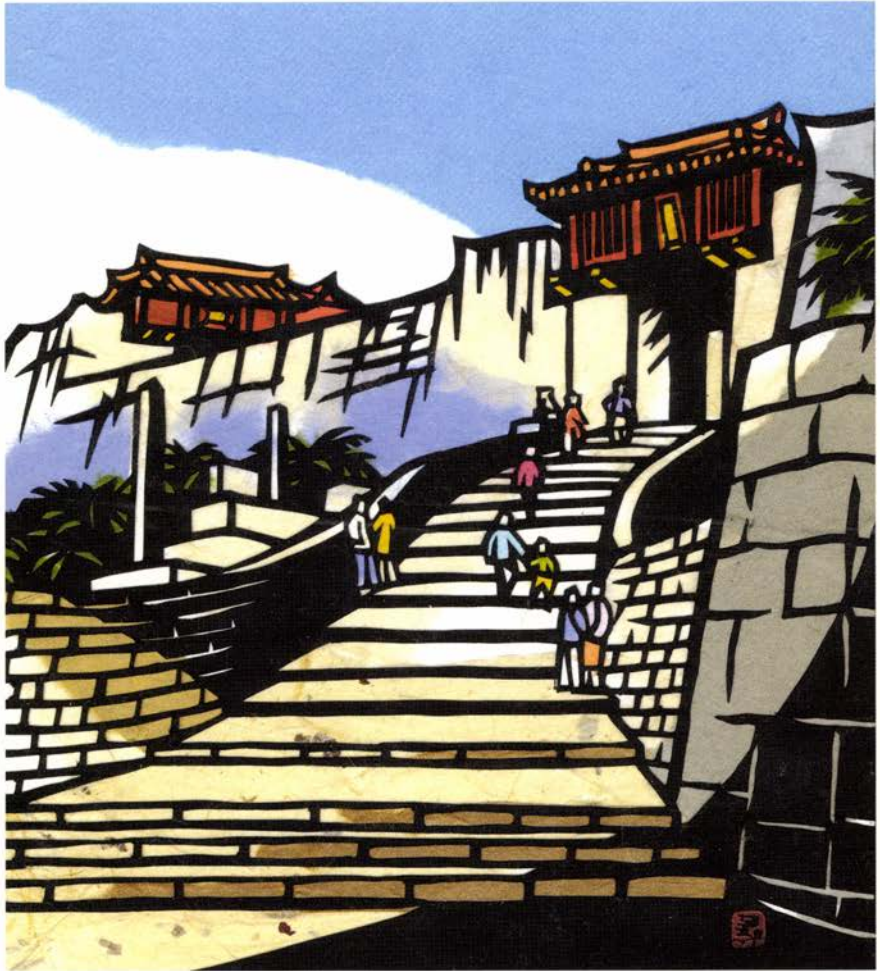


川柳塔



昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
平成十九年九月一日発行 毎月一日発行
創刊大正十三年 通卷九六四号

日川協加盟

No. 964

九月号

第13回 川柳塔まつり

《同人総会》

と き 10月8日(祝) 午前10時～11時
ところ ホテル・アウィーナ大阪 3F 生駒
(近鉄上本町・地下鉄谷町九丁目下車・TEL 06-6772-1441)
議 事 平成18年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告
平成19年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

《各賞表彰式・記念句会》

と き 同日 午前11時開場・午後1時開会
ところ ホテル・アウィーナ大阪 4F 金剛中・西
表彰式 路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・檸檬賞・一路賞・
各地柳壇賞の表彰式を午後1時から行います。

おはなし 「お笑い趣味オタク」 小島笑司氏
兼題 「ハンドル」 (大阪) 籠島恵子 選
「炎」 (大阪) 池森子 選
「あまい」 (愛知) 早川遯行 選
「鳥」 (香川) 川崎ひかり 選
「のびる」 (鳥取) 岸本宏章 選
「空 気」(事前投句・9月5日締切) 河内天笑 選

◎各題2句・欠席投句拝辞

出句締切 正午(午後4時半終了予定)

会 費 2,000円(記念品呈)・当日いただきます。

《懇親宴》

と き 同日 午後5時～7時
ところ ホテル・アウィーナ大阪 3F 葛城
会 費 7,000円
宿 泊 ホテル・アウィーナ大阪 8,000円(朝食付き)
翌日観光 観劇「吉本新喜劇」 4,000円 30人締切

◇事前投句および懇親宴・宿泊・翌日観光の申込みは本誌同封のハガキに明記の上、9月5日(木)までに本社事務所宛お願いします。

◇懇親宴・宿泊・翌日観光のご送金(句会費除く)は同封の払込用紙でお願い致します。

◇記念句会・懇親宴には同人・誌友にかかわりなく、一人でも多くの方々のご参加をお待ち申し上げます。

主催 川柳塔社

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号201
〒543-0052 ☎06-6779-3490

「昭和二十年の思い出」

河内 天笑

昭和20年3月半ばの夜9時頃警戒警報からすぐ空襲警報に切り替わって南の空から大阪湾岸沿いにB29の編隊が次々と頭上を通過して行く。サーチライトの光がいくつも交錯して高射砲の発射音がびびく。大阪大空襲のはじまりであった。

小学四年生を終える時、疎開を強いられ、私は知り合いの家へ行くことになった。新学期の始まる前日に姉二人とリヤカーに机、布団、柳行李を積んで約四時間程かかって農家の門の前に辿り着く。

この家の主人は百姓の傍ら週に一度旧堺市の町へ花を売りに出る。私の生家の軒で花を捌いていた間柄での縁故疎開と相成った。

私の一日のノルマは朝起きてすぐ牛の餌の藁を切つて糠とまぜて与えること。学校から帰ると足踏みの石臼で玄米を搗いて白米にする。この奥さんが「よし」と言うまで搗く。夕方主人が帰ると草履つくりの特訓をされる。遊ぶ時間はゼロ。これは逆に有難かつた。

というは外にゼロと「町から来た奴」としていじめの情好の相手にされる。学校からの帰路もいろいろと知恵を使わないとあちから石礫がとんで来て門をくぐるまでは必死で走つて帰る始末であった。

毎日曜に二番目の姉(当時25才帝國航空勤務)が自転車でお八つを届けられるが、(カレの空缶に麩をバターで炒め、塩で味付けした物)エンプィで目盛りをつけ七日間もつ様にしていたが、この家の二人の子供に大切なお八つを缶から毎日すこしずつ盗まれていることが分かった。思いついてこの主人に告げようかとも思ったがそれはできなかった。

六月の半ばくらいから玄米を搗きながら「脱走」を思いつき六月三十日を決行の日と決めた。

藁草履を二足つくつて腰に吊り前夜から眠らず午前三時を待ち、夜の田舎道を北へ西へと走った。ここへ来た道は大陽に向かっていたので単純に北と西へ走ればいずれ家に着くという単純な発想だ。一番目の四つ角を西に向かつて左折。約2キロ程の所で踏切に出る。「来た時はもつと大きな踏切やった」と即座に元の四つ角に引き返し北に向かった。緩い長い坂道に出た。来た時にリヤカーを懸命に押し出した。また線路にぶつかる。ここも踏切が小さい。又引き返したが田んぼばかりで方角も北か西か分からなくなった。その時畦道の前の方から何やら近づいて来る。「ぞつ」としてが前に行くより道はない。かけ足でその物体に近づくと力石だ。実体が分かつてはつと一息して畦道を行くと少し広い道に出た。考えていた様な踏切である。よしとばかり走り行く。どんどん走っているとき大きな石がいつぱい置いてある所へ来たが行き止まりだ。切り戸の様なところから畦道へ出たとたんに仁徳御陵の森が見えた。小学校二年生の時に遠足で来た所森の形はよく覚えていた。ここを真つすく西へ走ればウチの家。ようやく薄明るくなってきた道をつたり歩いたり口笛吹いたりして家に着いたのが六時前。もう全員起きていたのか店の間の押入れの前に布団が積んであった。帰り着いた安堵で嬉しくて思わず感極まって布団に体を投げ出して泣き崩れた。「帰つて来い帰つて来い」

この日から九日のち七月九日に堺の大空襲でわが家は跡形もなく焼け出された。国民学校の五年生の夏に終戦を迎える。あの頃の小学生は、現在の同学年児童と違って、一様に幼く、ナイーブであった。

自選句

人間をもちに見せ合う酒となり
亭主関白ふう操縦されている
暇やから忙しそうに見せている

天笑



座右の句

以心伝心伊達に夫婦はしていない

(諷云児)

私の句

人生は常に理想の下にあり

須磨活恵

川柳塔 九月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「首里城」

■巻頭言「昭和二十年の思い出」……………	河内天笑……………(1)
透析に生きて……………	牛尾緑良……………(2)
川柳塔(同人吟)……………	河内天笑選……………(4)
川柳塔の川柳讃歌(33)……………	木津川 計……………(48)
自選集……………	……………(49)
温故知新……………	……………(52)
水煙抄……………	西出楓楽選……………(53)
■特別寄稿 一枚の写真……………	古藤 愛子……………(77)
愛染帖……………	新家完司選……………(78)
誹風柳多留一 一篇研究 25……………	……………(82)
檸檬抄「長 い」……………	鈴木公弘・西口いわゑ共選……………(84)

透析に生きて

牛尾 緑良

「昭和枯れずき」を口ずさみながら涙を流したことがあります。「力の限り生きながら未練など無いわ」と言うものの長男が幼稚園に入ったばかりの頃でした。会社の健康診断で尿蛋白が卅、血圧が二〇〇を越えて掛かり付けのお医者さんから大きな病院に紹介しますと言われた頃のことです。

気が付いていたのは家内でした。職場へはネクタイをして行きロッカーで着替えをしていたのに、作業服のまま行き来するようになっていました。もうひとり散髪屋さんは髪傷みで体調を心配していましたとの後日談でした。

日赤病院に入院したものの当時公立病院には透析設備が無く個人病院にわずかに設置されていたので、紹介されるままに転医しました。数年前まで透析膜は再利用しなければならぬ上、保険が適用されていないために毎回数万円の費用を要したそうです。

川柳を知ったのは入院中の新聞でした。暇にまかせて短歌も俳句も川柳にも投句したのですが川柳だけは入選しませんでした。選者の一人野村大茂津先生から句報と添削が届いたのが川

一路集	「玉」	古久保和子選	（86）
	「小さい」	平田実男選	（86）
	「意外」	長浜美籠選	（87）
初歩教室	「高い」	三宅保州	（88）
秀句鑑賞	同人吟	酒井一壺	（90）
	水煙抄	渡辺富子	（92）
■各地句会だより	もくせい川柳会	藤井則彦	（93）
■句集鑑賞	「われも旅行く一人なり」	波多野五楽庵著	（94）
■句集紹介	「われも旅行く一人なり」	波多野五楽庵著	（94）
■宮川珠笑氏	遺句抄	木本朱夏	（95）
八月本社句会			（96）
各地柳壇	（佳句地十選／光井玲子）		（102）
夜市川柳二十五周年記念大会に出席して	のびやかなひととき	新家完司	（116）
柳界展望			（119）
九月各地句会案内			（120）
■編集後記	（ひとこと／山口光久）	希久子・尚士	（122）

座右の句

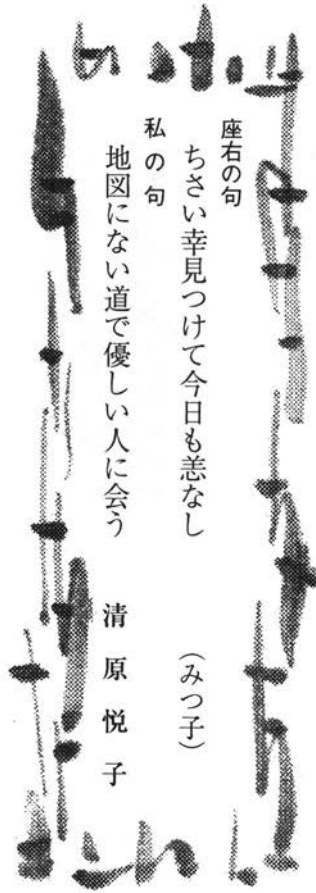
ちさい幸見つけて今日も恙なし

（みつ子）

私の句

地図にない道で優しい人に会う

清原悦子



柳への第一歩でした。

太茂津先生に指導をいただきながら、満足感がなく、番傘川柳会の南出陽一先生や淵田寛一先生の指導を受けたことがあります。もともと川柳を知りたいと思ったからですが、当時は確固たる信念があったわけではありません。懐に飛び込んだおかげで本当の心を伝えていただいたと思います。若宮武雄先生のアドバイスで考え直しましたが温かく包んでいただいた先生方のおかげで川柳がより好きになりました。

命の重さを教えていただいたのは再就職先の病院の先生でした。身体には自分で直そうとする大きな力があること、受け入れるか否かは身体が決めてくれることを習いました。事実、生の牛肉を食べたときや果物を少し多目に食べたときは身体から拒否されました。今は塩分や水分に関しては欲しくなるものを適度に摂ることが出来るようになりましたが、少し油断するとすぐ失敗してしまいます。

毎月40万円もの治療費の補助を受けて30年余り、一億五千万円以上を皆さんの保険料に支えられての人生です。与えられた命を大切に生きて生きる一方、川柳を通じてなにかご恩返しが出来ればと思うこの頃です。

30年前にこんな句を残しています。
生かされて生きて命の重さ知る 緑楼
初心に戻ってまた川柳に励みたいと思います。



河内天笑選

大阪市 森田明子

信じ合う絆はゆるい目に結ぶ

看板の地味さに惹かれ客となる

無くすこと覚えてついできた度胸

還暦を前にだんだん派手になる

電池切れのように大の字で眠る

大阪の女と顔に書いてある

大阪市 谷口 義

父の日も母の日も草引いている

カーテンを開けると草が伸びている

元氣だと上方修正しています

痛み止め飲んで意志薄弱になる

条件反射お墓参りに行こう

コンビニの弁当も腕上げてきた

弘前市 高瀬霜石

どうせならずぶ濡れになる心地良さ

赤ちようちん弱虫毛虫やつてくる

割り勘を切り出すグッドタイミング

特価品理由を聞いてみたくなる

独身に聞けばやめられないという

いい映画観たなとわかるいい笑顔

さりげない一言その場やわらげる

やんわりと姉妹束ねる母だった

石蹴ってみてもプライド治まらぬ

つくづくと鏡に見られうるたえる

その癖が個性になつて愛される

天の川恋に悩んだ日も遠い

西宮市 西口 いわゑ

天の川恋に悩んだ日も遠い

堺市 志田 千代

小指をかんだのは甘えんぼ小猫

私をとび越えチラシ配られる

雑巾にしたTシャツに睨まれる

女の業背負うた孫がまた一人

父さんの洗車は雨乞いの儀式

コンビニのおでんの味が近づいた

八尾市 高杉千歩

大切なことは楷書で書く日記
淋しさに河内音頭の灯へ紛れ
漢字検定悦に入ってる老いひとり
携帯へ姑が毎日よく喋る
修正出来ます単細胞な脳だから
空白のページを埋める絵空事

大阪市 板東倫子

本当の贅は自作の茄子トマト
底知れぬ怖さで地球回ってる
見ないふり玉虫色で生きる主義
老化サイン生命線がたよりない
久間長官しようがないのは貴方です
弱虫が偽装しているサングラス

鳥取市 録沢風花

表紙絵に見入りそれからページ繰る
怠慢の社保庁たたき起こされる
美しい国に増えゆく怖いひと
大花火銀河の拍手聞こえそう
七夕に祈る平和と温暖化
竹槍の無力さ胸に終戦日

和歌山市 武本碧

始まりは自分の播いた種だった
ユーモアで酸素不足を入れ替える
ワンサイズ広げ華やぐかごめの輪

ふんわりとジョークで包むバラの刺
あいまいな答えが傷を深くする
三食と昼寝古いと翔んでいる

米子市 中井ゆき

美しい花は無心に咲いて散る
横文字の花の名前が出て来ない
泉州の水茄子求めデザートに
青草に誕生ラッシュユメーメモウ
ハッピーバースデーひ孫がうたうありがたさ
投げかえすことより今は身をよける

富山市 島ひかる

銀舍利をほおばり想う鶴彬
美章園駅歳月を巻き戻す
あなたのお陰あなたのおかげ言われても
土砂降りを待つ柄物の長靴よ
バラ色の夢追いかけてまだ六十路
良心の行方不明をさがす記事

三田市 堀正和

機内食五回平らげやっとりマ
高山病地元の人は皆元氣
世界遺産テレビの方がきれいだな
マチユピチュに埋蔵金があるらしい
ランチにもワインが飲めるいいツアー
五大陸踏破日本が好きになる

和歌山市 福本英子

忍び逢いとでも便利な非常口

首縦に振らない家の扇風機

夏帽子選つて夫の墓まいり

おたやんの鮎が私を見て笑う

可愛くてちよっかい出して引つ搔かれ

和歌山市 古久保和子

動線が乱れ寢室別にする

満点でないから友が寄ってくる

アルバムから抜け出て亡母の盆踊り

分別ゴミ身の処し方にまだ迷う

芋の葉の露とひと時遊ぶ里

和歌山市 田中みね

嫁姑いろいろあつて当たり前

適当に咲いて名前が売れていく

診断の結果さく日の不整脈

低気圧の妻へ断じて逆らわぬ

心底にやさしい医師の名を刻む

和歌山市 喜田准一

エイヤーで出した答を誉められる

正論を情の話で切り返す

相槌を打つて場面が変わり出す

どこまでも女おんなのきみを見る

何もかも賛成されるのも不安

和歌山市 松尾和香

晩学の小道に繋ぐ癒しの場

ジャスマン茶淹れて雨音聞くひとり

苦も楽も平気で越えた強かさ

夢描く画布折りたたむ古希の坂

平凡に生きる暮しに温い風

和歌山市 楠見章子

髄膜炎の受話器震えが止まらない

トラウマか医師の動きを見逃さぬ

四歳の耳はでっかいだけじゃない

生命力も回復力も度肝ぬく

雨蛙忘れた頃に呼びにくる

和歌山市 玉置当代

一秒を競う生死のタイミンク

貧乏暇なし時計に急かされて動く

思考力欠けてふわふわ生欠伸

割り切れぬ答え脳裏にこびりつく

宝塚歌劇に酔うた小半日

和歌山市 宮本三喜夫

議員さん失格ですよ恥を知れ

久し振りミスユニバースに輝いた

横綱も外人達に乗つ取られ

窒息死菫蕪ゼリーで命取り

死を急ぐ貴方達には芸がない

和歌山市 堀畑靖子

家事万端できぬがクビだともならず

診断は老化それなら笑うしか

解放の味満喫の旅日記

俺わたし訣れを予想して夫婦

オイナニと色気もなにもなく夫婦

海南省 堂上泰女

月見草夢二の世界見るような

思いのたけいっぱい叫びたいあした

負け犬の遠吠えだろうこの本音

貸し借りは無くて二人は自由の身

リハビリの目には眩しいクレマチス

海南省 三宅保州

万障繰り合わせとはご無体な

犬嫌い猛犬ありと貼つてある

遠方の医者を探して行く病氣

セクハラと違いまっかビリケンさん

化けてでも出てきてほしい逢えるなら

鳥取市 奥谷彩子

亡夫を恋う琴線ゆるする千の風

老いた今背おう子達がいてくれる

自己主張人との垣根高くする

芯になる楔効いてる父の塔

恋の行方やきもきして花時計

鳥取市 岸本宏章

翔んでいる妻へ目配せ通じない

割り勘のときにはいける口らしい

横道へ逸れた話が長くなる

狂わない電波時計が味気ない

ボランティアだけでは棚田維持できぬ

鳥取市 岸本孝子

ポリーナスも今は他人のことと聞き

フライパンひとつで足りる献立だ

自前の歯それが私の宝物

別腹と言訳しつつ手を伸ばす

いつまでも老いぬ胃袋持て余す

鳥取市 山宮愛恵

老人のきらきら光る竹とんぼ

老人のパワーへ入れる黒砂糖

抽象語大盛りにするすまし顔

年金は死んでくれとは言うてない

太陽の恵みあげたいめぐみちゃん

鳥取市 宮脇道子

きれいだね君の心も野の花も

他人には弱音を吐いて母は生き

雨よ降れ過ぎて困る雨こんこ

ゴミの日を基準に生きて過ぎる日々

久松山登る力士に大拍手

鳥取市 武田 帆雀

用兵に残そうどこか骨がある
女ひとり優雅に暮らす遺産金
襖を開けると謀がもれる
可愛い子憎い子殿の日記帳
門をこっそり開けてくれた女

鳥取市 山本 益子

熟年世代離婚ブームの波に乗る
旅半ば名水訪うて元氣付け
子育ては態度で示す心がけ
原爆忌黄泉への道に灯がともる
人生の大波小波急に寄る

鳥取市 土橋 はるお

これと言う成果がなくて工夫する
人並に今日は趣味だとして出る
銭がないと言うのも人並だ
阪神が勝つと大盛り飯を食う
髭伸ばしジントクス担ぐお相撲さん

鳥取市 土橋 睦子

夕焼けの長い影踏む子もいない
さようなら後で見ている岐れ道
躓いた石に邪念を論される
親のエゴ私もわかる見栄を張る
随分と御無沙汰したと詫びる墓

鳥取市 春木 圭一郎

ひと風呂を浴びてアイデア浮かびだす
こだわりを捨てて感動増えてくる
他人の目を意識するからしんどいね
リラックスやはり眠りが一番だ
だからとただごろごろと休みの日

鳥取市 夏目 一粹

天と地のめぐみ何よりありがたい
長いものに巻かれたふりをして生きる
その気なら立つ瀬も浮かぶ瀬もあろう
休耕田に忘れられてる古案山子
凜と咲くあなたジョークに欠けている

鳥取市 田中 憧子

加工品裏の表示が嘘っぽい
歩けない足だが爪はよく伸びる
忍び足するほど軋む夜の床
特売日結局高い物も買う
寝不足で宇宙遊泳し始める

鳥取市 福島 庸二

見極めが難しいけど向い風
世の動きすべて知ってる長寿の樹
美辞麗句無いけど心打つことは
過去のこと捨て去り難いゴミ掃除
あやふやな境界線がもめる元

鳥取市 田村 邦昭

いい作ができて思わず妻を呼び
呼ぶ声で喜怒哀楽がわかります
脇役でいい脇役に埋もれる
終点を見つめままに長い道
老人と呼ばれ不機嫌なおらない

鳥取市 加藤 茶人

大人びた口調でニギビ主張する
その昔兄から今は子のお古
目が見えぬばかりに見える情に触れ
夫婦背を向けたベッドがよく軋む
小便に勢いがない歳想う

鳥取市 福西 茶子

日曜日遊びどころで着るチャイナ
恩返すふるさと税は惜しまない
糠に釘の暴走妻をもて余し
混ぜ飯と汁で一日生きのびる
鶯の声聞きながらする写経

鳥取市 吉田 弘子

幾許の余生いたわりあう二人
高齢化国の設計狂いだす
家計図に外国籍があり多彩
巡る月日悲しい涙忘れさせ
記念日へ百年先を植えている

鳥取市 上田 俊路

八十年泳ぎ疲れて浮いている
溺れない深さで泳ぐのが骨さ
彼岸にまで向かって泳ぐ今日もまた
糖尿がビールの旨さ知っている
一杯のビールで下戸は天下取る

鳥取市 植田 一京

それじゃまた別れたままに夏も過ぎ
生きている印しに日記書いておく
大器にはなれぬが友がたとあり
ナツメロを歌えば若さ蘇り
欠点をズバリ言われて気がついた

鳥取市 有沢 せつ子

十三歳丸刈り頭した決意
梅ジュース作る手順を孫に見せ
半袖に鮮度の落ちた腕さらす
顔色がいいと安心する鏡
いたわれれ急に痛がる膝小僧

鳥取市 倉益 一瑤

きみまろにネタを上げてる若作り
でかい器に心すっかり奪われる
余生まだ覗いてみたいけもの道
ほんとうの友でずばりと切つて来る
アクシデント神に一喝入れられる

鳥取市 中宇地 秀 四

自己主張したいがシャイなかずみ草

俺の事知りつくしてゐる影ほうし

有難う素直に言えた日の晩酒

無理しない楽をしないで良く眠る

賞味期限過ぎて二人にコクが出る

鳥取市 近藤 佳子

鮎を釣る父七夕の天の川

目で気持伝えてくれたお母さん

この先も漬物石でよしとする

恋模様蘇らせる遠花火

やりきれぬニュースへ胃酸過多になり

鳥取市 西川 和子

丁度いい枕で朝のよい目覚め

いい夢を見たい枕に呪文かけ

枕カバーピンクに替えて甘い夢

古希の坂少し派手目を着てみよう

花盛つて老いの暮しに色を添え

鳥取市 中村 金 祥

めでたいな夫婦そろつて巡礼へ

加入歴調べ減額がつくりだ

定年退職夫は前より若作り

赤ちゃんポスト静かに眠る子が哀れ

こんな事になるとは知らず税払う

鳥取市 池原 天馬

不老不死の薬もらいに主治医まで

自爆テロ命日あれど遺骨ない

粽まく今年も生きた笹を取る

パソコンは中毒みたいはまりこむ

夏休み昼中子等の声はずむ

鳥取市 太田 幸枝

いい星の下に生れて幸せだ

着飾って心の軽さみすかされ

年金で孫の結婚祝いする

レモンテイーストロウで呑みうそ一つ

飾り物なくてもきみは美しい

鳥取市 福田 登美

自尊心冷めて見直す歳になる

若者に干渉しない主義でいる

寛いだ嫁の素顔が母になる

思いやりそして優しく八十路

少し派手まとい淋しさから逃げる

鳥取市 永原 昌 鼓

ほんわかとやる気にさせる褒め言葉

ふるさとを歌うと心熱くなる

若作りしても背中に歳が出る

欠点を晒すと友の目が温い

ありがたい元気の証腹がへる

倉吉市 野口節子

水と緑たつぷりあって金がない

贅肉と余分な財は邪魔をする

大陸育ち一寸ドライなおばーさん

雑音に馴れて楽しい三世帯

ジェラシーも欲も確かに喜寿の坂

倉吉市 最上和枝

麦秋の田んぼへ昇るうす煙

ストローで覗けばボロが見えてくる

飾りもの知らない母の太い指

水族館あらゆる魚泳がせる

バンクした自転車並みの足と腰

倉吉市 山本玲子

贅沢は終の住処で檜風呂

植木鉢わたしは夜の雨が好き

全身の籠を外して仕舞い風呂

髪の色それぞれ変わるクラス会

父の日に妻から貰う長寿箸

倉吉市 猪川由美子

無人家に花は忘れず偲び咲く

老いおムツ取れる時とは別れの日

気が付けば夜空見上げぬ日が続き

死んでから急に業績評価され

タレントの余りの無知にテレビ消す

倉吉市 山中康子

若者が銭の切れ目かホームレス

格差ない母のふところよつといで

着飾って袖の先からボロが出る

生きている地球のうなり声がする

わたくしを証明してる五七五

倉吉市 松本よしえ

捨て生えの南瓜みごとに這いまわる

クールビズお洒落になったお父さん

ほどほどの欲があるから生きられる

水の無い砂漠を思う今日の雨

兎追いしみんで歌い瞳がうるむ

米子市 政岡日枝子

心そわそわ嘘がひよっこり口を突く

お互いを呼ぶこともなく日が暮れる

そわそわすると疫病神が寄ってくる

葬式のあとのドラマにある本音

鳥を呼ぶ樹になるように育ててる

米子市 青戸田鶴

焼き上がった壺大らかに息づいて

愛された記憶は遠く美しい

鳴き終えた蟬身の程を知っている

雑踏を歩いて私取り戻す

昨年と同じに梅を漬け終える

米子市 澤田千春

誕生と聞けば心が晴れてくる
からたちの垣にロマンがひっかかる
疲れたら足ふんばって空を見る
ふる里はちいさな道もあつたかい
風と話して心が広がってきた

米子市 野坂なみ

美しい湧き水山に神おわす
斐伊川に箸が流れてくるロマン
誕生日昔の旗がなつかしい
麦秋の夢ふくらまずコンパイン
限りない思慕紫陽花の蝸牛

米子市 白根ふみ

子育てが終り金魚の水をかえ
流れ星いじめにあつたかも知れぬ
刈り過ぎて虫は居場所を失いぬ
老いた壁にも風はまともに吹きさらす
予報士のおもいの外の梅雨晴れ間

米子市 門脇晶子

千羽鶴みんな健やか部屋の中
仏からもらつたことば壺のため
美しいままの紫陽花嫁に出し
歳とるたびに堪忍袋大きくす
知恵袋だんだん底をついてきた

鳥取県 深田俱久

ハニカミの大山今日も顔隠す
新年度去年の部下が上司です
法律が事件のあとで呱呱の声
良心をポイ捨てしてる神の国
同期会タイムスリップ昭二十

鳥取県 谷口次男

あそこからあらゆることが筒抜けだ
団塊は解けて流れてどこへ行く
この道は違うどうやら謀られた
満開の煙草の花に罪はない
祖父母という日本の知恵疎んじる

鳥取県 佐伯やえ

笑つてすむことではないが笑つとこ
貧しさを知っているから泣きはせぬ
銜いなく生きて心に咲かす花
写経して秋の心をととのえる
花たちとはなし天命待っている

鳥取県 山下節子

ブランドの値札にコスト考える
宝くじこっそり買つてがつくりす
若作り映した鏡背が伸びず
本心をずばりと言えば睨まれる
納得の出来る説明して欲しい

鳥取県 石谷 美恵子

ずばり言う友は憎いありがたい
時間よ止まれ二度と逢えないひとといふ
漢字には弱い数字はなお弱い
好きにしたいよと言われ動けない
こっそりとこの輪の中にいる忍者

鳥取県 下田 茂登子

血糖血圧食べる楽しみ取って行く
不美人の若作りには骨がある
老人会へまだまだ行かぬ古希の坂
貯えがないのも自慢しています
暇などんぐり三人集い噂しく

鳥取県 盛田 夢路

年金の台帳消したシュレッダー
赤いバラ刺を隠してワルツ舞う
何時からか妻が天下を取り出した
廃線ツアー郷愁さそうひつじ雲
冷静になれば妬心が萎み出す

鳥取県 竹信 照彦

農協が頼るで党で田畑荒れ
食糧の自給問われる農水省
台風が梅雨前線呑み込んだ
釣り好きはいつも長靴合羽持つ
海に落つ夕日はキスを釣りながら

鳥取県 平尾 菜美

少年よ響け丼飯の活
漕ぎ出せば波がやる気を巡らせる
抹殺をされずに済んだ種を播く
広い海巡る血潮が迸る
振り向けばそこにいつもの母が居る

鳥取県 松川 行男

承認証眺め苦肉の第一句
人生相談後輩が聞く神に聞け
OB会奥さん元氣尋いてくれ
宿題も父の帰りを待っている
グンニヤリと寝た子が重い夏祭り

松江市 三島 淞丘

睨閉じまだ残像を追っている
婦唱夫随 妻が静かに笛を吹く
泥被るたびにひと皮脱皮する
沸点に一步手前の腹の虫
寄せる波自問自答を繰り返す

松江市 川本 畔

歓迎の横断幕へ佇ちすくむ(中国親善交流の旅より 5句)
お茶いろいろと振ってみせますチャイナ服
乾杯と笑顔交互に盛り上がり
道なき道を揺れて西湖へ辿り着く
悠久の大地に告げる さようなら

松江市 銭山昌枝

価値観のズレは気付かぬふりをする
不自由になると色んな知恵が湧く
一人では生きられないと知るピンチ
縁あって付かず離れずふわり居る
今日も雨腐らないようイッチニイサン

松江市 小川注湖

労りが籠って見えたあたりがとう
聞きながら相手の意図を探ってる
足湯にはミニスカートがよく似合う
看護師は温かい手を配ってる
思うほど思ってくれぬ恋の道

松江市 佐野木みえ

飛驒の旅山車のからくり目を見張る
バスを降り雨の合掌造り見る
カラフルなトランベットの花の息
湧き出る郡上の名水含む吾
地産地消曲ったキユウリなおいとし

松江市 松本知恵子

蔓伸ばすゴーヤ南の花咲かせ
束縛を嫌った野生馬の行方
低位置で呑気に暮らすダンゴ虫
遠慮など無い勝ち組の好き勝手
路線バスよもやま話乗せてゆく

松江市 安食友子

適齢期独身貴族ぶっている
べちゃくちゃの後遺症ですしやがれ声
水やりに雨雨雨と口ずさむ
夢で逢うパントマイムはあつけない
雷鳴と電気ギターは義兄弟

松江市 津川紫晃

たつぶりの世辞へがらがら嗽する
常識へ背を向けたがる青い毬
ふるさどにいつでも匂の味がある
嘘ばかり聞いている耳が眠くなる
争っていても夫婦に春がある

出雲市 森茂美

ゆつくりと今年を生きる戌の歳
同じ道ゆくが考えみな違う
小雀の囀る声にあがる雨
草を刈る初夏の薫りを知った鎌
盲導犬しかと信号守る目だ

出雲市 竹治ちかし

あの人もこの人までも偉くなり
好き嫌い言っても妻は一人です
春浅い山から芽吹く音がする
日和良し妻に引かれて善光寺
信州で触れる歴史のページ

出雲市 吉岡 きみえ

老斑を消すと美人になるわたし
窓あけて車行き交うのをみてる
あの花の向こうも花が咲いている
元氣出そう明日はあしたの風が吹く
小雀とおしゃべりしてる梅雨晴間

出雲市 伊藤 玲子

大の字に憩う地球の真ん中で
雷も怒鳴りそこねた今朝の空
石見銀山千の草鞋の跡がある
一途な竹裸になって天を突く
小糠雨神にもらった休息日

出雲市 多久和 敬子

気まぐれな天気私を気まぐれに
プライドを捨ててあつさり輪の中に
言い訳が今夜の私眠らせぬ
マネキンの服に心が揺れ動く
仲の良い夫婦演じる旅の宿

出雲市 石倉 芙佐子

夫と息子の側で唯々ありがとう
逢えばまた悲しみ募る萩の花
どう見ても虫は居ない高瀬川
おだやかに秋の夕日は落ちていく
じゃんけんで小さい方を貰っとく

出雲市 小豆澤 歌子

追いかけて遠くへいった紙風船
亡母と見た胸に消えない遠花火
バラの花束ねられない理由がある
石蹴りの跡も虚しいバス通り
バスの中微笑もらう顔なじみ

出雲市 園山 多賀子

甘え癖多くて老いは疎まれる
笛吹いてくれる人なし踊れない
憂きことは忘れ上手に消していく
私の齢を他人がお節介
相槌がなくて私の独り言

出雲市 小白金 房子

洗濯機汗も油もおし流す
罪ひとつ女鏡をさけて行く
思考力失せて地団太ふんでいる
ヒールより馴染む私の低い靴
毒舌が人の心に傷つける

出雲市 持田 多輝子

知らぬ振りするのも老いの思いやり
古い二人話とぎれて鯛焼く
似てほしい所が似ない子の育ち
雲行きをあやしい訳に気がつかぬ
めらめらの胸の炎はひたかくす

出雲市 岸 桂子

アリバイは全部曆に書いてある
病院の匂いをつけて家に着く
ストレスを流す名画に出合えた日
うどん そば 飢えたあの頃思い出す
野良犬の尻尾は甘えなど持たぬ

出雲市 佐藤 治代

ひよっこりと出合うにつこり笑う友
雷を巻き込んで降る雨じゃんじゃん
歯に優しい献立になり夕暮れる
愚痴っぽくなった夫へ飴渡す
グラジオラス夫喜ぶ黄色咲く

雲南市 毛利 幸

旅に出て溜まった憂さを置いてくる
いつまでも悩みくよくよ後に引く
変人と呼ばれ我身を確かめる
ひよっこりと思わぬ人が門叩く
四方皆和む話に癒される

島根県 伊藤 寿美

現住所素足になって確かめる
目の手術後も世間もよく見える
ゆっくりと歩いて来いと未来から
目くじらを立てずに輪から出ずに居る
猫背だね あなたもそうね日向ほこ

島根県 富田 蘭水

生きている御飯がうまい気の力
医師の言歩ける間歩きなさい
丸くなる心まだまだ欲がある
燕の子やがて洋々海渡る
人まねは無能我が道しつかりと

岡山市 井上 柳五郎

くすり漬けにお元気ねとほめられる
ストレスは動脈硬化抱いた腹
不整脈脳裏を走る不気味な夜
ストレスの回避熟睡欲しい夜
食欲不振計量また痩せる

倉敷市 撰 喜子

百歳まで幕を引かないスクワット
ライバルになるかもしれん幼い芽
転校を重ね内気が外を向く
泥をこね世界に一つのマイカップ
七夕の笹切る山に建つ団地

美作市 小林 妻子

追憶を辿る紫陽花咲き乱れ
わが影の寂しさを問う蛍とぶ
平和幻想一皮剥けば血の匂い
お墓掃除も習わし通り盂蘭盆会
夏が行く茄子と胡瓜のお漬物

美作市 山本玉恵

銀色の河を渡つて星になる
暖流におぼれて恋を見失なう
冷静な見切り発車の妻の旗
未来図に点てんと守備範囲
佳い事が有りそう窓を開け放す

美作市 大石 あすなろ

頼るのは勘でしかない塩加減
一泊のプランに乗った軽い靴
良妻の仮面を外す仕舞風呂
老化現象似たり寄つたりクラス会
駅裏でふと哀愁とすれ違う

真庭市 国米 きくゑ

頑張らず生きると決めて楽になり
雑魚同士梅雨吹きとばすお喋り会
野菜たつぷりこれも愛だと押しつける
愛というエキスも詰めたお弁当
リハビリの病棟増える顔馴染み

真庭市 福嶋 智恵子

夏休み山地直送母届く
涼み台友と語つたのははるか
七坂を越えて未だ夢捨てられず
荒家の税年金の背に重い
民よりも数が気になる議員族

竹原市 石原淑子

命きらきら百面相の新生児
父の喝頭上に響く雷よ
つつみこむ大きな袋持っている
少年の愛のつぶての待つたなし
何気無い会話に心円うなる

竹原市 岩本笑子

病人になつて病人多すぎる
更年期君は若いと言つてのけ
同病へ話はずむ小半日
夜に降る雨は優しい貌をもち
心配は明日にします髪洗う

竹原市 時広一路

巡る四季バトンタッチの花笑う
その日その日の私を知っている鏡
底辺でしかと支えてくれる愛
心配はしておりません通り雨
気持ちだけ若い気でいてマイペース

宇部市 平田実男

お手本にされる人生つまらない
お迎えが来た日が定年だと農夫
コマ―シャル嘘でなかつたのは値段
被害者へ終身刑となる時効
楢山は老人ポストかも知れぬ

美祿市 安平次 弘道

脚本にないキャンセルを強いられる
追伸へまだどん底を抜け出せず
見栄張つても蟻の列には適わない
一切を流せば胃の腑軽くなり
遺産分け拜金主義は嫌いです

東かがわ市 川崎 ひかり

じっくりと煮つめています明日の夢
ハードルを上げて明日へジャンプする
奪われた生命の重さどう裁く
正直を後生大事に生きた亡父
一円玉けとばす勇氣ありません

東かがわ市 清川 玲子

カラスの視野が見逃がすことの無いゴミ日
割り切つてみれば腹立ち消えてくる
邪魔だけど根性の芽はそのままに
返り咲く野心を秘めた土中の芽
じゅんさい取りのばあが乗つてる盥舟

東かがわ市 原 賢

何ひとつ掴みとれない千の夢
結びめの数だけ耐えてきた絆
争いの渦から逃げる場所がない
生きている証に朝の卵割る
寂しくて焼酎濃いめに割つて呑む

東かがわ市 伊勢 八重子

一日を小さな善意で満たされる
自然体に生きて明日の風を待つ
劣等感バネに飛躍の時を待つ
此所だけの話が妙にかかると
柔軟に好きも嫌いも味方にし

松山市 宮尾 みのり

皿に盛るセンスレシビを引き立てる
いたわつてくれてもギブス外せない
食卓のメモ母と子をつなぎ止め
逆転の発想気持楽になり
言訳は下手ひまわりは一本気

松山市 高橋 宏臣

老眼に乱視の混じる遠花火
崩すのが楽しい時もある積木
疲れたと言わぬこつそり休んでる
ご自由な蝮一びき瓶の中
間延びしたうどん姿を決めかねる

松山市 古手川 光

井戸端は今日も社保庁扱き下し
殺人のニュースまたかと驚かぬ
疑つてる訳ではないと疑われ
幹部だけつやつやしてる飢餓の国
居眠りが俄然元氣を出す選挙

大洲市 中居善信

さて何の事であったかメモ一つ
色っぽい人だ斜めに傘を差す
杭一つ流れが変わる訳でない
貫禄とは僕のお腹の事です
錯覚のまま五十年が過ぎた

西予市 黒田茂代

ひと恋しくてほうたる闇に灯を点す
集団美競い合ってるラベンダー
日傘くるくる 嬉しいことがありまして
茄子胡瓜戴く時は一どきに
眼鏡無しで見るとわたしもまだ若い

高知市 小川てるみ

生きて来た過去を白紙などに出来ぬ
アドバイス受けて心のギアチェンジ
苦労したお陰真面目な子が二人
涼風がうとうとさせる朝寝坊
誘い水だろうか鍵が置いてある

高知県 赤川菊野

さっぱりとした性格が人を呼ぶ
呱呱の声もう一流のイゴッソウ
シングルという母親が街に増え
八十路坂一日一日を噛みしめて
お人好し社交辞令を真に受けて

高知県 小澤幸泉

悲しみが私の中でとけはじめ
待合室に愚痴とうわさを連れてくる
終りたいまだ終らない病休記
このままでよいと納得させるだけ
辞世句はまだまだ描けぬ黒い画布

唐津市 市丸晴翠

遣された父の魚拓をまだ越せぬ
盆栽に柔と剛とを籠める父
ひよいと置きあちこち探す無駄重ね
性善説頼りに年金支給され
宇宙遊泳父の書齋でしてる僕

唐津市 坂本蜂朗

さあ古希だしっかかり靴の紐結ぶ
自慢の子ああ東京へ行つたきり
故郷の星屑両の手にあふれ
もの忘れ自覚しているから恐い
家でもう慣れております皿洗い

唐津市 宗水笑

つもりでは悠々自適退職後
ITの河を筏で下る老い
妻留守に寂しい音の家の鍵
日替りの処世訓です気軽です
老齢化鈍感力を鍛えねば

唐津市 井上勝視

我ながら意味が解らぬ酔うたメモ
残される怖さやっぱりに先に逝こ
ステテコにこだわる老いの夕涼み
一億のトラウマ消えぬ夏の雲
不揃いの皿にドラマが隠れてる

唐津市 山口高明

人間の牡は夢見る浪漫派
金額を書かずに貰う領収書
その昔満州浪人伯父貴逝く
江戸っ子の寿司はコハダと穴子とか
スッポンの生き血が良いと体験者

熊本市 永田俊子

しりごみをしてきた私の負の頁
私の背な見る子居なくてよかつたよ
あの角を曲ればよかつた負け惜しみ
時どき役立つ信玄袋の知恵
クイズ全解卒寿にしては上出来だ

熊本県 高野宵草

奇麗好き夫の部屋に撒く叱言
大人にもなれぬママ持つ児の不幸
相槌で聞く忍耐も恩返し
控え目な旧い美德が蹴散らされ
ポケットの硬貨も磨く洗濯機

熊本県 岩切康子

梅豊作おすそ分けなど考える
久々に歩く街並風変わり
先生の手本を抱いて意欲出す
土砂降りの中歩いてる下見役
よい返事今日も楽しく暮せそう

シドニー 坂上のり子

幸せはけんか相手がいてること
距離を置き過ぎて揺れ出す心の灯
目を凝らしあみだ籤したうどん代
宇宙船が棄てたゴミ空飛んでいる
娘に育てられて来たのに気付く日々

砂川市 大橋政良

平均寿命までは時間がありません
八百屋横町故郷の匂いを嗅ぎに寄る
道草を覚え情緒に幅が出来る
人間の部屋に獣の匂いする
方円の水に浮いてる嘘のいろ

弘前市 今愁女

五月雨がときに大蛇となり変る
布袋草浮かべて満ちる金魚鉢
降る雨をはじき茄子のよく育つ
ひまわりとお日さまだけのクレヨン画
飯の世のただひたすらに蝉しぐれ

弘前市 櫻庭順風

横浜の地下鉄線で遭う奇遇

ホテルまで心尽くしのお出迎え

雑踏にもまれてロスが気にかかる

はやる気か交通違反するなんて

やっぱり津軽方言が出てしまう

弘前市 高橋岳水

少年のひと日に還すネブタ笛

山彦の感度も試す山開き

戦いの形に並ぶ朝の靴

強がりの背なに浮き出る孤独感

後悔の視野をストーンと陽が落ちる

弘前市 須郷井蛙

守らないゴミのマナーに腹が立つ

ボカの数記して老化を確かめる

引越しがドカッとゴミを置いて行く

特売のチラシに財布待機する

反対はしても最後は数に負け

弘前市 岡本花匠

抱き締めた子に踏ん切りと愛情を

かたつむり移動の列に仰天す

残り火をやさしく煽る風がある

雑草も神慮の露に育まれ

パッカスへ感謝のブドウ摘む農夫

弘前市 福士慕情

木登りが下手で美味しい実が採れぬ

山の幸みのり少ない熊の鬱

良性と聞いて胃カメラほっとする

寝たまんま蛍光灯の紐を引く

真夜中の電話不吉な音で鳴る

弘前市 相馬銀波

小心を隠すと語尾も乱れだす

プランクを数え続けて来た指だ

体調に合わせた今日の恋の歌

農業に頼るりんごと秋を待つ

空高く澄んでトンボの秋です

黒石市 相馬一花

脚線美誇示して踊るアロハオエ

ターゲット見つけてむしり取る詐欺師

平成の時代ももてる柳腰

資産家も小銭を持って行く社

早朝に起きてカボチャに浮気させ

黒石市 佐藤古拙

官製のマーチはいつも勇しい

椰子の実は見えずハンゲル文字のごみ

夏が来た言葉は要らぬ冷や奴

太枝にプランコ吊すりんご村

天明碑うしろに続く休耕田

十和田市 阿部 進

差しあげるものはないけどこの笑顔
ほろ苦いふきのとう食べる誕生日
合格は勝ち取るものであるという
ありがとう何時か笑顔になつて
美しい橋に心をうばわれる

平川市 小寺 花 峯

百枚の下書き捨てた句の地獄
訳ありの拳はグーを閉じたまま
ラーメンも延びました散り際の花
へらず口達者な風はわがままで
定年の朝で指折る友の数

さいたま市 八 田 敏

十三年辛い片麻痺堪えた妻
余命わずか言われ半年生きた妻
日々のち減りゆく妻に付添つて
好きな百合抱かせ最後の誕生日
延命の措置止め祈るよき旅路

さいたま市 星 野 育 子

ペン先が口八丁を黙らせる
今だから言える話のクラス会
門限は無いが帰りは急ぎ足
蜘蛛の巣を手刀で切る初登山
電車内全席優先席がいい

日高市 根岸 方子

賛同者ばかり集めるまつりごと
菜園へ恵みの雨がせき立てる
おかつぱに笑顔をもらうボランティア
絵手紙に心模様が透けて見え
相棒の真意が透ける贈り物

柏市 永 峰 宣子

殺虫剤買えば夫も同じ物
来客に合わせたようにつつじ咲く
入院へ慌てて買いに行くパジャマ
退院に介護のおまけ付いて来る
さあやろうと思うがついて来ぬ体

柏市 河 野 桃 葉

面映い顔で実家の客になる
納税を済ませて神とすれ違い
助手席で地図を片手に指図する
泣きメソが飲んだら急に笑い出す
店持つて妻と二人で胸を張る

東京都 長谷川 康 子

ゴッホ作額はみ出して燃える花
つぶらな瞳なにか言ってる雨蛙
またひとつ減ってる仏壇のオハギ
日程が押してる雨の甲子園
糖尿もガンも虫歯も病むミイラ

東京都 小川 賀世子

八王子市 播本 充子

雑草の意地に負けてる梅雨さなか
冷蔵庫の整理している今日も雨

軍団のデビューを朝顔で飾る
格差あり磐梯山の裏表

いい仕事妥協を知らぬ匠です

退会を四角四面に届け出る
いやしくも講師逆ギレなどしない

仏師に似た仏の面見てあきず

本当に記念になった記念品

月下美人のいよいよへ真直ぐ帰宅

八王子市 川名 洋子

東京都 清原 悦子

耕せば意外な花が根をおろす

数時間羽ばたきますと主婦の午後

一票の差でもやっぱり負けは負け

飛んでゆくヒナの雄姿に夢をかけ

古地図が教えてくれた曲り角

甲子園首長くして球児待つ

手漉き和紙ほんのり香る葉書くる

アンテナを張りめぐらせて妻元氣

住み替えた土地に馴めぬ足の裏

名ばかりの商店街を散歩する

東京都 岸野 あやめ

横浜市 小野 句多留

罪のないジョークに刺され胸の傷

禁止令迂回路を取る輸出入

御趣味はと問えばカタカナ語の答

現在地いい妻ですといつておく

切り結ぶ情報網とスパイ網

四苦八苦お犬サマへの手術代

衣裳持ち明日着る服が無いと言う

朝顔にまず聞かせてる一人言

降れば愚痴照れば暑がる老いひとり

医者不足たらい回しをする苦汁

国分寺市 野崎 勝

横浜市 菊地 政勝

老眼鏡無しで読めるのが自慢

年金はまかせなさいと見得を切る

年金の生活どこか物足りず

見返りのない税金を増やされる

コーヒーを飲んでもお茶が欲しくなり

政権はどうあれ生きる術探す

結局は順応してる妻の味

八掛の齡で盛んな好奇心

お茶にする 言いつつ酒を注いでいる

清浄な空気を探す赤とんぼ

可児市 板山 まみ子

留守電に空き巣も知った留守の家
聞き流すことも疲れる手前味噌
災害のニュースで買った非常食
戦争を知らぬ男の机上論
おすそ分け実は困った余りもの

可児市 鶴留 百合

眠られず本を閉じたり開いたり
定まらず家も職場も身が入らず
盆経の老僧威厳満ち溢れ
野道行くなぜかスキップしたくなり
山が呼ぶそんな気持ちかわかる今

静岡県 菌田 猿杵

恙なく今日も暮れます夏の月
闇の中少し動いた石地蔵
矢車が鳴りつ放しで家守る
封筒の底まで覗くラブレター
本物を見たくて外す色めがね

大山市 金子 美千代

酔い少し回り気分の乗った歌
欠点は長所下から斜めから
心配を子にかけている医者嫌い
自尊心くすぐる言葉掛けて寄り
決心の音をポストが確と聞き

大山市 関本 かつ子

梅漬けの色も程良く梅雨が明け
年輪の吐息聞こえぬチェーンソー
力抜けと言われて抜けぬ菌科の椅子
タクシーも昼寝小陰の一等地
顔変えてまた食卓に茄子きゅうり

大山市 吉田 幸子

斬新な風になびいていく若さ
少年の本音がうづくつむじ風
風向きが変わった朝のお味噌汁
介護には楽でしょ小柄自慢でき
足運ぶだけで応えてくれる畑

愛知県 早川 遯行

散骨がいいアルプスのど真ん中
スギ葉の根性には頭が下がる
あじさいの見頃へ雨の日を選び
出来る時はいつべん毎日キユウリの日
我儘もいいではないか言えるうち

愛知県 三浦 きぬ

一人生えの南瓜に夢を託す庭
百円シヨップ財布気にせず買ひあさり
多病息災平均寿命越えました
党首討論お金に困らない面々
あと少し待つて亡夫にメールする

京都市 高島啓子

母子草だけは残して草むしり
雑用をしながらチャンス待っている
地下鉄の窓姿見の役もする
こちら寺町大中小といえる蕨蚊
心臓のくすりのように水を飲む

京都市 榎本宏子

朝から雨映画見る日と決めている
大満足ひとりで刈った草の山
草引きのお姿見ぬが元氣かな
舌二枚持つている事秘密です
投げられて妻は避けずに投げ返す

京都市 西村益子

今が花歩ける内と時刻表
足仲間夫に感謝山歩き
落ち込んでも切っ掛け拾う登山道
雨の日はちよつとゆっくり料理する
夫ゴルフ私リュックの日曜日

京都市 三宅満子

派遣さん明日をも知れぬ根なし草
願い事重くて笹もしなだれる
とりあえず身体動かして考える
アリバイに映画半券持ち帰る
瓜二つ名札のいらぬ参観日

亀岡市 井上森生

子育ても同じ伐る枝伸ばす枝
問題が判っただけでもよい国会
頑張りは無用お金のためならば
いつの間に消えたか畏れも敬いも
温暖化宇宙の意図に気付く時

長岡京市 山田葉子

答案の白紙が異議を唱えてる
先入観白い心に映り込む
目撃はしたのに記憶白のまま
素麺を飽きもしないで食べて夏
カラフルにプラン盛り込む夏休み

大阪市 神夏磯典子

どうしたら命延びるか医者通い
じつくりと話せば何でもない話
快晴な旅に不安な雨男
青筋を立てて本気がやって来た
暗雲をふり払うよう木魚つく

大阪市 川端一步

今年こそこの眼にピカソルノアール
山が好き僕の筈が聞けるから
いつまでもいい顔をして貧乏性
この辺で歩んだ道を清書する
大津絵の飾る旅館をふと思ひ

大阪市 前 たもつ

誕生日海の日になり元気です
信号機五時の起床に動き出す
無料バス置いて自転車スニーカー
洗濯物どっさり干して元気出す
喜寿前に元気の元は腹八分

大阪市 鶴田遠野

少しなら呑んでいいよと聴診器
懐で出番を待っている拳
懐メロに悲喜こもごもが甦り
来年の連休にまで予定入れ
人生ドラマ筋書きにない女と逢う

大阪市 小谷集一

喜びと同じ数だけ悔いを抱く
みな脱いでしまえばきつと楽になる
登るより坂道下る難しさ
正直に寸志と書いた鬘斗袋
目指すものあつて元気に生きられる

大阪市 古今堂蕉子

説教をされ罰金をとられてる
ランドセルゆらし給食食べに行く
かけがえのなさが分るに五十年
美しい国にいいわけはいりません
結婚とまでいかぬ恋ばかりして

大阪市 升成好

降りだした雨 広重は線で描く
行間に恋の鼓動が埋めてある
あきらめを境に夫婦らしくなり
流水は岩を固いと思わない
母の愛その器には底がない

大阪市 榎本舞夢

満天の星に問うてる母のこと
さり気ない気遣いしてる老夫婦
にぎやかか淋しがり屋の裏返し
あきらめた頃に届いた落し物
近い人ほど遅く来る待合せ

大阪市 榎本日の出

プライドをすっかり持ったバラばかり
ユズ風呂がそつと優しくくれました
お互いに上手になってゆく返事
仲の良い友がゼンマイ巻きにきた
やるだけはやつたと言ったボールペン

大阪市 福岡末吉

今日の無事洪茶供えて母に告ぐ
彼我ともに意見譲らず笑い出す
十年を単位に明日と心得る
貪欲に気負う姿勢がチャンス呼ぶ
遅咲きの雄叫び勝ちをプレゼント

大阪市 岩崎公誠

手土産をこれはなんぼとすぐ値踏み

メガネ買う視力検査で目を回す

三流の知恵で図太く生きている

ワルだから曲りくねった知恵も持ち

牛コロに鶏も羊も混ぜて売り

大阪市 近藤正

大阪に高まる期待彬の碑

談合はいまも息づく奥座敷

年金が人生履歴映し出す

貧乏が下方修正ホームレス

ほんぼりが揺れる川床貴船川

大阪市 井丸昌紀

出し惜しみしているうちに賞味切れ

じっくりと煮込まれカレー夜を待つ

インテリと煽て雑用押し付ける

午後一の会議昼寝と決めている

お見送りお迎え付きで塾通い

大阪市 清水絹子

伝統のこれが家宝と生花展

こどもニュース御浚いもかね仲間入り

亡母の棗孫の茶道に生き返る

大事な一票生かすに熟慮参院選

マンションの窓にようやく輝る産着

大阪市 大川桃花

巻さずしと電車の椅子は端が好き

スプーンで食べる西瓜に味がない

玉の輿蹴ってしまった若かった

押されるより押して幸せ車椅子

みかんと西瓜いっしょに並ぶ世紀末

大阪市 西川更紗

バスツアー愚痴も自慢も聞いてあげ

携帯で写真に撮った旅の膳

雑踏の孤独衝動買いをする

十分に儲けた後の五割引

決断が揺れて幸運また逃し

大阪市 中村れんげ

安倍劇場三閣僚の交代劇

今朝もまた型にはまったお詫び像

コムスンに老人の杖けとばされ

青テント英字新聞読みふける

ペランダで孫が驚く大みみず

大阪市 熊代菜月

まだ女日焼け気にして持つ日傘

宵月にのぞかれています露天風呂

泣く虫も鳴かない虫も今を生き

菩提寺の僧も揃って更衣

花吹雪舞ってあじさい雨を呼び

大阪市 川原章久

映画館一つ二つと消えてゆく
銭湯がリフォームされて高くなり
だんじりの稽古囃子に混じる雨
樹の影のベンチで二人よく喋る
ゆっくりの油断した頃消費税

大阪市 奥村五月

苛めっ子今は世話役クラス会
貧乏で鍛え弱気は吐かぬ父
妻の留守緊張のない盗み酒
認知とは言われたくない忘れ癖
江戸っ子に引け目は取らぬ河内弁

大阪市 津守なぎさ

安否問う友の電話に活気づく
夢でならどんどん走る草千里
旅友はジバング身障回数券
エレベーターある駅探すスケジュール
散策の京ルンルンの人力車

大阪市 松尾柳右子

堤防のウォーク小鳥に良く出合う
セキレイのつがい待つ道今日の幸
浮き雲と一緒にウォーク定年後
ヘッドフォンバスの中で役に立ち
三日月が一人歩きを眺めてる

大阪市 伊藤博仁

待ち切れず百均で傘雨が止み
吉野屋へ牛丼の並食へに行く
毛虫さん孫が来るからのでんか
しつこいな保険のメールすぐにポイ
長袖にゴールドの腕仕舞い込む

大阪市 津村志華子

喜びを誰に分けようひとりぼち
ある日ふと歳を忘れた好奇心
生かされて朝の光に気を貰う
他人さんのタブーに触れぬ思いやり
浮かれるに少し足りないワンカップ

大阪市 小糸昭子

病んでも二人で居ればそれで良い
ごめんねの一言で済む茶番劇
何時のまにか心に奢り住みついた
毎日が日曜なのも辛いなあ
イラクから早く返して死ぬまでに

大阪市 岩崎玲子

庭の隅雨がはねてる手水鉢
キヤラクター集合している園児傘
花も樹も雨と遊んで光ってる
梅雨時はあれもこれもと悲を流し
陽がさして胸にキラキラ問うてくる

大阪市 岡本久峰

どたん場でこんなにあつた馬鹿力
とどのつまり年金だけに縋る老い

詔勅で拾つたいのちいとおしむ

医者知らず頓着しない保険料

ソ連軍の無法に泣いた八月忌

大阪市 小泉ひさ乃

一ぱいのお茶ナースの手あたたかし

まことしやかに噂飛び交う事件事故

野次馬は怪我大きい方がいいらしい

明日は明日今日は陽気に流れよう

ただ祈るほかなし傷の後遺症

大阪市 渡部さと美

一段落地下街泳ぎ宇宙人

つるの強さ掴んだ枝へ引きしほり

霧雨なら餌を稼ぎに雀たち

人工耳に容赦はしない蝉しぐれ

音ぜんぶ左へ集め人工耳

大阪市 池上清治

鈍だけどひそひそ話よく聞こえ

雑念が次次浮かぶ般若経

お経二分持て成し八分院主様

知らぬ間にみなデジタルへ衣更え

蚊帳の店生地に頬摺りしたくなり

大阪市 中村穀子

楽しみの植木に邪魔な草むしり

六十年添うと夫婦も貴重品

老夫病むフラフラですよ頼られて

何糞と頑張り過ぎて続かない

頑に成らずに嫁に甘えてる

池田市 栗田久子

松茸に思案迷わず栗を買う

名月にやはり団子は欠かせない

七草はそろわぬまでも月見る夜

気まぐれな台風気まぐれな進路

ダイエツトしてもおばちゃんの体型

和泉市 西岡洛醉

窓際にそよ風雀語りかけ

文机に雑学ぎつしり詰まつてる

階段の如き日がなを追う余生

人生の夢追いかけてカレンダー

生命線生きる気負いの手を広げ

和泉市 横山捷也

賑やかだ隣ポリーナス出たらしい

あじさいの首に躊躇するハサミ

語り部の老女慣れてる国なまり

不揃いのナスをよろこぶ無農薬

一言の電話よろこぶ母が居る

泉佐野市 山本蛙城

受けている年金返せとはまさか
ヒト科にもケモノ遺伝子ミス居そう
生かされていますいっばいメモ貼って
ケータイを持たされ開けたことがない
ああ日本性善説で生きられぬ

茨木市 藤井正雄

体裁は悪いが美味しい自家クッキ―
久しぶり瘦せた太った同期会
夏瘦せを案ずる母のフライパン
大海を悟る蛙のアルバイト
ずるいのを自覚中間派に座る

大阪狭山市 矢野梓

颯爽と自転車走る道がない
ケータイをベットのよう持ち歩き
御免ねと一言いえば許せたが
余所者のように古里へ戻り
腹八分これがまだまだ守れない

交野市 森本弘風

地下街の出口番号だけ覚え
温泉も滝もポンプでリサイクル
酒飲まぬ奴の会へは断り状
読めませんが意味は分らぬカタカナ語
大臣の発言妻も文句言う

交野市 田岡九好

食べ歩きばくの場合は駅うどん
海を見て少し心を解き放つ
水溜り避ける大人の了見で
当分は老人会に入らない
ご旅行でよろしかったでしょうかとサ

河内長野市 村上直樹

ポーナスもゴルフもなけりやないですみ
美しい国年金で泥まみれ
時事放談肴に通う縄のれん
手料理を褒めて会話を弾ませる
蝉しぐれ俄然真夏が奮い立つ

河内長野市 山岡富美子

塩胡椒よりも効いてる褒め言葉
白黒をつけず収めてからの鬱
雑穀が入りグルメになるメニュー
釣堀の魚に上手く遊ばれる
あつさりと過去をほうむるシュレッダー

河内長野市 坂上淳司

汚しては駄目よ値の張る貸衣装
下ろすのは日延べあやしい空模様
浮き浮きと子どものように旅仕度
常備薬しこたま持って旅に出る
骨折のギプスの中がむず痒い

河内長野市 井上喜酔

岸和田市 岩佐ダン吉

道産子の顔をつぶした豚ミンチ
悪友が朝の血圧尋ね合い

配達もビジネス笑顔絶やさない

若者の朝は駅前ハンバーガー

ドクターに肩を叩かれもうお歳

河内長野市 水谷正子

清流の証拠はたるが三つ四つ

清貧の政治家出るを待っている

自己管理出来ずテレビで頭下げ

はつきりと物を言うのは選挙前

イチローの活躍ぶりを観て眠る

河内長野市 植村喜代

あれもこれも持たせてうちは何しよう

一歩出て女は喋って元氣出る

ひと眠りしたらその後眠れない

世界の物食べて信じていいのかな

親らしい親も少なくなつて行く

岸和田市 小島笑司

どの党もお為ごかしなマニフェスト

前回は年金未納で大騒ぎ

インテリが三段腹で様はない

雷が馳せ参じます臍ルック

骨までも愛されている鯛の粗

車椅子新緑浴びている背伸び
名札には仏頂面と書いておく
自分史の真ん中あたり花の章
氣骨ある男がいつも少数派
旗色を鮮明にして立つ戦

岸和田市 堤 植代

この友が居るから何時も救われる
美味しい笑顔がほしく頑張れる
立ちどまりペットの話し盛りあがる
メ切が来るからネジを巻いている
創造のよろこび元氣くれている

岸和田市 原 さよ子

美しい首だと思ふネックレス
ばあちゃんのヒットスーパのくじ当る
庭いじり名札と違う花も咲き
家庭から煙が消えていく電化
ただいまが一目散に冷蔵庫

岸和田市 森 元 ふみよ

シナリオが無い人生の積み重ね
独り居で凜と生きてる素晴らしさ
百歳が泰然自若生きており
一筋に打ち込む趣味の有る仲間
過去捨てて愚痴一つなく老いる術

岸和田市 雪本 珠子

夕焼に背中押されてプロポーズ
お互いに刺激しあえる友が居る
定年後独裁支配崩れだす

悪者にされてるらしい風当り
ホコ先がこちらに向いて来る予感

岸和田市 土橋 房枝

我が家にも花嫁の来る笑い声
新婚の息子はもはや嫁のもの
知恵湧かずやつぱり最後神頼み
久しぶり逢った彼女はプチ整形
山寺のみみじ散り敷く道を行く

岸和田市 井伊 東吉

あちこちで蒲団を叩く梅雨晴間
野球留学決別出来ぬ高野連
またもやの事務所費揺れる農水相
告発が無ければ民が馬鹿を見る
養殖のうなぎに餌の匂いする

堺市 柿花 和夫

親馬鹿の愛を詰め込む冷蔵庫
恐竜の骨一本で町おこし
裏道を知らぬ男の破れ靴
自分史に消しゴム使わない誇り
チラシに混じって朝刊が届いた

堺市 村上 玄也

失敗談聞かせて心開かせる
マニユアル化された謝罪で素っ気ない
記憶にはあるが記録は残ってず
表情は穏やかだけど隙がない
横道にそれた話が戻らない

堺市 石堂 潤子

夫より本気で余生考える
亀さんを裏返してはいけません
救急車ご近所さんが覗いてる
おじいちゃんが旗振りしてる通学路
ビル風が短い睫毛くすぐらし

堺市 山本 半銭

佐藤錦十粒豊かに夜が更ける
北斗星七つなぞって恩師の忌
気に入らぬ波も泳いで来た自信
自分への模索が続くメモの文字
週一回鍼の治療が効く気配

堺市 矢倉 五月

良い姿勢ほめられボンと胸たたく
そこそこの時は黙って食べてくれ
見る人はやはり見ている無礼講
すれ違い傘傾けて会釈され
元氣よい電話元氣な声で受け

堺市奥 時雄

難儀した汽車の煙を嗅ぎにいく
老け役がしつくりとくる三枚目
転動に電子レンジがお供する
親切に見えた分だけ質悪い
ふるさとの磯辺恋しい夏が来た

堺市加島 由一

立ち飲みでひとりで祝う誕生日
葬式の帰りに並ぶ宝くじ
褒められてますます好きになるゴルフ
孤独死の万年床の酒の瓶
パリッ子は柔道が好き禅が好き

堺市齋藤 さくら

人まへの恥も大きな糧となり
カルチャーかお笑い塾か分からへん
酒を飲むために父さん歩いてる
駅前のマンションここは別世界
ズボン下げおへそ出す服流行ってる

堺市源田 八千代

いそいそとディーサービスへお洒落する
ちっぽけな悩み吹き飛ば大自然
赴任地の天気図も見る親心
老老介護明日は我が身と心得る
テニス サッカー家にも居ますプチ王子

堺市西村 りつえ

笑い足らぬ日は鏡見て笑います
ほんわかと一度酔いたい下戸の靴
咄嗟には逃げ口上が出てこない
理不尽に突っかい棒ははずしたる
防犯カメラ塵出すたびに写るボク

四條畷市 吉岡 修

口先でない野心家だ汗してる
二学期はぐっと少年ばくなつた
でこはこの轍のあとを子も辿る
もれたって笑うしかないあみだ籤
追いつけばするりと逃げる影だった

吹田市野下之男

失言に気を付けなさい妻の声
お社で指切りしたが人の妻
ちびっこが持つ携帯に目を外らす
牽牛も年に一度の愛を抱き
郭公も眠り勝ちだよ尾瀬の午後

吹田市太田 昭

遺言書白紙のままの筆不精
まだ若いと妻に暗示をかけられる
佳い知らせ記念切手を貼って出し
流行り医者愚痴をたっぷり聞いてくれ
繋がれた犬に我が身を振り返る

吹田市 木下 敏子

金婚の旅路に選ぶ軽い靴

金婚へ感謝感謝の日を送る

やることがまだあり爪を切り揃え

いい方に解釈をして泳ぎきる

ねばねばを食べて粘っている命

吹田市 早川 清生

心肝のキャリアへおまけとして胃癌(病あつく 5句)

次週切る胃痛と回転ずしを食う

手術もう闇夜の計器なし飛行

妻と二人書置妻の前で書く

スマートでないなお芝居めく辞世

吹田市 須磨 活恵

友の計を風に聞かされ沙羅双樹

事故批判転んでからの杖ばかり

あの事も視野に入れてと念押され

冗談か本気かアドリブが刺る

暮しから消えた唐傘下駄の音

吹田市 穴吹 尚士

さりげなくコロンで隠す加齢臭

そのうちに閻魔の庁へ行く予定

肩書きのわりに碎けたお人柄

副賞のない賞状で褒められる

あるがまま生きるが良いと腹くくる

吹田市 山本 希久子

なんば花月しばらくこころ遊ばせる

お月様教えてほしい余命表

桃の傷ゆつくり地球温暖化

骨太の方針見守るだけの孫

熟年の恋マナーモードに切り換える

吹田市 大谷 篤子

筋書きの通りに育ち反抗期

一日の予定の中に昼寝ある

仏壇の果実が丁度熟れるころ

よく食べて泣きたいことを忘れてる

眉をかきよそゆきの顔できあがる

吹田市 瀬戸 まさよ

戦する構え積まれていく怖さ

しとしとと降る言葉よし雨も好き

ティッシュならすぐ稼げます梅田地区

牛や豚国産にして減らす量

レシートをすぐ家計簿につけますの

高石市 浅野 房子

花時計狂って五分待たされる

親友に逝かれ習わぬ経をよむ

心配は浜の真砂のように湧く

介護など誰もしてくれそうにない

一手間を惜しんで倍の苦勞する

高槻市 井上 照子

国会の金の議論は治まらぬ
教育の改革人の道を説け

高槻市 富田 美義

古い友と近況語るレストラン
年一の草引き団地見ちがえる
大食を競うテレビに怒りあり

忘れたい過去は樹海に置いて来る
平和ボケ続き人心ささくれる
透き通るファッション好きな静電気

高槻市 乙倉 武史

イチローの快挙日本の株上がる
声枯らし理想を喚くマニフェスト
団塊の世代へ寂聴処方箋
品格を問われて思い当る節
締め切りがある人生で忙しい

息吐いた隙に弱点暴露され
遊ぶ子へ夕陽の扉すぐに落ち

高槻市 西谷 治三郎

ふるさとの山は変らずほっとする
しくじりを見破る妻の勘のよさ
肩書が消えてプライドだけ残り
酒飲んで経過語らぬ負け試合
取替えた入歯で笑顔光り出す

病院食ベッドにあぐらかきひとり
散歩道お隣さんに負けてない
傘寿超え用心棒と八十路行く
開票日落ちても笑てる掲示板
派手かしら一応聞いて派手を着る

高槻市 杉本 義昭

高槻市 左右田 泰雄

雲の上と思った人がいる酒場
絞り込み足りぬ男が大ジョッキ
ふる里の地図から消えた僕の町
若造と言われ発憤した頃も
俗論を斬るペン先がよく走る

高槻市 佐甲 昭二

何かしら物言いたげな泣きほくろ
冷し過ぎ汗をかいてるビール瓶
グリーン車でちよっとセレブな乗り心地
胸中を察し見て見ぬふりをする
がらくたの山はもつたいたいのないのせい

高槻市 峯村 勲弘

ひどい目に遭って人間肝座る
灰になるまでは尽きない悩みごと
生きている証しよ辛い肩の凝り
真ん中にペットを据えて家族の輪
舌の根も乾かぬ先に謝罪する

高槻市 傍 島 克 治

高槻市 執行 稲 子

肩書が消えてお世辞も消えてゆく
靴ばかりでも下駄箱と言うこれいかに
常識のずれ親子三代ずれにずれ
それみてみ長寿の秘訣酒だとか
貸す耳持たぬ只今恋の真つ最中

高槻市 大 崎 侑 子

とりあえず留守電だけで済ましとく
男ならトコトンやれと尻叩く
当面は女らしさを武器にして
気弱さが難儀な役を引き受ける
気まま故仲間外れも望むとこ

高槻市 瀧 本 きよし

手切金あればとつくに別れてる
遊ぶのは体にいいと誘う鬼
考えても無駄だと鬼が笑ってる
俄雨傘さしかけてくれた女
癩潰すイメージ描き生きてます

高槻市 生 田 義 一

今日ほどの顔で行こうか朝の靴
見飽きたね保険のCM逆効果
同窓会傘寿ものは意気盛ん
口は災い永田の町は震度七
地球儀を回し世界を夢の旅

地球の裏の子等豪雨に泣く哀れ
レモンの香絞って甘露好いお味
打明けてからしつくりといかぬ嫁
梅雨時は葉膳食と決めた案
チャイム鳴るこっそり覗く息ひそめ

富田林市 片 岡 智恵子

わだかまりすんなり流れには添えず
便利にされ弾めない日のうっ溜る
凡大臣の失語数える頭痛症
老いの五感錆びてひびかぬハーモニカ
目標からライバルとなり横綱に

富田林市 藤 田 泰 子

雲湧いて宙に浮かんだ富士の峰
八合目薄い空気の中に居る
杉苔に抱かれやさしい石になる
独り身のスタンスしっかり弁える
ショートカット重い頭を軽くする

富田林市 大 橋 鐘 造

有頂天壁の厚さを未だ知らず
捨て切れぬ絆を抱いた肩の凝り
真つ直ぐに歩いて風に笑われる
本音から少し外して言う意見
心まで映す鏡に怖くなる

富田林市 中井アキ

忙しい人から貰うエネルギー

カラオケの応援音痴も数のうち

半年ぶり息子と語り合うビール

落日と明日の夢を追うている

女言葉優しくひびく三年坂

豊中市 藤井則彦

自然からしつぺ返しを食うヒト科

鈍そうに見えてれつきとした博士

あやふやな問で本音を探り出す

愛娘に命を懸けた腎移植

馴れ初めを棒読みで聞く披露宴

豊中市 水野黒兎

先ず事件起きて整備を急ぐ法

パソコンは推敲の跡残さない

少子化に雷親父見当らぬ

蟬の声保険CM妻の愚痴

ボンコツ車にもガソリンを屋台酒

豊中市 安藤寿美子

極楽と地獄はきつとつながってる

まちがえた方がたまたま正解で

皆で囲むキレイな先生やっただけ

年金で六十日を食いつなぐ

偶然のような顔して待ちかまえ

豊中市 江見見清

講釈が上手くゆっくり飲む新茶

本人が親を気遣う受験の日

逢えば喧嘩気持ち通わすのはメール

皆笑うだから私も笑つとく

新聞が重いぞ今日は週末だ

豊中市 吉田あずき

美しい色紙で折るダマシ舟

からくりの種や仕掛けがある政治

雑草もそれぞれ歌を持つている

花の香の方へ方へと向く散歩

ITの風に乗れずに流される

豊中市 岸田知香子

融通のきかぬ人守り六十年

六十年化石のようにへばりつく

戦中派許容範囲を守り抜く

我が尺度以外許せぬ独身者

雨不足夏の渇水よぎる梅雨

豊中市 山門タミ

最上階砂糖壺には蟻の列

姿見に魔法使いかあれつ私

七夕に古人のロマン恋う

爺と孫手を振り合って通学路

終焉へ雑念まだまだふっきれず

豊中市 坂上高栄

盲導犬二度の職場は幼稚園

梅雨の空雨雲散らし照りつける

都心温泉地下はマグマとメタンガス

しとしとの空一面の植田風ぐ

ミンチ肉豚やら馬が牛になる

寝屋川市 平松 かすみ

風呂の栓二度も見に行く昨日今日

おかげ様ネギは買わずに済んでいる

万物に雄花雌花のある不思議

ママチャリにマツカの蔓が絡みつ

き 神様が私困らす五十肩

寝屋川市 森 茜

切りとればどこも一枚の絵はがき

一等地更地となつて雨洗う

天道虫君も使命があるんだね

緊急事態蛙知ってか空仰ぐ

食べるだけ摘みとる青菜日ごと伸び

寝屋川市 江口 度

朝寝坊先に竹の子みなとられ

ありがとう留守番賃を子にはずみ

腕時計置いた所をすぐ忘れ

マージャンへ机たたいで四人消え

もう石油ないといつかはいうだろう

寝屋川市 籠島恵子

忙しい人から届く無農薬

戴いてばかり甘えてばかりいる

好物を入れると消えるレジの前

戴きものが増えて自分の彩が消え

関係者に交じると近道ができる

寝屋川市 太田 とし子

頼もしや近所に出来た公益社

温暖化心配して乗る冷房車

昼寝して居留守がばれた大軒

バーゲンとお手てつないだ皮財布

ラッキョウが匂い張り切る台所

寝屋川市 富山 ルイ子

娘が料理残さず食べてありがとう

寝た切りも脑梗塞も同年

少しずつ歩かれるのを見てうれし

誘われてうれしく友と歌舞伎見る

鶴彬の句碑建立をありがとう

羽曳野市 徳山 みつこ

船内新聞あすのメニューを盛ってくる(南洋クルーズ)

西瓜バナナもナイフとフォーク船の旅

フラダンス天笑夫妻ふとよぎり

笑顔まだひきつったままカホロ・カオ

海は名画伯よ青のグラデーシオン

羽曳野市 三好 專平

年金も保険金にもチャラにされ

おふくろというのが比喩でないコアラ

球児だけ純真無垢という神話

敗戦のトラウマいまだ完治せず

生きるより死ぬのが楽なウソのはて

羽曳野市 酒井 一壺

切り捨てた尻尾に夢でうなされる

政治劇にしては失言多すぎる

ダイエツト出来てうきうき試着室

この地球人間だけの物でない

百人の意見が一致する怖さ

羽曳野市 吉川 寿美

貧者の一灯ポランティアの笑顔

決心のつかぬカルテとゆれている

つじつまを合わす言葉を化粧する

どうしよう重ねたウソの後仕末

眼鏡ふく振りで妥協点探す

羽曳野市 安芸田 泰子

喝采の余韻に酔っていた不覚

本性を覗かれている酒の量

風媒花蝶の情けを知らぬまま

繕うた言葉に本音の愛が無い

枇杷を買う半分ほどは種を買う

東大阪市 米田 水昇

星かげのワルツでしめるクラス会

母と見た一番星が生きている

植えた苗葉を食べられて茎はだか

月光を浴びて姉妹の露天風呂

青春がこぼれるページサイン帳

東大阪市 北村 賢子

心地よいまどろみ夢とうつつの間

飾らずに命みつめている余生

わたくしのあの日の王子今ゴロ寝

うつろいへ四季折折の風の色

少年の心分析出来ぬ闇

東大阪市 佐々木 満作

温もりが肌に伝わる介護の手

旅先の浴衣はいつも丈合わず

カルチャーにお洒落して出る妻の顔

他人かと間違うほどの娘の帰省

八月は熱き球児の晴れ舞台

東大阪市 安永 春

時空越えのんびり過す青い空

口癖のよいしよこらしよで日が暮れる

瀬戸内ながめ訛なつかし予讃線

棟長の人柄に皆奉仕する

丁寧な挨拶に用心をする

東大阪市 中岡 妙

梅雨どきの傘堂々と杖になり

装いに膝の痛みも包み込む

外出の予定は無いが誕生日

菜園の今日の主役はプチトマト

年金が増えましたよの白昼夢

東大阪市 笠井 欣子

バージロード娘が父をリードする

ユーモアが通じぬ夫で掃除ずき

父の日のうっ憤次の日に破裂

一呼吸ずれて補聴器むず痒い

まあいいか諦め早い夫婦です

枚方市 丹後屋 肇

カラオケに酔い痴れている梅雨の午後

入場のマーチが弾む梅雨晴れ間

滑り込む球児が白い牙を剥く

御先祖を燻して栄転を告げる

舌鼓打って内助を褒めている

枚方市 寺川 弘一

パソコンと会話しているひきこもり

恋もした貧乏もしたわたしのロマン

風下は見ようとしない風見鶏

妹も妻は嫉妬の種にする

ちよい悪は分類すれば善人類

枚方市 海老池 洋

どんなに本読んでも名手にはなれぬ

アルコールに浸けると毒気抜ける僕

重なっても嬉しい酒の贈り物

千円で買う金持ちになれる本

音の美学とくどく樽を出るお酒

枚方市 二宮 山久

六十の手習い始め趣味多忙

熊野古道歩きつかれた木の根っこ

わたらせの湯宿に心洗われる

おとなりの息子夫婦がくれた宿

一年の半分過ぎた六十坂

枚方市 安達 忠央

婚約者連れた息子の誇らしげ

エリートの子をちよつと危がり

親よりも育てた俺に子が懐き

旨そうな話にリスク多すぎる

自然体つらぬき通しながらえる

枚方市 森本 節子

ガス灯点く浪速のレトロ三休橋

綿業会館尋ねて行った記憶あり

あるものでそれなりの料理年の功

着メロが届いてからのいそがしさ

贅沢はしないが白桃だけは別

枚方市 伊達郁夫

損をした話をすれば耳が寄る
スタートの靴はきれいな白だった

目線合い恋の予感にある微熱
糞虫が哲学してる揺れている

逆境の数だけ増えていく勇氣

藤井寺市 高田美代子

なんとなく孤独影法師と歩く

サザエさんのように生きたらと思う

線香の匂いが好きな盆の鳩

嫌だなあ優しい貌の食虫花

人間の雑音ばかり戎橋

藤井寺市 鴨谷瑠美子

胸おどるあかあか点るまつりの灯

指の骨ポキポキ喧嘩売らないで

つぎつぎとギヤグが出てくる酔いはじめ

童顔を見つけ抱き合うクラス会

感激の涙を流すのはおとこ

藤井寺市 太田扶美代

友達は要らんとする夜がある

沈黙のあいだに勇氣溜めておく

さき流すことがとつても下手な耳

褒められた枝を一輪差し上げる

言い訳がこんな淋しい顔にする

藤井寺市 鈴木いさお

億ほど納めてみたい所得税
熱い血が五体の隅にまだ残る

2キロほど痩せて禁酒の紐ゆるめ
いい人と言われ素直に喜べず

親戚に社保庁OB一人いる

藤井寺市 若松雅枝

古里に野良着の似合う母がいる

取れたての紫紺の茄子が目を奪う

美容院一寸女を取り戻す

亡夫のシャツポロダが私には宝

初恋を憶う長閑な海の彩

藤井寺市 中島志洋

台風の進路気にして旅仕度

松茸は今年もご縁なさそうや

みちのくの紅葉訪ねるフルムーン

それからと乗り出してくる聞き上手

約束を果たした夜の旨い酒

箕面市 広島巴子

親子孫離れていても同じ空

鶯とケキヨケキヨケツコ谷渡る

人間が生きる範囲を狭めてる

美辞麗句心と顔はよそ見する

伸びすれば憂さはどこかへ消えて行く

守口市 井上桂作

わが町も地下鉄通り都会並
禁煙はガン対策の前線に
被害者も裁判参加許される
ウナギまで食の確保に難題が
幸せがありそう今朝も深呼吸

八尾市 山本宏至

ペランダから通天閣が見下せる
活断層の上と今頃言われても
うまいめししい湯があれば文句なし
もくもくとしていて通じてる夫婦
相談には誠つくして答する

八尾市 宮崎シマ子

ボロも着た錦も羽織った今解脱
妻の留守酒の居場所は知っている
ずばり底抜け金の溜まらない壺だ
山頂で渴きを癒す神の水
朝市の花午後からは半額に

八尾市 生嶋ますみ

夕焼けに明日の計画練り直す
天国といってもすぐに行く気なし
鳩の餌淋しい人が撒いている
童謡のリズムで雨の音を聞く
焼きたての御座候を待つ平和

八尾市 吉村一風

童心が時にくすぐる老いの酒
父さんの心がみえる庭の花
これくらい騙されておこ酒うまし
白日に本音晒して目をとじる
ふる里は私の宝母のよう

八尾市 村上ミツ子

参院選挙点見えぬまま走る
牛肉コロッケ冷凍ケースから消える
期限切れマグロ食べさせられたかも
脳トレの体操やってみましたが
不都合な真実かくれ上手です

大阪府 米澤俣子

追うほどに遠くなつてく蜚気楼
今というしあわせ色の陽よ風よ
きつとまだ生きてるつもり予定表
若者の街だミナミは多色刷り
高くても国内産の野菜買う

大阪府 初山隆盛

お中元贈るリズムが狂わない
灼熱にひまわりが咲く原爆忌
ロレックスもう嵌めません枯れた腕
正論をひとり外野で吐いている
ハミンクの流れる母のしまい風呂

大阪府 澤田和重

鏡見る自然に笑顔でてしまう

方便の嘘お見舞いにおいてくる

怒ったら負けだ一息いれとこう

男運なげいて箸がよく動く

シンプルな部屋が好きだと褒めてくれ

大阪府 桑田ゆきの

コロッケまで偽装されだし主婦の鬱

絵手紙の向日葵モノともゴッホとも

結局は何を言いたい長電話

時としてカーナビ騙す合併村

ふらダンス関節痛も忘れさす

大阪府 野田栄呼

完熟を鳥に先取りされる枇杷

ゆったりと洗濯揺らす梅雨晴間

リハビリにほどよき効果会話から

病名を封印命刻む母

子等の箸弾む夕餉に目を細め

神戸市 山口美穂

雨上りを待ってたように子等の声

バーゲンでまたも後悔買うて来る

セピア色の写真昔を語り出す

頷いてひと呼吸して異議申す

敗戦を知らない人の多数決

神戸市 山口光久

少しずつ本音を吐かず猪口の数

あばたもえくぼ真つ赤な嘘に酔う男

窓際で目が爛爛と五時のベル

割烹着が包み込んでる肝つ玉

雨の午後わたしを変える蛇の目傘

神戸市 両川無限

木の上の天狗こっそり降りてくる

子は宝未来へ伸びていく絆

脇役は僕のずるさを知っている

カツ井のジंकクス負けることもある

引越したらしいこの世に籍がない

神戸市 伊勢田毅

大国と食の偽装を競ってる

ストレスを溜めたか猿も樹から落ち

披講から遠く自信句泣いている

冷静になると言い訳よく分かる

選挙戦だけ古里に顔を出す

神戸市 田中章子

消費者にラベルの嘘は見抜けない

シンプルに優るものなし体重計

一服のお茶で約束思い出し

別々の思い出たどり並木道

ほどほどに曲がった胡瓜句詰まる

神戸市 山田 婦美子

平凡な日が幸せと気がついた
勿体ないの言葉がいつか消えていく
不自由の中から生まれくる根性
ドア閉めて一人になれぬ大家族
夫婦喧嘩父につく子は誰もない

相生市 中塚 礎石

一晚の自由があつけなく終わる
引き出しに寝ている赤のボールペン
昼の月のんきに地球ながめてる
杯を愚痴聞く方が受けている
転んでも差しのべる手は一人だけ

芦屋市 黒田 能子

花の種こぼれたままのところで咲く
高い声出せる若さのパロメーター
証明写真私の好きな顔でない
少しだけ喧嘩の出来る人が好き
I T に無縁鉛筆丸くなる

尼崎市 春城 武庫坊

八十路の野心いっぱい大きい夢を描く
窓際の風鈴静かに夏運ぶ
ちよつと回ってティッシュをくれる通り行く
姿見ながらいけずな車掌ドアを閉め
木屋町をのぞくと並ぶ蛇の目傘

尼崎市 春城 年代

梅雨晴間ざわざわと動きだす
しゃんとして歩けと亡父のげきが飛ぶ
じゃがいもの芽にも戦が絡むなり
糠床をならす老女の充足感
腰痛で庭の草とり甘やかす

尼崎市 長浜 美籠

ああもしてこうもしたいと夕茜
近況を書くに程好い雨の音
釣忍だらり世情に疎くなる
お持て成しこれぞ山菜わらび餅
寝て起きる日課に和む鳥の声

尼崎市 林 昭三

動いてる部品あちこち痛みます
男性は命の洗濯酒でする
病名はなくおもむろにお歳です
天駆ける招かざる客黄砂降る
一人二役ナイター野球聞きながら

尼崎市 軸丸 勝巳

長生きもよい事ばかりないベッド
地産地消ころの通う食文化
開拓者北の大地の底で泣く
語りたい語りたくない終戦記
久しぶり出れば梅田も行き止まる

伊丹市 山崎 君子

おしやれする梅雨中休み三面鏡

同期会棚田はみどり温い宿

ブラックでのむコーヒーと或る秘密

無人駅ちびた鉛筆連絡簿

天の水やと間に合う夏茗荷

川西市 米原 雪子

繰り返す心配ごとを子は笑う

赤ちゃんに指握られてえびす顔

泣かされた腕白坊主今紳士

名演奏拍手が幕を開けさせる

ライバルと稜線上下果てしない

川西市 西内 朋月

生検に麻酔が効かぬ手術台

判決は執行猶予また飲める

伝説の童話に浸る星祭り

地下街をセールの波と泳いでる

泥沼を必死で抜けてきた河童

三田市 北野 哲男

三代和え物にする嫁の腕

頼もしい三人産むと聞かされる

自分史が自慢の方へ曲りかけ

盃の中に天狗の鼻が浮く

肩の凝りほぐす小金をポケットに

三田市 久保田 千代

分け合って同じ花咲く両隣

根詰まりを分けて広がる核家族

票田を見事に泳ぐ二枚舌

妥協して自分の花が咲かせない

真心に触れたかぼろり涙落つ

三田市 石原 歳子

毒だみが名を気にもせず凜と咲く

一束が余りみんなと分けている

集合の写真爪先立ちをする

勘違いされて私の赤い顔

昼顔がラッパに見える河川敷

西宮市 山本 義子

ふるさとを忘れた街の雨蛙

つばめの巣街では希少価値となり

蛍狩バス乗り継いでリュック負い

鮎コースいちにちの贅ありがたく

全戸完売 見上げるだけの蟻である

西宮市 亀岡 哲子

川柳塔うちのお寺の隣組

桜吹雪母出棺の起顔寺

縁あって檀家同士の夫婦なり

鎮魂のコーラス鳥も唱和する

ロボットにすっかり教え込む介護

西宮市 秋元 てる

モンゴルがモンゴル倒すそれがいい
骨拾う足指からと指示されて
あたたかさ未だ残す骨拾う箸
子を亡くし鈍感力が有難い
生も死も丸投げにしていと気楽

西宮市 菊池 トミエ

頭髮が年々薄くなっている
風の音独りになって聞いている
ポストまで遠くはないが日傘さし
眩しさの夕日の中で今日も無事
忙しいと言いつつ道で立ち話

西宮市 井上 松煙

しがらみを全てたたんで趣味一途
大粒の汗が育てる無農薬
腰痛にコルセットして若くみせ
派手なシャツ歳を忘れて街へ出る
お隣へ落葉が舞うて柿を分け

西宮市 坪井 孝一

鳩尾へ我慢のこころ言い聞かす
平凡に乗り切つて来た処世術
笑われてもスキップをして花買いに
容赦なく地味な歳月過ぎてゆく
くにの母うどんを食べに來いと言う

西宮市 緒方 美津子

座りたい幅ぎりぎりの前に立つ
あなどつた蒞弱ゼリー命とり
回転ドア兇器と思わないこわさ
父の日のお酒よろこぶ父が好き
掃除機の音がすぎる妻の乱

姫路市 古川 奮水

串カツのソースジョッキに味添える
転た寝もよし空調の待合所
好景気何処のことかとカタツムリ
躊躇えば意欲が左向いていた
ブランドを提げて欠伸の播州弁

奈良市 米田 恭昌

マニフェストだけには福祉てんこ盛り
堅物のジョークに満座黙りこむ
廃坑のレールが知つている栄華
保険屋がガンだ事故だとやかましい
骨抜かれ男へらへら嬉しそう

奈良市 天正 千梢

しあわせな国だ白糸に水絶えず
遮断機が白黒つけてくれる午後
箸枕すつかり聞いたかくし事
おない歳周波数まで合うのかも
かおりある文章読んでいる余韻

生駒市 飛 永 ぶりこ

名所よりソフトクリームかぶり付き

目標を絞ればきつと発芽する

宇野千代の石碑を偲び人力車

自分のこと好きと嫌いが交差する

わたしの彩見失わずに磨きたい

檀原市 安 土 理 恵

ひと言に傷つく桃のデリケート

水蜜桃のしたたりこぼさないように

熟れすぎて見向きもされぬ桃である

心中を遂げたのだから蜜閣

短夜へ一人想って二人消す

檀原市 居 谷 真理子

妹のように抱かれて送られる

溜息はよそう黒いものが来る

一人旅ローカル線にほぐされて

よるべない顔まつげまで白くなり

アイメイクひととき夢を見るために

香芝市 大 内 朝 子

神さまの筋書き通り生かされる

友達を庇い過ぎて仇になる

長生きへ心は若くわかっている

十年も前の服着て褒められる

丹精のゴーヤを食べる暑気払い

大和郡山市 坊 農 柳 弘

絵画展ちよいと気取って老い二人

無人駅風とわたしとコスモスと

コスモスの誘いに一人萩の寺

煩惱を洗うつもりでの写経堂

末席で目立ちたがりの雑魚ひとり

奈良県 渡 辺 富 子

免疫力つけてコロツケ食べてます

イチローのヒットが冴える休み明け

視野無限ひときわ高い父の山

エプロンをつけると素直になる夫

着飾った妻に気付かずすれ違ふ

第57回岸和田市民川柳大会

日 時 10月21日(日) 12時 開場
 会 場 岸和田市立 福祉総合センター
 (☎072-438-2321)
 お 話 「川柳の仲間を増やすには」
 兼 題 各題2句 出句締切 13時
 披講14時30分
 「希望」 古久保和子 選選
 「刺激」 小谷集一 選選
 「和食」 太田扶美代 選選
 「ダンス」 川端一歩 選選
 「銭湯」 井上 簡 選選
 「流通」 井伊 東吉 選選
 会 費 2000円(参加賞、大会誌呈、軽食あり)
 賞 文化祭賞・文化祭奨励賞・文化協
 会賞・操子賞・きしせん賞
 懇親会 別会場(17時~19時) 定員30名
 会費 4000円(当日いただきます)
 申込み先 井伊 東吉 072-111-3227
 岩佐 丹吉 072-428-0325
 主 催 岸和田市・岸和田教育委員会
 共 催 岸和田市文化祭実行委員会
 連絡先 岸和田川柳会 〒596-0807
 岸和田市東ヶ丘町808-586
 井伊 東吉 072-444-3227

川柳塔の

川柳讃歌

③③

木津川

計

元氣そうと言われて元氣そうにする

石堂 潤子

いつも二人で行く商店街へ一人で行った妻が八百屋の兄さんに言われたそうだ。「ご主人気がつけなあきまへんで」「どういう意味や?」「さあ。さあそれから僕は落ち込んだのだ。痩せ始めたか、顔色が悪いか、急に老けたか:そんなに見られているのか。あるいは浮気があの兄さんに見つかつたか?なら致し方ない、がそんな覚えもとんとない。

だから潤子さん、時々「元氣そう」と言つてくれる人に元氣をもらいに行きましよう。

うくづくくと心は毀れものである

播本 充子

「ご主人気がつけなあきまへんで」に僕の心は深く傷ついただけではない。また去る日、可愛がついて近所の女の子に「おっちゃん、いけず」とある日言われて僕の心は毀れた。周囲が同情してくれた。妻も「あの子、また

三つやないの。意味も分からんと言つてるの」に慰められはしたが、心はつくづく毀れものと言ふ充子さんに深く納得する。女は「産む機械」は論外だが、人間は「毀れる機械」であるとつくづく思う。

冷凍が始まる愛を失つて

堀畑 靖子

心が毀れると愛も毀れる。冷凍が始まり、冷え冷えとしたふたりになる。「不平不満が出るようになる」と愛はお仕舞」とは淡谷のり子の述べだが、別られたから恋多き彼女はまた次の愛に生きることができた。できない女性はまだ耐えるしかなかった。そんな不幸な女性を靖子さんは見たのだ。あるいは、もしかして靖子さんが失つたのだとしたら。皆さん、えらいことです。靖子さんが冷凍に今なりつつある! 無論ジョークですが。

火葬場の待合室でよく喋る

西内 朋月

まことに心の毀れた人間はどこにでもいる。哀悼の気持ちも惜別の情もない。詩人で映画評論家の杉山平一さんは「禁じられた遊び」を見終りロビーに出ると、「いやあ杉山さんっ!」と声を掛けた女流詩人にきまりの悪い思いをされた。杉山さんはまだ泣いていたのだ。その女流詩人を僕も知っている。火

葬場でもペラペラ喋りそうな似非詩人だった。「葬式で会いボロイことおまへんか」(須崎豆秋)、毀れた人間の肩のいる地上である。靴下を穿いたら出先忘れてた

江口 度

隣の部屋へ入り、さて何をしにきたか?は序の口である。靴下を穿いて出先を忘れる、もまだ軽い。その上に靴を履き、駅へ着いて、はて俺はどこへ行くのか、となつたら毀れた己を自覚すべし。えらそうなことは言えない。僕もこの間、手ぶらで外へ出、用件をすませて入った店で天ぷらそばを食べ、ビールを飲み、さて勘定となつて財布を忘れていた。住所氏名を書かされて、その情けなかつたこと。考えをめぐらす海に葦といる

平尾 菜美

「ウミハヒロイナ、大キイナ、ツキガノボルシ、日ガシズム」、まこと海は茫茫である。満ちることがない。海岸に座り、水平線を見つめる少年の夢は大きい。

菜美さんは考えをめぐらすために海に来たのだ。一人では覚束ないから、考える葦と共に。いい結論が出た筈だ。女性に告ぐ。恋人を選ぶにはデニムのスポンのポケットに岩波文庫を入れた海の匂いのする男を。

(上方葦鹿 誌代表)

自選集

河井庸佑

先の先読んだ自信が揺れ始め
上り坂下り気になる膝の傷
デパレスで楽しく集う日曜日
趣味の輪を広げ忙わしく動く姑
すがすがしい目醒め無為には過ごせない

川上大輪

眉間から昇り眉間に沈む陽よ
右脳にも左脳にも播く花の種
よいとまけの歌を攫っていった風
動かないのは鏡の中の私
泥舟の中で狸が走りだす

木村あきら

路面電車明治の貌で通りすぎ
俄か雨落人の如雨宿り
台風日本列島狙われる
亀さんもやがて翔ぶ夢見るだろう
トンネルを抜けると碧い空がある

小島蘭幸

僕によく似た臨月の娘と歩く
初孫が生れる鶴を折っている
皿洗う時間ラジオはジャズ流す
もったいないもったいないと皿洗う
鍋磨くのはほどほどにしておこう

小西雄々

浮かぬ顔財布は野口英世のみ
甘言の罨へ右脳に喝入れる
浄土でも見ているだろうこの花火
五欲入れた内緒の壺を置き忘れ
ビールから酒へ秋風待っていた

小林由多香

取られたり引かれたり税まぬがれぬ
うきうきと今日のネクタイ決まらない
ネギ刻む音へ不機嫌もろに出る
貧乏に耐える根気は褒められぬ
いさり火の一つにくらし支えられ

斉藤 荔

牡蠣打ちの貝の痛みを忘れまい
向日葵にふいとうつぶかれてしまう
言い訳が上手になったイヤリング
矢ぐるまの花に引かれて里帰り
牛豚が偽る訳はありませぬ

塩満敏

一坪の畠でキュウリ出来ました
八月を国際平和月間にしたいもの
九条が大事な正念場迎えます
正義な党よ大きく大きくなりなさい
川柳子よ平和を守る筆持とう

新家完司

たこ焼きの頭上はるかに飛行船
金があるふりもしんどくなってきた
晩酌は何があっても午後七時
横臥して耳を澄ませば涅槃仏
気がつけば夏の星座になっている

玉置重人

実力がないので背伸びなどしない
静脈の細い男で頼りない
大丈夫エールをくれた内視鏡
きつちりと筋を通してうとまれる
歳聞けば保険屋バツと電話切る

恒松町紅

束の間の夢で終った当り運
冗談のつもりの方が大きすぎ
まず豆腐あとはゆつくり考える
神楽笛ひと時過疎を忘れさせ
過疎のバス数も淋しい時刻表

津守柳伸

沖縄を風化させたくない九条
腹立てぬ暮らし夕陽が美しい
渋滞へ何はともあれ盆詣り
三猿を通すよどみのない口調
体脂肪三日坊主の太極拳

遠山可住

人生の師は路地裏のコップ酒
父のファン力道山とひばりちゃん
スイッチONご飯が炊けて風呂が沸き
浮世まだ知らぬ笑顔が愛らしい
蹴ってみたばろい話が気にかかり

都倉求芽

安売りの西瓜それから雨ばかり
なぜ余る忘れたことのない菜
名水も太刀打ち出来ぬ山清水
よそ事の瞬間鉄切れてない
彼岸会に仏が好きな西の風

土橋螢

恋びとの写真をいつも持っている
戦争を知らない子等に疎まれる
負けてから六十二年生きのびた
天罰も天の恵みもうけている
露の世に生きるいのちの音がする

西出楓楽

家族葬希望と太く書いておく
鳩尾の辺りに溜める修飾語
夏椿おんなの歳は聞かぬもの
結論を先に言うから疎まれる
道なりに行けば花野へ着くだろう

仁部四郎

的外す返事本音を予告する
患者に読めぬカルテに書く本音
失言に食言本音の裏返し
マスコミの囃子本音が隠される
学校の本音を拒む親のエゴ

波多野五楽庵

残照の絵を抜けだして来た蜻蛉
亡父も亡母も答えてくれぬ風の盆
万華鏡死者も生者も踊り出し
コトコトと旅愁がびびく寝台車
下町の言葉に慣れぬ紙風船

林瑞枝

似顔絵を美女に描いて褒められる
亀の棲む池まで愛の一万歩
介護する白衣の愛の眸がやさし
行き交うものあり縦の樹を囲む
叱られた日を懐しみ師と笑う

宮口笛生

癌と言う病を持って八十路生き
大正生れ運良く今日を生きている
大正生れ俺も戦争いやだった
SLに機関士の頃なつかしく
君が世に起立半分僕半分

宮西弥生

一歩ずつ庭石踏んでいく悟り
開き直って大きく生まれかわりする
足の裏叩いて今日もありがとう
花の種蒔いて地球を塗りかえる
極まって開きなおりの仲直り

森下愛論

だるい脚伸ばしてやれやれ露天風呂
虫の音を聴いて浮いてる露天風呂
カラカラと庭下駄の音露天風呂
良寛さんも浮いていたのか露天風呂
枝に触れ花にも触れて露天風呂

八十田洞庵

自画像のせめてバックは晴れにする
こだわりの料理は客を選んでは
不揃いの茶碗に余韻残ってる
制服を脱げば親父も自由だな
散り急ぐ花よ待つてよ母が来る

ポケットに小さな謀反二つ三つ
言葉はいらぬ君の涙に動かされ
悪女来たりて男心を真つ二つ
標的の女がエサに食い付かぬ
癌告知余命ぎりぎりまでは飲む

両川 洋々

阿 萬 萬 的

先輩と言われちよつぱり気が重い
自己主張思わぬ波紋拡げてた
出しゃ張った足掬われました軽い嘘
劣等感あつて出口が見つからず
物忘れ互いに笑う老夫婦

板 尾 岳 人

長月や夕日と遊ぶ赤とんぼ
どうしても母に逢いたい旅靴
焼き肉を食べに行こうか影法師
形見分け母の財布に五円玉
赤蜻蛉逢いたいひとが居るんです

奥 田 みつ子

ピンチなお仰いだ空も泣いている
光より影のドラマに味がある
試されているのか雨が降り止まぬ
何よりのよろこび今日も生かされて
振り向けばみな幻の不幸

温故知新

車窓暖かチルチルミチル顔並べ
初節句本尊さんは昼寝中
その眼差し男の嘘を探りをる

大 阪 形 水

妻の夏洗うては干し洗うては干し
春雨へ女房と濡れるあほらしさ
○トレルマデカエルナと部長から

川 村 好 郎

労働歌重役室の窓閉まる
母の日を母は笑って飯を炊く
出せば出る力を火事に教えられ

河 村 日 満

十六夜でよし飲むだけの君と僕
美容体操そんな時間が主婦になし
立ち読みの間に止んで傘忘れ

金 井 文 秋

— 合同句集「私達」—
昭和三年発行 選者 麻生路郎

水煙抄

西出楓楽選

和歌山市 田中すず

永久保存たった一度の恋日記

わたくしの存在配る旅土産

一言を譲ってからの風通し

ああ言えばこう言う脈のあるお人

原石だったところが一番魅力的

ぶつかるだけぶつかり誠意たしかめる

八尾市 田中トシエ

価値観の違う二人の砂時計

言い訳を小出しに使い武器にする

お見舞に明るい話一つ添え

水鉄砲吾が家の庭で虹つくる

本棚の埃になった記憶力

日誌書く五年の月日四冊目

今治市 塩路よしみ

母さんの味はわたしの辞書にある

わだかまりゆつくり溶かす瀬戸の海

立ち止まる余裕が出来た年の功

喜怒哀楽すべて知ってるつげの櫛

根っからの陽気疑うこと知らず

もの静か波瀾万丈越えた笑み

泉佐野市 稲葉

洋

向日葵もほんとは日陰欲しかろう

朝顔も見飽きて終る夏休み

夏休み終り里山川静か

いつときは口開けたまま大花火

早生諸を掘って老父の戦時譚

上向かずもう足元を見る齡

三田市 阪本藤朗

無聊でも勝手に時計回ります

今朝もまた一日分のひげを剃り

試着してどうかしらには口出さず

苦虫を家長の顔で噛み潰し

血圧計今日はあんたも惚けている

日めくりの人生訓はすぐ忘れ

横浜市 長 島 亜希子

のびのびと育つて欲しい王子たち
何かする度探しものから始め
老人ポスト作るとまでは言わせない

不都合は小さい文字で書いておく

遅れても怪我よりましとかけ込まぬ
クーラーの効いてる部屋でエコ討議

和歌山市 たむら あきこ

十指みなひらいて太陽を容れる

金魚ひらひらやすらぎへ紛れ込む

哀しみに五臓六腑がひからびる

聞くことを拒み続ける耳がある

虹色の未来へ靴を履きかえる

とりあえず未来を一つ捜します

京都市 清 水 英 旺

沙羅の花母の忌日にきつと咲く

柳行李のガラクタ哀し亡母の性

通り過ぐ時間が見える七十歳

濁り水の上澄み飲んで世を生きる

古き友と一献ごとの語り種

ノミの心臓毛生え薬で強くする

枚方市 小 林 わ こ

駅名の文字もいろいろ国際化

押し花に青春の色まだ残す

赤ちゃんは恐いもの無しわが天下

母だから作り笑いはわかります

民宿の自慢魚拓に迎えられ

税払い肩身の狭い愛煙家

大阪府 神 野 千恵子

遠くから見れば地球も美しい

果物が乙に澄ました静物画

泣き顔の似合う男が増えている

核という地球の癌が転移する

取り敢えずイエスと言つて荷物増え

泣き上戸まわりすつかり醒めている

吹田市 二 宮 栄 子

もつれ糸解けて明日が見えて来る

父母の勿体ないが生きている

棟梁の耳で鉛筆休ませる

幸せな月を誘つて散歩する

青春のページをめくる十三夜

新聞を丸めたからは逃さない

札幌市 三 浦 強 一

居酒屋にまでケータイが追つてくる

バイキング腹八分目など忘れ

父親は胃癌バリウム怖く飲む

ピンコ口で地に還れたらなと思う

正義対大義が妥協せぬ戦火

自爆テロ困つた勇氣だと思ふ

シドニー 三谷 たん吉

一票の重みと言うが何グラム

意味がないくずの中からくずを選び

閣僚の誰がやめても気にもせず

美しい国はたわごと永田町

土砂降り心配なのは小鳥の巢

シドニー 森本クツクバラ

しょうがない人が放ったしょうがない

同盟で無理心中をやりたがり

九条に守られ富んだこと忘れ

国会は数をたのみのブルドーザ

青ざめて五千人列をなし

メルボルン 藤原 ポン吉

焼肉の煙もおどる子の笑顔(日本里帰りの旅)

うぐいすを踏んでさがすは二条城

大仏のおかげと鹿も頭下げ

ハへとホフ熱いと訳すたこやき語

おみやげは胸一杯のなにわ節

札幌市 小沢 淳

預金利子足代もなく嘆き節

堂々と昼から飲める夏まつり

独壇場うちの憲法妻が決め

賞味期を過ぎた男の安全度

胸の内聞いてもらって胸がすく

日立市 加藤 権 悟

眠らない街だいくさのない平和

切り札があるから話きいてやり

法師蟬夕日に秋の風をくれ

栄転の辞令笑いに耐えている

暖衣飽食なにか忘れていませんか

栃木県 岡野 すみれ

旨い物ばかり食わせる憎い嫁

顕微鏡見てはいけないものもあり

一徹の額の皺がものをいい

蟻ほどの価値だと思ふ日の焦り

予言者のもっともらしい絵空事

昭島市 野口 忠

傘の内こは私の小宇宙

百均の傘へお別れ軽く言い

物入りに定期預金も泳ぎ出す

妻の目の中で泳いで恙無い

心根の優しい人は目も温い

草加市 飯土井 健 夫

決めたならやり抜く事に命賭け

本からと知恵者の話宝とし

新聞とテレビメモ取る知恵袋

三十分歩く明治の朝の杖

脳だけは使えば使うほど冴える

東京都 井上 つよし

足るを知り他人に優しい笑い飯

無い袖を振って買つて初鯉

俄か雨が百均傘をまた買わせ

温暖化病める地球の不整脈

散りかかる花を掬って露天風呂

横浜市 金森 徳三

九時以降ドラマに譲るプロ野球

冷奴枝豆年を折り返す

人生は楽あり苦あり孫に説く

お隣の赤ちゃん生れ後光差す

負けて勝つとは言うものの負けは負け

横浜市 中尾 哲代

安心を買っている気の高価格

渋滞にめげずに帰る妻の里

チャイムには反応しない妻の留守

独り居にインコが話しかけてくる

物売りの歌にハモって犬が鳴く

藤沢市 加藤 スズコ

飛ぶ鳥が病む窓越しに見せる舞い

いい雨だ一日だけのひとり言

嫁ぐ娘に心みだれる泣き笑い

七夕飾り心ときめくケアハウス

美しい夕日が染める介護バス

佐渡市 高野 不二

退職者仲間本音で呑める酒

戦争を知らない人の九条論

値上げした散髪少しのばしとく

父の日が結局高いものにつき

ネクタイをしている方がガードマン

岐阜市 平野 あずま

新緑の英気を浴びる露天風呂

古里の香り包んだ朴葉寿司

冷房を止めて風鈴涼を呼ぶ

深夜放送ひとり昭和に浸る歌

ポイントを溜めて図書券ゲットする

北名古屋 片岡 文男

待ち時間本屋で財布口を開け

クールビズ就職スーツ許さない

もの捜します百均へ足を向け

曇天も花菖蒲にはよい日和

最後まで乗っているのは無料バス

大阪市 尾崎 黄紅

蚊よ蠅よなんで生まれてきたんです

医者という日にち葉が効いてくる

わたくしの右脳と左脳仲悪い

肉食が好きですという僧侶です

軍服の写真わたしでないわたし

大阪市 坂 裕之

守つてゐるつもりが皆に護られて
絵手紙に元気を載せてご挨拶
絵日記のために家族でキャンプする
個性的ですなと言われ喜ばず
今日からは明日のための今日にする

大阪市 田 浦 實

旅にしあれば雑草までも美しい
大師さま許して賜れ酒遍路
寂しさが浮き浮きの後追ってくる
梅肉酢添えてしゃきつと夏の鱧
水玉をつけて紫陽花艶っぽく

大阪市 原 田 すみ子

宝石もなすび一個も選びます
生き方が見えるスリムな暮らしぶり
雨風は世の常だから傘はもつ
四十年つなげばでますサビ埃
つなかりをネットに捜すひとりの夜

大阪市 平 井 露 芳

カラオケはエコーでどれも歌手気分
給食も義務教育と払わない
赤切符切るで自転車買い付けや
源内さんどうしましうか中国産
車に食わし物価も食った砂糖きび

大阪市 平 嶋 美智子

派手な傘させば雨ふりまた楽し
雨音に合わせて傘を振ってみる
地を舐めてようやく気づく欲の皮
ヘソクリを少し夫へお小遣い
球児達練習つんだ自信の目

大阪市 伏 見 雅 明

スキップで百点運ぶランドセル
じつくりと見ても分らぬ抽象画
釣り上げた妻にちゃっかり飼育され
添い寝した子に起こされる昼下がり
行きつけのスナックに愚痴置いてくる

大阪市 山 本 加お里

親の愛分かった頃はもういない
アンテナを張りめぐらせて生きている
ケイタイの電波届かぬとこへ逃げ
決め兼ねて並べて見てる小半日
時々は途中下車して生きている

大阪市 吉 田 富 美

急行の止まらぬ駅に梅雨荒れる
ハンカチの折目おろかな和解する
鮎に箸つけて話はさとの川
夏草の雲につながる細き道
虫干しの行李に姑の香が残る

池田市 上嶋 幸雀

天の川じつと見上げる片想い
流れ星おいでと窓を開け放つ
さよならを言つてしまつた流れ星
剥き出しの若さへ挑むサングラス
ピクリともせぬ風鈴に八つ当たり

池田市 多田 契子

変身を神に頼むが無視される
オーイお茶真似したくなる独り者
つらい事石投げ消した水溜り
うっかりも笑つて明日へと出直した
デイサーピス褒める拍手の多い事

泉佐野市 備後 三代子

灯を消して眠つてみたい熱帯魚
体調の万策尽きて灸治療
離れ住む子等を案じて嗤われる
人生の今は何いろ万華鏡
たそがれてあれやこれやの走馬灯

茨木市 島田 誠一

ゴールドが間近になると出る違反
大臣になつたばかりにほじくられ
携帯の番号変り終る恋
ダメ虎に戻る予定も組んである
紫陽花の色は移ろう四季の妙

河内長野市 木太久 正一

介護での社長豪邸どこか変
この夏もなんとか無事に過したい
三十年前のズボンがまた穿ける
天気予報手品のような棒つかい
後輩の殿堂入りのハガキくる

河内長野市 針生 和代

文明の進化壊れてゆく地球
バーゲンのあれこれ選つている至福
不器用に生きてやさしい友を持つ
悩むのは生きてる証朝が来る
胃カメラに食生活を諫められ

河内長野市 宮守 正博

はつきりと言つてやったが夢の中
はつきりしない女が蝶になる
進化してほしいところが退化する
釣り上げた魚に今はあやつられ
忘れてる仕舞つたことも忘れてる

岸和田市 坂口 英雄

官僚も蜜も甘い水が好き
俄雨このまま止むな負けチーム
大勢で食事をすると美味そうだ
降れば災害降らぬと夏は水不足
物忘れだんだんあの世近くなる

岸和田市 中岡香代

うやむやの先を聞き出す酒をつぎ

カタログで古里の味すぐ届き

お食事のカロリーさげてケーキ食べ

流暢にモツタイナイと諸外国

雑草がセメンの間でも茂り

堺市 荻野像山

良妻のつもりは妻の得手勝手

念仏と思つて我慢する小言

無理せずに飲みたい時は飲んでます

生きるとは楽ではないね葉漬

悪知恵が入り込む隙がある法規

堺市 羽田野洋介

あれもこれも合わなくなった衣替え

中身より表紙が重い革手帳

物好きだなんて今さら言われても

インタビューはずむ息より汗に聞く

乗る前に船頭の数確かめる

吹田市 蔵田光子

繋ぎ目を確かめ合つて渡る橋

夕焼けへ散歩する子と手を繋ぐ

親戚の集い絆を確かめる

古里で眺めた北斗まなうらに

いぬふぐり可憐な花で自己主張

吹田市 早泉早人

定年後妻がわたしを指図する

晩酌で重たいのち軽くする

晩酌にお猪口ふたつが笑い合い

晩酌に今日の幸せ感謝する

海を見ています悩みが消えそうで

高槻市 片山かずお

元氣よく今日も歩いて医者通い

医者よりもナースに会いに通つてる

加齢臭しないようにとよく洗い

うちへ来る論吉の足の速いこと

孫と嫁偶数月に来てくれる

高槻市 安田忠子

電話口ソフトな声にだまされぬ

一瞬にハニカミ王子時の人

七月にウグイスの声聞くゴルフ

飛行機のピルの谷間を行く恐怖

四季のある美しい国次世代も

豊中市 荒巻夢

呆けても命大事と思いたい

首の皺見え隠れするチンドン屋

イチローに似た子に席を譲られた

モデルルーム肩籠もなく広々と

頬杖をついてよからぬ夢を見る

豊中市 源田啓生

半分はもう用済みのカレンダー
抱いては見たが束の間恋ごころ
政治家の片言直ぐに羽根生える
ワゴン車の御輿が走る老いの村
伸び過ぎた眉毛を切つて若返る

豊中市 神野宇乃子

描きたくつゆ草さがす雨の中
失敗の果実酒もある棚の上
秋の夜に頂き物のビール飲む
ビーナツを選つてはつまむ柿の種
一力の江戸の情緒を探す旅

豊中市 谷川勇治

二人の子遠く離れる世界地図
いつまでも散らない花を隠しもつ
レモン泣くきれいな雫こぼして
吹かれても動かぬ風車僕らしい
度忘れを笑つてもらう歳になる

豊中市 松尾美智代

雨の日は少し濃い目の紅を引く
友からの苗が根付いてミントテイー
そよそよとカーテン揺らす風が好き
五十年まだ使つてるコンサイス
明日は晴れてるてる坊主笑つてる

寝屋川市 岡本勲

熱いお茶入れて至福の古い二人
顔合わせ目と目で話す老夫婦
自己流にマイペースでと焦つてる
自分勝手に難聴になるお爺ちゃん
ゆっくりと生きていこうと決めて古希

寝屋川市 北田ただよし

明日あると信じきつてた子猫たち(猫 5句)
きっかけは目が合っただけの猫
化けるのはまだ先という初な猫
口髭はセンサー手入れ怠らず
諦観の猫見えていた水平線

寝屋川市 森田麗

疲れたら年相応に怠けます
暗黙なんて許せぬ事がたとある
世渡りが下手な血筋で薬探し
電話口素っぴん顔を撫でながら
MRI分析されてる恐怖心

羽曳野市 仲谷真一

美女二人心臓今にもつぶれそう
メールでは自分の思い伝わらず
名古屋場所青と白との競い合い
参院選庶民の声が届くかな
社保庁は振り込みサギに良く似てる

羽曳野市 永田 章 司

ジックスを破り一枚皮がむけ
移り行く社会横目にアナログ派
予定から少しはずれるひとり旅
困難は長く栄華は瞬時なり
怒る度皺が増えてる古希の顔

羽曳野市 森 下一 知

嫁入りのキツネが渡る虹の橋
湯気の噴く噂を拾う地獄耳
恐ろしいムシヤクシヤしたと言う動機
表沙汰避けて飛び交う袖の下
新人の器を測る向かい風

羽曳野市 吉 村 久仁雄

清濁を飲み込む人でコクがある
年金の傘が破れて骨も折れ
年金を語ると声が裏返る
病床の父が正座で非戦論
蓄財に無縁で夜はよく眠れ

枚方市 二 宮 紫 鳳

杉木立シューズも軽やか家族旅
還曆に歩幅そろえて歩み出す
菩提樹の香りほのかに癒し旅
全身全霊グリーンシャワーで浄化され
ウォークする道案内に羅漢像

藤井寺市 伊 藤 アヤ子

この人を置いて先には逝かれな
冷房が嫌いな夫と居て暑い
石見銀山世界遺産の仲間入り
年だけは負けてませんライバルに
この先も二人の道に悔いはない

藤井寺市 増 井 ヨシ枝

納棺へ涙で濡れた花納め
カマキリの赤ちゃんがいてホツとする
猫背でもいいの歩ける嬉しさよ
無視すると猫は爪立てはなさない
介護する時に般若の面もつけ

藤井寺市 俣 野 登志子

お願いは孫の幸せ笹飾り
満一歳サル真似上手ごね上手
食べながら聞いて話してちんぷんかん
古稀間近かフットワークが重くなり
朝寝して昼寝までして早寝はる

藤井寺市 吉 田 喜代子

道聞けば風もゆつたり京ことば
祇園ばやし浴衣もはねる鱧もはね
他人でもあくびは貰う電車中
災難も三つ続けばどんとこい
甘い蜜群がるような介護職

箕面市 寺井柳童

梅雨の入り水ゆったりと夫婦滝

朝市の野菜に元氣貫つてゐる

お隣のニンニク料理嗅ぎ元氣

菓飲むために食事が欠かせない

大根も蕪も葉っぱを食べましよう

八尾市 赤木妙子

美しい国を悩ます介護 社保

夏至の雨に早苗は凜と立ち上る

笑い皺がまた増えました落語寄席

ごまかしが効かなくなつた足と腰

いつからか踵の低い靴ばかり

八尾市 梅原莊治

生きるより死の選択に度胸いる

路地裏は昔恋しき子等の声

女医に脈取られ血圧上昇し

雨上がり生駒山脈くつきりと

あつさりと妻にへそくり見つけられ

八尾市 笹倉ひろし

小手先はやはり中味が重くない

万物を育む海の深い愛

美しい国の九条称えます

五月雨にしがらみ流しピエアになる

時移りセビア色したナイスガイ

八尾市 寺川はじむ

夕食を終えてうっとりつれ欠伸

笑顔まで移つたような老夫婦

海開き水着売場が急き立てる

移し合うふたりの喜劇もの忘れ

地車のギャルの掛け声梅雨払う

八尾市 中島春江

更衣老いてまだある洒落心

夏菜莢のあと味昔窓の味

おしぼりの熱さうれしき喫茶店

洗い髪振りむく孫の大人びて

草茂る宅地売らぬか売れぬのか

八尾市 西川義明

人間の絆の先にある情け

雨の日はちよつと怠けることにする

老老介護曲つた腰に雨しとど

梅雨空に神経痛が暴れだす

美しい日本に住んでいる誇り

八尾市 平川幸枝

なぜ迷う自分で書いた地図なのに

川柳の陽気な友に支えられ

眉描けば犬が散歩と急き立てる

たつぷりと新茶供える仏様

雨が降る自己採点が甘くなり

八尾市 前田 紀雄

介護する患者でなくて諭吉さん
防衛の国を守らず椅子守る

改革は痛みと変えて読んでます
近頃のおやじの背中かたらない
ケイタイの指と指とがはなしする

八尾市 松葉 君江

外見よりもまずは中身で勝負する

沢山の出会い心の栄養に

腰掛けが愛社精神死語にする

ガーデニング家人の心映しだす

荒れる子へ三つ子の羨見直され

八尾市 脇 俊子

四面楚歌息つき探す旅に出る

悩みごと聞く受け皿にひびが入る

陽炎に熱いロマンを語り掛け

重箱の隅をつつくと掘る墓穴

夫婦とは半世紀来て答出す

大阪府 小栢 こそえ

降って欲し晴れて欲しいの農作業

しんどいと言っても食事まだ美味い

高軒かいてテレビを見てる午後

ブトや蚊が魅力ない身につきまとう

暑いけど暑くなければ実らない

大阪府 高木 道子

此処だけの話のエキス蜜の味
歳月の記憶あやしく美化される
選挙前美味しいCMならべ立て

思案して角出し槍出すかたつむり
大海を知らぬ蛙のジャンプ力

大阪府 畑 中節子

人生の暮しを明かす一行詩

行動のにおさ認めて老いの独楽

散歩道森の吐く息みな貰う

どくだみの花の十字に鎌止まり

歯の治療終えて道路は夏の照り

大阪府 若月 裕作

ウォークして晩酌の味ととのえる

四面海に夕餉の魚他国籍

やきもちをやいてる顔がいじらしい

やつとこさ棚田も植えて茜雲

加齢加齢負けてたまるか背を伸ばす

神戸市 木村 忠義

鈍感さ活かすとは良き老いの知恵

入院で学んだことがたとある

入院で気づく家族の有り難み

赤飯が知らず家族の誕生日

冬は酒夏はビールを飲むによし

尼崎市 加川 靖 鬼

トグロ巻いて蛇は休んでいるつもり

鎧着て誰と戦う甲虫

海遊館じんべい鮫が雑魚を連れ

水中トンネル魚群が空を散歩する

渡り鳥は季節の風を読んで飛ぶ

尼崎市 河津 正 治

あの峠越せば身に染む母の風

詩人には遠いがベレー良く似合い

一行詩 天下国家を風刺する

しつとりと舞妓の酌で床めぐり

しつとりと絹の風合い出す和菓子

尼崎市 小池 幸 子

適当に手抜き人生八十路入る

棄権して不満を言うは筋違い

伝統の京の山鉦灯が点る

京の鉦西陣織に綴れ織

枇杷撓わ住む人もなく梅雨最中

尼崎市 桑 原 東 園

この道を行く絶景が待っている

梅雨さなか洗濯物が威張る部屋

政界を巧みに泳ぐトップ達

年金の暮らし足許から揺らく

真夏日が続けば梅雨をいとおしむ

加東市 安達 厚

一円でご利益なんてよくもまあ

どうでしたそこそこでした良かったね

あかんけど協力ぐらいならできる

定退後趣味一筋という至福

病弱もやっと傘寿の祝いの酒

加東市 黒崎 美紗子

南瓜の伸びる元気をもらう朝

痛さ知り人の苦しさ分かる腰

減量に一喜一憂する女

新客は可愛い笑顔曾孫くる

どれにしよう次の好物回る寿司

篠山市 谷 田 多美子

朝顔の微笑み朝の風にのり

鯉のほり仕舞って水着の丈はかる

八十路過ぎ米研ぐ今朝をありがとう

あじさいが去年の色より淡く咲く

リフォームに歴史の柱ごみとなる

三田市 上垣 キヨミ

涙して聞く子供等へ戦禍説く

ヨン様を捨て王子等に今夢中

叱る意味話して孫の涙拭く

世の波に遅れるまいぞ子にメール

CTに内緒の入れ歯見破られ

三田市 白井二英

ミンチより中味判らぬのがスープ
目の下にマユを描いてのデーゲーム
羽がないだから翔びたくなつてくる
我慢は下 励むときには上をみる
悩みごと少々あるが放つとく

宝塚市 丸山孔一

出来婚やバツイチで売る芸能人
マスクした歯科医美人かも知れん
早く来い息子夫婦へコウノトリ
若者と共に受験もまた楽し
思い切り言ってみたくて飲みました

西宮市 石野照代

子供より親のしつけの必要性
風鈴は素直に夏の風に乗る
出来合いの惣菜買ってバイキング
雨の午後孫と一緒にぬり絵する
かすみ草ころろが少し広がる

西脇市 七反田順子

水琴窟星のつぶやきそつと聞く
洋洋とプラハの夜はファンタジー
梅雨晴れ間ゆつたり歩くカタツムリ
この夏も十八切符で跳んで行く
コウノトリ待ちに待ってた雛いとし

三木市 広瀬房江

華やかな嘘を静かに聞き流す
サービスが福祉の窓から姿消す
珍客を待てずあじさい色褪せる
ホーホケキョうつ吹き飛ばす甘い声
お隣の棟上る音木の香り

兵庫県 藤本直

掠り傷重ねて少し知恵がつき
空っぽの心で雲と浮かんでる
B面を見せて気楽な酒になり
山の水これが地球の味と知る
無駄食いと駄洒落ばかりのテレビ切る

奈良市 阿部茶々

加害者が過保護にされて腑におちぬ
テロ防止飲み水さえも持ちこめず
亡き祖母と寝ころんで見た星祭
香水のミツコをつけてさあ勝負
一回は穿いてみたいなジーンズを

奈良市 乾春雄

ブランコが風と遊んで夕暮れる
真珠婚妻は背中では返事する
独り言上手になって老いて行く
延びている寿命の先に地図がない
過疎の駅落書き読んで待つ電車

奈良市 辻内 げんえい

社保庁は呆れることがエンドレス

参院選年金の風どこへ吹く

嫁がせて次の喜び心待ち

披露宴母は喜び父は泣く

喜怒哀楽顔に出さずに勤め終え

奈良市 矢野 良一

千切れ雲そんな急いでどこへ行く

ジェネリック浮いた分だけ税増える

週の事子供ニュースを見て学ぶ

家庭菜園朝昼晩と胡瓜揉み

風呂あがりグツと一杯干す至福

生駒市 小西 稔

世の中の移る早さに追いつけぬ

マスコミは移る世界をうまく追う

客が来て今日の予定は没にする

予定表 都合次第で書き換える

ジんクスを破って更に勇氣出る

和歌山市 柏原 夕胡

傍に居てほしい抱きしめてほしい

泣きたくはないのに涙止まらない

哀しみを隠す化粧という仮面

恋はまぼろし知らぬ間に消えてゆく

わたくしを解き放つ真夜中の時間

和歌山市 土屋 起世子

逆境に意外な力の割烹着

新妻がラッキョに梅を漬けている

トンネルを抜けた女の胴まわり

いろいろと文句を並べたいらげる

肩書きを捨てて役立つ再生紙

和歌山市 山田 侃太

糠の技信じてきゅうり漬けられる

団塊の世代看取ってやる覚悟

九条のデモがテレビに無視される

震度は2プルルと揺れる熱帯魚

今度こそ出口譲ってみよう

岩出市 村中 悦男

老夫婦さあ起きようと言いつつ

たわいない話の夕餉でいい二人

明日という未見の不安捨てている

感情を開閉障子に乗せる妻

花火追うよりそう妻の手をとって

海南市 小谷 小雪

巢立った子用はないけど来て欲しい

迂闊にもケータイ家に置き忘れ

朝の時計いやにすばやく進んでる

愚痴ひとつ聞いてくれる夜の雨

アナログの暮らし見つめる古時計

紀の川市 宇野幹子

和歌山県 森下よりこ

蝦蟇口を揺ると貧民の鳴咽
子に還る母と溺れている看護

八月の熱い涙よ蟬時雨

わたくしも絞り出されるターミナル

ブーメラン弱気になって舞い戻る

紀の川市 木村徑子

貴重な時間平気な草に盗まれる

胃の中でスクラム組んだ他国籍

平然と大波小波うけて立つ

棒グラフと共に血圧高くなる

余生なお一目散で夢を追う

紀の川市 辻内次根

老いていく疼きを理解されずいる

約束ができる明日も明後日も

抜け落ちて一番怖いのが気力

答えから小数点を切り捨てる

ほくは今みどりの風のなかにいる

田辺市 大峠可動

炎天下仮名も漢字も人臭し

人間砂漠虚像ばかりが隠し笛

脳味噌も添加物です世辞を言う

梅干して和顔愛語の境に住む

蛾の頓死終着点に蜘蛛の糸

かぼちゃ豊作私の手入れ届いたか
妹の顔にも年波まざまざと

自転車でゆける買物医者がよい

腰は痛いはまだまだ出来る農作業

苔むして忘れられゆく忠魂碑

鳥取市 近藤秋星

車椅子は俺の伴侶だ女房だ

参院選天は何れの味方する

審判は俺ら有権者が下す

向日葵に紫陽花バトン渡してる

性善説など信じてはいけない世

鳥取市 谷岡清子

もったいない昔の服で若く見せ

海征かば友乙姫に会ったまま

百の峰見たさに堪える八十路坂

偉い人頭下げるのが上手

平凡に感謝するよな日が欲しい

鳥取市 横田春名

脇役になり切った姑慕わしい

抹茶茶碗きれいにサラダ盛ってある

カットして伝えた話尾鰭つく

まず笑顔不満な話うまく聞く

葬式の費用気にして数珠を繰る

鳥取市 山岡 紀子

米子市 猪森 スミエ

春の海詩人になってしまひそう
無人駅たった一人の客となる

山荒れてサイン出してるけもの道
内緒だよ壁が聞き耳たてている

鼻めがね喜ぶ孫にもう一度

鍵掛けて回る私の守備範囲

おでかけのドレスに犬も弾んじやう

コンビニで助けられてる妻の留守

夏バテをしないエアコンないくらし

美しい花が絶えない無人駅

鳥取市 山口 千代子

米子市 小塩 智加恵

嫁ぐ娘とほろ酔う父の頬に玉(孫の結婚2句)

子や孫に中元貰う年金者

愛の荷を積んで漕ぎ出す夫婦舟

そわそわと周り気遣い試着室

生きてる限り女忘れず紅を引く

座ったがシルバー席が気にかかる

孫九人七人目の孫嫁ぐ幸

古い二人飯一膳を分け合つて

嫁いでも忘れぬ親の恩を抱く

十五年川柳塔を師と友に

倉吉市 前田 喜美子

米子市 見山 温子

めでたいな八十路の脳も句で遊ぶ

夫婦でも時々仮面つけ替える

五割引き元のねだんが気にかかる

孫が増えもらう年金泣いている

早朝の雷雨狂わす予定表

茶をすすり共に白髪を慰める

両輪の役を果して森と海

ストレスとお金は貯めたことがない

梅雨明けてグラウンドゴルフ玉の汗

老いた娘が親の介護に苦戦する

境港市 遠藤 那珂子

鳥取県 飯野 菖子

一一九呼べば町じゅう飛んで出る

ひたすらに迷いなかつた道でした

織姫が一役かつてる町おこし

温暖化地球がくれたメッセージ

所得税払った頃は光つてた

傷ついた心も時に流されて

アジアから世界の流れ変りだす

おぼろ月明日を促す野良帰り

のりの音素肌できて浴衣着る

めでたいな親の年まで生きてきた

鳥取県 岩崎 和子

二人居てあなた好みの料理する
助手席で通る車の品定め

朝刊の新書紹介見逃さず

エッセイも楽しく読ませ新子さん

取り換えのペースメーカーありがとう

鳥取県 大塚 美代子

外堀を埋めて静かに座禅くむ

良く遊ぶ子供に時計など要らぬ

美しい国にしようとか芥ひろう

夫婦げんか横槍入れて火傷する

コンビニが主婦の手抜きを見逃さず

鳥取県 岡村 孝明

農政が変わり青田のつづく里

逝く日まで磨き定期に歯医者行く

満足な仕事肴に杯すすむ

久びさに親子語らいホタル舞う

働き場なくてパチンコしています

鳥取県 岡本 幸枝

青い空にっこり浮かぶ昼の月

天高し太らぬメニユー考える

ふつくらと煮豆に丁度よい余熱

夢うつつ遊びごころが蟻地獄

この投句読んでくださる顔うかぶ

鳥取県 北村 稔

無農薬少し虫食い分つてね
ほめられりや低い鼻でも高くなり
過去ずばり当るうらないこわくなり

村民が市民になった峠茶屋

ストーブと扇風機とが並んでる

鳥取県 斉尾 くにこ

ふたり居て孤独ひよっこり顔を出す

赤い糸カットしたなら飛べぬ風

たつぷりと愛注ぐ子の枯れてゆく

ひとりっ子介護四人はできるまい

笑いの渦をはみだしている疎外感

鳥取県 橋谷 静江

お揃いの浴衣で祭盛上げる

四季めぐる早さに対応しきれない

助言して今日の生き方支えあう

胃や腸も元氣だせよと野菜食べ

平凡な暮しへ誕生プレゼント

松江市 山根 邦代

災害の地に太陽を戻したい

ふるさとの野山輝く風景画

玩具箱孫の宝で捨てられぬ

翼欲し飛んで行きたい人がいる

病む友が教えてくれた無理するな

出雲市 川島 和歌子

目立つ場所母さんが振る応援旗
人の噂内緒ですよとよく走る
何気なく傷付けている過ぎた世辭
生前を咲かせた人の葬の列
リフレッシユ心身共に燃えている

雲南市 菅田 かつ子

気の乗らぬ会をサボって喫茶店
流行りとてわざと破れを着て歩き
忙しくてなんていそいそ趣味の会
奥さまと呼ばれ余分な物も買い
初生りの胡瓜烏に持つてかれ

雲南市 武島 ちよえ

ありがたい横の繋がりある生活
今にして亡夫の傘の広さ知る
欲捨てた分軽くなる老いの道
重なつた温泉行きと義理の席
会席へ器で中身評価され

雲南市 福岡 博利

梅雨晴れ間小鳥待つてる土手のみち
お茶口を持ち寄り駄弁る姉妹
戦友を歌って涙止まらない
美しい国大臣の悪がばれ
戦争を語れる友が今日も逝き

雲南市 渡部 好栄

その先は思わないぞと言いきかせ
言い合いもゲームと思えばまた楽し
脇役で生きて幸せ笑顔あり
肩書は主婦です今もこれからも
さわやかな二人にやさしい風の音

尾道市 木曾 一徳

畦道は父の通える水の番
薫風を受けて草刈る三町歩
いい加減草刈る畔の高低差
白鷺が草刈り跡を闊歩する
神よりの田畑死守し草を刈る

府中市 馬場 利子

変身の上手な雲に問いかける
繩梯子期待をかけてチャンス待つ
風景画描いて秋の種を選ぶ
別れた亡母の星だろう光り出す
中間色の優しい風と妥協する

府中市 藤岡 ヒデコ

嬉しい時は酒 落ち込んだ時は友
言い訳に着せる衣が厚くなる
ペランダの半分つばめにのつとられ
雨の降る日はしつとりと雨の詩
三日目はホトホト雨も嫌になり

宇部市 高山清子

価値観の違い絢い交ぜいい仲間

末席の意見は小癩だが貴重

人生の回り道には無駄は無い

真ん中にいけば誰かが楯になる

飲みこんだ愚痴が形を変えて出る

今治市 渡邊伊津志

ポジティブな話に変えている観智

人のために出来る幸せ見付け出す

ほんわかな笑顔を貰う嬉しい日

誉められて自分の良さに気付き出す

スピチュアリーの世界で熟睡貪れり

大洲市 花岡順子

ホップステップ熟年離婚しようかな

猪の走る勢い止められぬ

もやもやの訳根気よく聞いている

タイミングずらせば隙が見えてくる

雨上がり黄色い傘がジャンプする

香南市 桑名孝雄

親父とは名ばかりピエロかも知れぬ

雷が雨を連れずに来る無礼

来年は傘寿女房は無関心

着メロも軍歌にしたら聞こえよう

半年の暦熱爛からジヨッキ

高知県 いの静草

固い鉛舐めて短気を矯めている

相打ちの覚悟ができてずばり言う

花の名を問うことよりもまず愛でる

諦めぬまだ挽回のできる午後

いいパンチ貰えば幕を引き易い

北九州市 岡田幸生

奔放なゆたかさがある志功の絵

日本語が乱れ悲しくなる時世

手の平で胡桃鳴らして生きる欲

期待を裏切られ風船がしほむ

啜われた悔しさバネに積む努力

唐津市 岩崎實

緑の日記念植樹の両陛下

写経する時間が生きているあかし

ターバンを巻きたくなつたあごのひげ

次々と薬を替える妻の医師

ゆつくりもできぬと言つて腰を据え

唐津市 北村松風

セールスを電話切らせる渋い声

好い顔で写しています遺影用

心電図棒線になり父は逝く

碁敵は悠悠俺の石殺す

友遺影読んでおけよと弔辞置く

立川市 柏野遊化

温暖化花に来る虫ずれていく
優しさも強くなければ適わない
思いやり受け止めるのも思いやり
古典が新鮮きよの特番記事よりも

横浜市 川島良子

それぞれの暮らしの中にあるルール
同性の視線の先にある嫉妬
チャンスには強いがプレッシャーに弱い
不器用で余計なことは言わぬ主義

大阪市 安藤なつこ

大海に出るや一路出世魚
カンジュース飲み干し夏に立ち向う
二十四時間営業店長いつねの
無党派と呼ばないで私人選派

大阪市 太田としお

核を持ち人権なじるお節介
ワイドショー人を裁いて悦に入り
お前のために核を落してやったんだ
羊のように並んで買った御座候

大阪市 澤田定子

親譲りソフトな髪がなお細る
妻ギプス夫細かく指示される
白赤黄彩艶競うバラの園

地の神の怒りかとみる地の裂け目

大阪市 寺井弘子

心齋橋老舗とどん消えてゆき
きつちりと覚えた漢字薄れゆく
団塊の夫にみっちり家事仕込み
派手目着て同窓会という見せ場

大阪市 吉内福世

無理しない身の丈だけの日を送る
居ながらに満腹きぶん旅ごち
刺が有るバラだからこそ美しい
里の道会う人毎の立ち話

大阪市 吉川弘泰

子の羨つい手を出して頭撫で
財布内秋風吹けば風邪を呼び
小遣いをけずるな肴まじくなる
チャンネルを変えても怖い画が続き

泉津市 助川和美

だんだんに太り服買う不経済
父の日に初孫の顔プレゼント
門限も親の愛だと気付かない
貧乏神笑つていれば逃げて行く

門真市 矢阪英雄

夕蜘蛛は糸をしかけて落とし入れ
光る網宙にめぐらし獲物とる
蟬が鳴き暦一枚剥がし取る

蜥蜴の子ガラスにへばり影大に

河内長野市 内海綾乃

窓開けてビワつつく鳥眺めてる

サングラス姉さんかぶり鉄ふるう

アジサイの葉雨喜ぶよカタツムリ

風鈴の気持よい音風に乗る

河内長野市 黒岩靖博

元旦に福の夢みた古稀の年

麦ご飯遠い昔の青春譜

腕白でつけた勲章脛の傷

アトビーの痒い痒いは生き地獄

岸和田市 原崇善

カロリーを制限します明日から

蟻さんのくびれがほしい私にも

案ですと言ってはいるが決つてる

手柄上げ威張つて見たい時もある

岸和田市 米富淳風

つゆの雨等しく降ればよいものを

憎かった餓鬼大将も好好爺

スリムなら日の目見るだろ服が増え

あと少し花も実もある一步二歩

高槻市 男植地勇

挑戦だ体に負けず頭にも

増水で白鷺餌に有り付けず

今こそと芝生も雨で背伸びする

風蘭の甘い香りがよんでいる

高槻市 笠原乃りこ

花の香を調合してる宵の雨

公園の新芽を借りてさつき展

公園の山も朝のビタミンC

ヒトゲノムこの頃なぜか不調です

富田林市 古田千華

すれちがう人の息にも秋が舞い

イメージの風呂敷揚げヒント呼ぶ

秋雨の乱調ピアノソナタ聞く

雨の音いつしか心地よいリズム

羽曳野市 松本静子

風鈴がチリチリ鳴れば涼くれる

うちわには毎年世話になつてい

祭りにはうちわが出番待つてい

糠漬のキュウリなすびがうまいなあ

枚方市 小川良吉

せめて芋腹いっぱい敗戦記

いっばいの靈気いたたく朝散歩

何事も精いっばいの戦中派

民宿で一ぱいの蟹主役の座

枚方市 坂本ミヨノ

梅雨明け狂想曲の蟬の声

野良猫に餌持つて来る迷惑な

金魚鉢泳ぎ回って風物詩

晩酌にアユの塩焼目がなくて

藤井寺市 津 田 シルク

ステージは田の中雨よたんと降り
ヒト科の口魔物に見える生け簀中
クールビズもうこれ以上脱げません
趣味の会奥深くてもはまり込み

八尾市 田 邊 浩 三

世界地図書き替えてゆく温暖化
目をつむり片足立ちで老い計る
子供らをバスに送って一会議
開票の前に当確出る選挙

大阪府 西 川 冷 子

待ち侘びる蛍とともに睡魔来る
霧立ちて重なる屋根の数知れず
小さくてもやはりダイヤの輝ける
公園の笛の旋律夕涼み

神戸市 武 田 恵美子

これ言った前置きしてから話する
老いてなお忙しい事が止められぬ
楽しいわ良き友とのティータイム
脂肪腹すこしずつ取りおさらばだ

加東市 岩 本 美緒子

小半時ホタルのシーンうっとりす
タイムトンネル還る国民小学生
さくら組幼な面影抱き合える
折り紙の遊び喜々とすダイクラブ

篠山市 永 井 かほる

いろいろ実り世話のみかえり感謝する
家族の輪小さくなつて気ままふえ
長雨で野菜の病気ふえてくる
ぬすまれたカバンが返りホツとする

三田市 辻 開 子

雨あがり庭樹も映えて元気だす
孫を追うカメラピンボケばかりなり
ABC昼はラジオで夜はテレビ
人生のロマンを綴ってみたい年

奈良市 尾 畑 なを江

無い袖を振ろうとしたら知恵が湧き
前を見てしつかり歩く蟻の列
あまりにも早い早いよカレンダー
おまかせで気に入ったもの出て来ない

奈良市 田 中 賢 治

煽てられ予定過ぎてもマイク持ち
低気圧雨を乞う山素振する
根回しは四方山話からそろり
好きな靴履けば笑顔の輪に入り

橿原市 藤 永 実千代

はいチーズ言われなければ笑えない
程々にあくも混じつて個性成す
風流を欠いて風鈴鳴り渡る
ちよい太が良いとは嬉し医者弁

和歌山市 坂部 かずみ

天気予報当り外れの多い年
情報の海に沈んで浮かばれず
今夜だけ酔つてみたくて飲む梅酒
定刻に起きて気候を繰返す

和歌山市 根田 よしこ

無人駅みなケータイと話して
機嫌よく夫出かける定年後
嘘八百バレても平気議員さん
身の程を忘れて今日も突つ走る

和歌山市 堀 富美子

暫くは老いという字をしまつとく
コーヒ茶碗仲間欠けると雑にされ
梅雨入りへほっと一息花の水
旅の湯にワインレモンと香が楽し

鳥取市 津村 律子

夏休み途端早起きする子供
農村広場ラジオ体操する親子
涼を呼ぶ笹蕎麦の旗よく揺れる
どっこいしょ掛声ばかり多くなる

倉吉市 酒井 芙美子

許そうと心に決めた子の進路
居酒屋で今日一日のうさ晴らす
窓際族明日を信じて窓開ける
ワープロに株を取られて筆が泣く

境港市 中井 虎尾

保険屋のお得お得は自社の事
値下げ品値引きの品にわけがあり
一回も振らずに俺は三振か
いい気持紫陽花ぬれて笑つてる

鳥取県 大田 勝誉

バラ咲かす溢れんばかり色香酔う
親よりも越えてほしいね暮し向き
煩惱があるからまんだ生さられる
あの雲が横切らぬ内に退散しよう

鳥取県 坂本 智子

愛された二人の門出幸あれど
再会は夢待ち続け未来へと
過した日彼氏とデート夢の中
母の眉気持ちすぐれず曇り顔

鳥取県 田口 清帆

この世は恥と頭はかき次第
新しい機械に慣れず弾む汗
拍手して褒めてやめさす聞き上手
三世代負けるが勝ちに波立たず

鳥取県 竹森 富久江

肩の荷を下ろしてやつと舐い船
下駄履きの歩いた道に悔いはない
思案する手の平に歩を二つ持ち
趣味ひとつ舞つて輪の中風のなか

鳥取県 松岡照美

反抗期なんとか風も止みました
負うた子に諭す話を聞かされる
命がけ歩道の割れ目大根出た
二人なら平成航路乗り切れよう

松江市 相見柳歩

浴衣からこぼれるぼろり京ことば
痒い所とてもはずかしくて言えぬ
貸す方がマナーを持ってほしいだけ
脱いで行く再チャレンジだ蛇の皮

松江市 柏井日出子

日輪のゆらゆら岬句碑に舞う
もとかんぼ宿が時代の宿になり
一世紀後も息づく中也の詩
無償愛師のあたたかさふみのたけ

松江市 松浦登志子

子供見て親で納得するマナー
親ならばこそよと恩を押しつける
無防備を狙ったように虫が刺す
子の自慢夫婦でだけねお父さん

安来市 原 煩惱児

切り返す刀の刃こぼれてる
追従のうまい男の化けの皮
出雲弁で聞くといや味も気にならぬ
願望をうまくまとめて一人っ子

府中市 岩本雅代

雨雨雨アジサイ嬉しかたつむり
惚けたふり急場逃れる技も持ち
病んで知る娘の傘の温かさ
廃校のバラがさみしく空仰ぐ

東かがわ市 中塚 寿々女

花好きが塀を越えたお付き合い
母惚ぶ名もなき花に立ち止まる
月明り動く二人の影法師
六十路坂 竹馬の友の電話増す

山鹿市 阿部 ミツ子

ツバメさん巣立ちしところ忘れずに
五匹の子雨の合間をエサ取りに
一羽二羽巣立の時を親見つめ
祇園祭屋台の灯り賑うて

協賛柳川上誌の秋 協賛柳川上誌の秋

締切 10月10日(水)
用紙 各題毎に便箋の左右に2句ずつ(4枚使用)、番号整理上、便箋には記名しないで下さい。

出句料 1,000円
題と選者 各題2句

- 「無駄」 神夏磯典子 共選
- 「魔」 村上玄也 共選
- 「比べる」 板野美子 共選
- 「失う」 日野 愿 共選
- 「無駄」 古久保和子 共選
- 「魔」 前田咲二 共選
- 「比べる」 長島敏子 共選
- 「失う」 河内 天笑 共選

投句先 〒593-8305
堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会
TEL・FAX 072-278-4706

特別寄稿

一枚の写真

古藤 愛子

名古屋の松坂屋の七階で今年二月二十八日から三月五日まで、今をときめく田辺聖子さんの「田辺聖子の世界展」が開催され最終日にサイン会がある事を知り、ぜひお会いしたいとは思っていました。父の「川柳の群像」出版の折には大変なご尽力を頂き、かねがねお目にかかつてお礼を申し上げたいと願っていたので妹と朝早く出掛けました。

今から十六、七年前の事ですが、その頃私は聖子さんの小説が面白くて片っ端から読み漁り、聖子さんの世界にはまっていた時期でした。聖子さんと父とは川柳を通して以前から手紙のやりとりをして親交があり、父から聖子さんと名古屋のホテルで会う予定だと聞かされた時千載一遇のチャンスと思いい父に頼み込んで行く事になりました。

ホテルのロビーは歩く靴が深く沈むほどのジュータンが敷きつめてあり、今まさにあ

の憧れの聖子さんにお会い出来るのだと思うと、緊張感で胸が高鳴り、向こうから赤い洋服の聖子さんがステッキをつきながらにこやかに秘書の方と現われた瞬間、私は雲の上を歩いているような錯覚にとらわれた事を思い出します。

私は妹は松坂屋に九時前に着きました。すでにサイン会の人らしく十数人の人が並び、十時の開店を今か今かと待っていました。エレベーターとエスカレーターとはどちらが早いかと考え、開店と同時にエレベーターへ向うグループに混じり走り出しましたが、会場へ着いたとたんサイン会は十一時からと告げられ、その場にへなへなと座り込んでしまいました。

百名限定の整理券を握りしめ待つ事一時間、やっとサイン会が始まりました。聖子さんには秘書の方がごまめに世話を焼いてくれました。私の番になり以前のホテルでの写真をお見せし「川柳の群像」出版のお礼を述べたけれど、返事はありませんでした。妹がすかさず「先生に直接お礼を言いたいのです。が後でお時間いただけませんか」と言った所、近くにいた五十がらみの男性が「サイン会がすんだら控え室までついてきて下さい」と言われ、胸をなでおろしました。

サイン会が終り大勢の人が見送る中、聖子さんは真綿でくるむように守られながら、カーテンの奥の控え室へ消えていかれました。私と妹があわてて後を追っていくと、さきほどの男性に少し待つように言われ「昨日の東京のサイン会は大勢の人で大変でした。祝賀会、講演会と続き先生は大変お疲れです。今日名古屋は少ななくてよかったです」と言われました。

程なく中へ入れて頂き、緊張の面持ちで聖子さんの前へ行き、あらためて写真を見せながら本の出版のお礼を述べた所、小さなかわいらしいお声で「これ、ただけですの？」と言われました。私も家宝の一枚の写真だったので返答に困っていましたら、秘書の方が「先生、それはダメですよ」と言われました。妹が「すみません、写真を一枚撮らせていただけますか」と言うのと側にいた若い男性がシャッターを押して下さり、私と妹が聖子さんを真中にして座って撮って頂きました。小柄な聖子さんを上から押さえこんで撮れてしまったのではと写真の出来を随分心配しましたが、そこは取材に慣れた方、真ん中で余裕のある表情でにこやかに微笑まれ、さすが妹と私は安堵の胸をなで下ろしたのでした。家宝の写真は複写してもらってお送りしました。

愛染帖

新家 完司 選

和歌山市 木本 朱夏

スフィックスのかたちで世間見てる猫

(評) 姿勢は「スフィックス」。表情は「哲学者」。道行く人間を冷静に観察し、「おまえ達は何を目標に生きているのか？」問いかける。

芦屋市 黒田 能子

階段はひたすら下を見て降りる

(評) 上を向いてはダメ。前後左右もダメ。ひたすらステップを凝視して降りる。踏み外して転んだら、間違ひなく骨折、即入院だ。

豊中市 水野 黒鬼

推敲のあげく字数が不足する

(評) 推敲は大切。だが、いじり過ぎると活きのいいサンマから油やワタを抜き取り「新鮮な味」を殺してしまうことになる。

樺原市 辰谷真理子

貧者には貧しい詐欺が仕掛けられ

(評) 貧しいがゆえに人を騙し、貧しいがゆえに騙される。釣り人は獲物の口に合わせた餌と鉤と糸を用意する。詐欺師もまた同じ。

鳥取市 土橋 螢

死ぬことが難しいから生きている

(評) 生きとし生けるものすべて、その生を終える瞬間は苦しみが伴う。もし、その苦しみがなければ、みんな喜んで死んで行く。

三田市 堀 正和

欠席の通知 故の字がついてくる

孫が来た日は葉まで飲み忘れ

尼崎市 山田 耕治

よくたべたよくたべたなと老母をほめ父の日のはでなポロシャツ着て見せる人間が聴いているとは知らぬ虫

富田林市 片岡智恵子

ひびかない拍手だきつと義理だろ

木を伐った地球黄色くなってくる

弘前市 高瀬 霜石

手料理といえるだろうか冷奴

タクシーが稼ぐおめでたおとむらい

シドニー 坂上のり子

人間にジェラシーという重い業

白髪でも知らない事は知りません

海南市 三宅 保州

鞍馬天狗まだ健在の村芝居

表裏あっても同じコインです

八尾市 村上ミツ子

もう誰も送ってこないお中元

目印の酒屋がでかい父の地図

寝屋川市 北田ただよし

入門書解ったような気にさせる

ぼく宛のメールほとんど請求書

東かがわ市 川崎ひかり

スーパーで汗の引くまでひと休み

不確かなこの世確かなあの世行き

大阪市 岩崎 公誠

発泡酒ラベル派手だが好きじゃない

真剣に生きているのが見えぬ人

芥子市 政岡日枝子
サインコサイン卒業式に置いてきた
(評) 夢でうなされるほど苦悶したあの数式。今、何かの役に立っているのだろうか？ エネルギの無駄遣いではなかったのか？
河内長野市 村上 直樹
広辞苑 明日のことは書いてない
(評) 明日という日に何があるのか、誰にも分からないから楽しく生きて行ける。にもかかわらず、胡散臭い占い師に頼る人がいる。
弘前市 高橋 岳水
同じ字を何度も引いて苦笑する
(評) それも日を置いてではなく、「つい、さつき」だから苦笑するしかない。しかし、面倒だからと辞書を引かなくなったらオシマイ。
京都市 高島 啓子
アマソンの奥でもナイキ履いている
(評) 逞しい商社マンの努力の結果か。しかし、地球上どこへ行っても同じような服装になってしまったら、つまらないことだろう。

堺市 羽田野洋介
ちよい悪が混じると弾むクラス会
宛先で記念切手を使い分け

香芝市 大内 朝子
バラ色の余生で砂を噛んでいる
老いるって干物になってゆくんだね

高槻市 乙倉 武史
嫉妬心燃やして生きている命
息切れは無理をするというお告げ

寝屋川市 富山ルイ子
「吉兆」で喜寿の祝をするという
一生の思い出になる祝膳

大阪市 前 たもつ
頑張らなくていいと自分に言い聞かす
びつたりの靴に出合ったことがない

岸和田市 雪本 珠子
生きるため人の煽てに乗ってみる
最近はやさしい声に飢えている

枚方市 海老池 洋
ためになるテレビ途中で寝てしまい
組板の音にも波浪注意報

富田林市 中井 アキ
ノックできる扉をひとつ持っている
紫陽花も私も魔女になってゆく

西宮市 藤本 直
夏痩せに無縁の妻と鰻食う
和歌山市 田中 みね

すっぴんでいいんじゃないのこの暑さ

鳥取市 岸本 孝子
長生きをしたいと思う国でない
孫たちとお墓かこんで乾杯す

豊中市 安藤寿美子
赤ちゃんの泣き声嬉し垣根越し
雑草も花をつけると情移る

豊中市 吉田あずき
食後呑む五色の葉ささえ楽し
幸せの形わたくしなりにある

尼崎市 加川 靖鬼
風呂上り裸の子供追うはだか
料理する手際でナース採血す

西宮市 緒方美津子
人前で頼むときいてくれる父
わが声をテープで聞くとへこみます

シドニー 森本クックバラ
見ちゃおれぬ在外選挙権を取る
国富んで暖衣飽食ゴミの山

高槻市 片山かずお
無謀にもマネキン着てた服を買う
デジタルが何か知らぬが生きている

西脇市 七反田順子
星の砂新婚さんの香りする
雲雀鳴く背中に負った子は眠り

加東市 中上千代子
鉄橋が無ければ只のせまい谷
余部の小石一つをお土産に

松江市 相見 柳歩
七月の二日がど真ん中の日だ
次の世も君とキスから始めたい

大阪市 神夏磯典子
昔話とんちんかんで孫が寝ぬ
羨ましいな若い腰線胸の線

鳥取市 岸本 宏章
東京も地方があつて生きられる
賽銭の五円音では負けてない

茨城市 藤井 正雄
父の声子の声路地の竹とんぼ
ペンが立つ無口が嘘のような人

寝屋川市 籠島 恵子
うれしい日予定なんにもない明日
三田市 北野 哲男

大阪府 高木 道子
独酌の相手に丁度良い落語
紫陽花を丸う咲かせて雨上がる

大阪市 井丸 昌紀
信号機信用できぬのは黄色
倉吉市 松本よしえ

唐津市 仁部 四郎
にんげんは雑食性でおそろしい
つい夢中母校の野球ベスト4

八王子市 播本 充子
ヒマワリでいられる鈍感なあなた
和歌山市 喜田 准一

押しつけへ倍の力で押し戻す

東大阪市 北村 賢子
たった一度の人生なんとこの程度

紀の川市 辻内 次根
自分だけ不幸と思う医者通い

札幌市 三浦 強一
妻の愚痴母の愚痴聞く役回り

和歌山市 古久保和子
立ったまま死ぬ向日葵も弁慶も

鳥取県 竹信 照彦
外に出て煙草を吸ってまた戻る

藤井寺市 高田美代子
忘れ物ですポツンと居るわたくし

唐津市 坂本 蜂朗
夢の中妻の手綱が外れてる

八尾市 高杉 千歩
受信メール繰り返し読み癒される

尼崎市 春城武庫坊
僕の無力誰より僕が知っている

藤井寺市 鴨谷瑠美子
意見するとき唇が尖る癖

大阪市 谷口 義
場所柄を弁え欠伸しています

尼崎市 春城 年代
猫には猫の思惑あつて通う道

枚方市 丹後屋 肇
荒天に開き始める沙羅の花

鳥取市 西川 和子
歳月に身内も遠い人になり

大阪市 津守 柳伸
紫蘇ジュースひとつ覚えの対暑法

堺市 加島 由一
美しい日本稲田をとんば飛ぶ

東京都 岸野あやめ
名門のホテルの椅子の高い脚

堺市 村上 玄也
ファッションとやらでだらしない身なり

美作市 山本 玉恵
なりゆきは天におまかせ高いびき

鳥取市 土橋はるお
逸品はないけど飾り棚はある

吹田市 穴吹 尚士
にんげんの海で溺れる真人間

大阪市 奥村 五月
追伸でやつと心を整理する

吹田市 早泉 早人
ぼちぼと残りの命燃やしてる

堺市 山本 半錢
散らかした机に自分見えてくる

大和郡山市 坊農 柳弘
腹割って話せる友と酌む地酒

藤井寺市 太田扶美代
ねつとりの視線女は察知する

八尾市 言村 一風
正論も多数決にはこてんぱん

弘前市 福土 慕情
疑えば値引きの札も怪しいぞ

池田市 上嶋 幸雀
熱帯夜妻の寝息もシャクの種類

松江市 三島 浜呂
車庫に着きほつと息つく路線バス

鳥取市 福西 茶子
警察も国も役所も信じない

四條畷市 吉岡 修
不揃いのコップしかない古世帯

神戸市 田中 章子
片手だけで足りる料理のレパートリー

堺市 奥 時雄
先生が通う遠くのパチンコ屋

和歌山市 根田よしこ
老母元氣ちよつと負けそどうしよう

大阪市 伏見 雅明
島国の風情消し去る外来種

倉吉市 野口 節子
五十年番茶の味が変わらない

鳥取市 武田 帆雀
解体屋屋根をつまんで右左

豊中市 神野宇乃子
ちりめん山椒となりの分も作り置き

大阪市 太田としお
言葉より汗の力を信じてる

和歌山市 坂部かずみ
良い事がまたありそうな新住所

奈良市 矢野 良一
雨音に気分安らく昼下がりに

八王子市 川名 洋子
神様に任せきれずに千羽鶴

堺市 矢倉 五月
四苦八苦したのを娘じヨイと解き

東大阪市 中岡 妙
くちなしの香り私の棘を抜く

松江市 津川 紫見
引き受けてみれば器の貌になる

箕面市 広島 巴子
潤いが欲しい肌にも地球にも

大洲市 中居 善信
反核反戦口癖にして無視されて

大阪府 小栢 こそえ
幼子に引きもどされる歌を聞く

鳥取市 土橋 睦子
夫よりも少し長生きせにゃならぬ

羽曳野市 森下 一知
百均の履歴書で射る二度の職

松江市 松浦登志子
バランスのとれた食事を食べすぎる

羽曳野市 吉村久仁雄
白地図を持って六十路の峠越え

八尾市 田中トシエ
広告の肝心の場所字が小さい

宇部市 平田 実男
目に見えぬ杖になつて万歩計

大阪市 渡部さと美
買うもの一つ作つてのはす万歩計

三田市 石原 歳子
思い出を笑顔で話す七回忌

米子市 中井 ゆき
新緑の色はさまざま深呼吸

鳥取市 徳田ひろこ
広告塔なくて静かな池の中

藤井寺市 鈴木いさお
嘘ついた数だけ増える数の数

立川市 柏野 遊花
乗り換えの階段下りてまた上がる

香南市 桑名 孝雄
宵越しの金を少々貯めてある

大阪市 榎本 舞夢
二年後の金婚までは頑張ろう

鳥取市 倉益 一瑠
背伸びした足が悲鳴をあげている

大阪市 柴本ばつは
あはやなあ今でもいうてくれる母

富田林市 大橋 鐘造
忘れない忘れない八月忌

篠山市 円増 純子
化粧してないとき居留守したくなる

高槻市 瀧本きよし
病室の窓いっぱい青い空

大阪市 森田 明子
用事ない時はひたすら雨が好き

黒石市 相馬 一花
水蒸気みたいに人が消失す

柏市 河野 桃葉
酒飲めばとろけるように優しい子

大阪府 米澤 徹子
気に入ったデザインだけどサイズ無い

橿原市 安土 理恵
なれそめは注いで注がれた冷や二合

唐津市 宗 水笑
押し売りを諦めさせる遠い耳

鳥取県 大塚美代子
美人ではないが優しい子に育ち

藤井寺市 若松 雅枝
真昼避け今日も元気に医者通い

日立市 加藤 権悟
晩学の峠明日も忙しい

大阪府 桑田ゆきの
はじくればまだまだ出るよ偽装もの

和歌山市 柏原 夕胡
生きていることがしんどくなってくる

泉佐野市 稲葉 洋
お金では買えぬ気楽さ知る歳に

唐津市 樋口 輝夫
物探し昨日の続きやっっている

堺市 西村りつえ
見当らぬ鍵へ一日棒にふり

鳥取県 岡本 幸枝
かすがいのはずの子供がちぎれ雲

今治市 塩路よしみ
空の青洗濯物がよくしゃべる

誹風柳多留一篇研究 25

山口由昭・小栗清吾
伊吹和男・山田昭夫

増田忠彦

清 博美

166 きんぎ書画ならべた斗しりんせぬ

山口 吉原の花魁のトップクラスは単に容色に優れているだけでなく、琴三味線から茶道、華道、香道、和歌、俳諧、書道、絵画、囲碁、将棋に至るまで大名の相手ができるほどの教養を充のころから教育されていた。また、その部屋にはこれらの道具が一式備えられている。「松の位の太夫」と言われる所以である。よく話に出てくる仙台高尾などがそれである。しかし、時代が経って花魁の格式も落ちてくると、これらの道具を一応部屋に備えておくものの、客が所望すると「一向に知りません」というお粗末な花魁も出てきたのである。

座敷持琴ハあ、して置はかり

一〇二九

茶器迄も所持ておいらんしゆらい負

二九三二

清 贊

167 朝がへりだんく内へちかくなり

山口 遊んで来ての朝帰りは家に入りにくいものである。相手が親であつても女房であつても、一悶着が予想されるからである。これは吉原帰りの息子が、亭主であろうか。ともかくその家がだんだん近くなる不安な心境。朝かへりころされる気であつたと入り

朝帰りぬす人程に工夫をし

明三満一

山田 贊。見事な表現ですな。

清 同。川柳の面目躍如。

168 あきの守時分ハふつこほとの事

山口 平清盛がまだ安芸守だった頃、伊勢の海から熊野権現へ参詣の途中、船に鱧が飛び込んで来たことがあった。「先達申けるは、『是は権現の御利生なり。いそぎまあるべし』と申ければ、清盛のたまひけるは、『昔、周の武王の船にこそ白魚は躍入りたりけるなれ。是吉事なり』とて、さばかり十戒をたもちて、精進潔斎の道なれども、調味して家の子、侍どもにくはせられけり」と『平家物語』一卷にあつて、熊野権現の靈験を述べる下りがある。鱧は稚魚を「せいご」もつすこし成長したものを「ふっこ」といつて成長と共に名を変える出世魚である。本句は後の関白太政大臣になる清盛も、安芸守の頃は鱧でなく「ふっこ」だったろうという洒落を利かせた見立ての句。

其魚は潮煮しろと安芸守

七六八

勿上る鱧にひれの付く威勢 新三五柳一

清 贊

169 たれながらだあくといふ下女がせな

山口 「垂れながら」は小便を垂れながらで

あるう。「だあだあ」は馬を制するときのかけ声である。田舎から出てきた下女の兄がどこかで立ち小便をしながら連れて来た馬を制しているのである。田舎者の無作法な様を詠んでいて、川柳にはよくとりあげられる風景である。

あれ垣を喰ふよと下女かせなにい、

明七桜 4

から馬で今年も帰ル下女がせな

七 40

清 贊。

170 ぬえをゐた手きわに宮ハふわたのり

小栗 ふわとは、慎重に考えることなくくうつかりと行動するさまを表す語。軽はずみに。

(一日)

源三位頼政が以仁王(高倉宮)を担いで謀叛を起(こ)したことを詠んだ句。高倉宮は、鶴

を射た頼正の手際の良さに心を奪われてしまつて、軽率にも謀叛計画に乗つてしまつたものだという事。もつとも『平家物語』(巻第四「高倉の宮謀叛」)には「宮は、「このこといかがある」とて、しばしは御承引もなかりしかども」とあつて、多少は躊躇した気配があるのだが。

ぬえなぞをけんたくにしてす、め込ミ
安四鶴 2
ついほろびますとより政す、めこみ

拾五 31

清 贊。

171 かけて来た程に娘の用ハなし

小栗 そのままの句であろう。娘、といつてもまだあまり色気ついていない少女であろうか、小走りに駆けてきたのだが、急いでくるほどの用事があったわけではない。娘の日常の行動を細かく観察して「そうそう、そんなもんだよな」と思わせる句。

ア、ら用がましく娘かけて来る 五六 25

山田 贊。ほのぼのとしたいい句ですね。一昔前の紅いほつべの少女が目にかぶ。

清 同。

172 かんばんを見るなとみそを買いやり

小栗 赤味噌と銘酒「瀧水」で有名だった「四方ヶ店」の句。四方ヶ店は和泉町(正しくは新和泉町)にあったが、『続江戸砂子』に「新和泉町 さかい丁のひがし丁」とあるように、芝居町と人形町通りを隔てて接して

いた。そこで、味噌を買いに使いを出すときには「芝居の看板など見て道草を食うんじやないぞ」と念を押すのである。

此味噌ハ一ト暮見たに違へぬへ 四三 5

いそくミそかんざかまへて引ツたくり

安九信 3

清 贊。

173 六夜きやくあした八山のしほれ草

小栗 品川遊里の句。「山」は坊主を指す隠語で、二十五六夜の紋目を仕舞った坊主客が、翌日になって大変な散財をしてしまったことに萎れているという意。「山のしほれ草」は、盆唄のもじりまたは文句取りのようである。因みに『浮世風呂』(四編巻之上)には次のようにある。

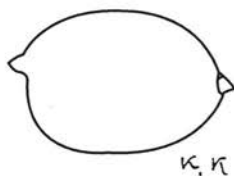
甘「イ、エサ、江戸もむかしは踊たさうなが、繁花の地は流行が速いによつて、そこで後々は踊らぬ様になつたものさばんとう「なぜまた盆〜と云いますね甘「あれは唱歌によつて盆〜と云来つたのさ むだ「ばんとうしらずか。盆〜はけふ翌ばかり、あしたは嫁のしほれ草、といふ唄がある

清 贊。文句取多謝。

共選欄

檸檬抄

(薰風書、カットとも)



「長い」 鈴木公弘 選

齡をとつても髪と爪とは長く伸び
 まだまだの長い道のり拉致事件
 今晚が山と言われた夜が明けぬ
 犬自慢聞いている犬もあくびする
 長生きの家系を悔やむ負担増
 一杯の酒生涯の友となり
 起承転転転と長らえる
 ロングヘアに輝く明日のある若さ
 定年日通ったビールを撫でて出る
 振り返るハーフパンツの長い脚
 長寿国紅はますます朱くなる
 一人居に切れぬ情けの長電話
 長電話きつと相手もそう思い
 聞いてると思えばこそその長話
 いらんこと言うから話長くなる
 ひと言を気にして長い長い夜

尼崎市 春城武庫坊
 寝屋川市 富山ルイ子
 和歌山県 三宅 保州
 大阪市 古今堂蕉子
 河内長野市 村上 直樹
 大阪市 川端 一步
 大坂市 亀岡 哲子
 西宮市 吉川 寿美
 羽曳野市 岩崎 公誠
 大阪市 坂部かずみ
 和歌山県 斎尾くにこ
 堺市 西村りつえ
 札幌市 三浦 強一
 岩出市 村中 悦男
 堺市 村上 玄也
 大阪府 米澤 俣子

「長い」 西口いわ多 選

長年のツケ社保庁にのしかかる
 気が長くないと病院へは行けぬ
 枯れるまでまだまだ長い姥盛り
 長い歴史へ一点灯すわたし流
 長寿でもその生き方に隠し味
 戦争のドラマに終の文字はない
 ひと言を胸に納めた長い夜
 長いながい沈黙決意せまられる
 旅の果てにはきつと終着駅がある
 長生きの母は粗食でありました
 時効などない人生へストレッツ
 長い物に巻かれて星を見失う
 長い髪切つて失恋かと聞かれ
 短冊に長い願いを書きました
 みな逝つて長いロープを任される
 人生の長さ抱きしめ老いも佳し

日高市 根岸 方子
 愛知県 早川 遯行
 河内長野市 山岡富美子
 立川市 柏野 遊花
 札幌市 小沢 淳
 弘前市 高瀬 霜石
 大和高田市 鍛原 千里
 尼崎市 長浜 美籠
 枚方市 寺川 弘一
 堺市 志田 千代
 八尾市 高杉 千歩
 熊本市 永田 俊子
 京都市 榎本 宏子
 豊中市 山門 タミ
 藤井寺市 太田扶美代
 尼崎市 春城 年代

眠られぬひとが夜明けを待つている
 たまさかに結う夏帯の長いこと
 ズボンみな背がちぢんだか長い裾
 合掌がなかなか解けぬ八月忌
 残高と余生の延びが釣り合わぬ
 柿の皮長ながとむく苦勞人
 長雨に辞書の散歩を欠かさない
 長くなるけど指相撲から始めよう
 長い長い平和戦車を走らせる
 空と海いちどくると回ろうか
 延長コードどこまで進む高齢化
 老人を長生きさせぬ施策する
 象の鼻きりんの首にある役目
 またもとの思案に戻る長い夜
 長雨の気分転換ハエを追う
 哲学の話が尽きぬ蕎麦畑
 胎内を出てから長い回りみち
 酸性雨に耐えてロダンの長い思惟
 気が長くないと病院へは行けぬ

軸吟

紀の川市 辻内 次根
 弘前市 今 愁女
 大阪市 津守なぎさ
 八王子市 播本 充子
 弘前市 高橋 岳水
 鳥取市 武田 帆雀
 大阪府 初山 隆盛
 松江市 相見 柳歩
 砂川市 大橋 政良
 西宮市 山本 義子
 弘前市 高瀬 霜石
 鳥取市 土橋はるお
 堺市 矢倉 五月
 橿原市 居合真理子
 松江市 銭山 昌枝
 弘前市 斉藤 苺
 米子市 白根 ふみ
 和歌山市 古久保和子
 愛知県 早川 遡行
 寝屋川市 籠島 恵子
 池田市 北出 北朗
 藤井寺市 高田美代子

長居して猫と仲良くなつただけ
 仏壇の奥には長い道がある
 癌手術長い不安がちよいで済み
 時々はキリンも首を持って余す
 六根清浄世界遺産へ長い途
 子を思う愛の長さは計れない
 マンガばかり読む子よ長い目で見よう
 夕映えて私の尺度長くする
 青春を謳歌している長い髪
 空と海いちどくると回ろうか
 定年後長い閑白入れかわり
 トンネルの長さよさくらからさくら
 胎内を出てから長い回りみち
 長い目で見れば違ってくる世間
 長丁場仮面が少しずれてくる
 哲学の話が尽きぬ蕎麦畑
 ため息の長さはわたくしのすべて
 今晩が山と言われた夜が明けぬ
 合掌がなかなか解けぬ八月忌

軸吟

羽曳野市 酒井 一壺
 鳥取市 倉益 一瑠
 大阪市 川端 一步
 大阪市 谷口 義
 和歌山市 福本 英子
 鳥取市 山口千代子
 篠山市 遠山 可住
 竹原市 石原 淑子
 海南市 堂上 泰女
 西宮市 山本 義子
 大阪市 岩崎 玲子
 寝屋川市 籠島 恵子
 米子市 白根 ふみ
 出雲市 竹治ちかし
 長岡京市 山田 葉子
 弘前市 斉藤 苺
 藤井寺市 高田美代子
 和歌山市 三宅 保子
 八王子市 播本 充子
 鳥取県 佐伯 やえ
 和歌山市 古久保和子
 神戸市 伊勢田 毅

花たちと終の日までの長談義
 蛇行して女に長い川がある
 拉致の子を抱きたい親が老いてゆく

過去からの長い手紙を読んでいる

玉

古久保和子選



肝つ玉母さんがいた路地長屋
 そろばんの玉と仲良くしています
 玉の汗をかいて嬉しい夏野菜
 掌中の珠がレールを走らない
 鮎玉をしゃぶる間は平和です
 社保庁を槍玉に挙げ酔えぬ酒
 いつも頼りにしてます妻のかくし玉
 玉石が混じりこの世は面白い
 大玉になった花火の破裂音
 太陽と大地に恥じぬ玉の汗
 薬玉を割るのは賄賂貰うた方
 玉球弾いても地球を騒がせる
 ラムネ玉思えば遠い日が揺れる
 姑に磨かれまし玉の輿
 スーパーのチラシにたとある巨玉
 玉砕と言う人生の崖つぶち
 冷蔵庫確かな位置にある玉子
 とは言えく玉虫色に着地さす
 平成の孫が開いた玉手箱
 落ちていたる百玉玉にテストされ
 玉結び出来ない娘等のボタン付け
 うどん一玉独りの夜を温める

玄也 ミツ子 かずみ 碧 和郎 美千代 一風 圭一郎 淳 強一 高明 哲男 すず 敏子 像山 鐘造 遠野 裕之 ヒデコ 哲代 茂代

玉砕の形で男眠りこけ
 これ以上あつては困る玉手箱
 ビー玉を透かしてみれば良き昭和
 隣までたしかに來てた玉の輿
 名跡は劇中今日も巨玉剥く
 腹が立つシヤボン玉でも吹いてやろ
 玉砕を鳥の雑草覚えてる
 玉太り上々二十世紀知案
 あめ玉を挨拶代わり撒き散らす
 焼玉のハシケの音が耳朶にある
 氷白玉なによりすきな新仏
 誕生日鯛の巨玉を食べている
 手の届くところで消えたよシヤボン玉
 玉すだれ道行く人の足を止め
 単身赴任とても上手な玉子焼き

富子 活恵人 早人 可住 孝一 四郎 まみ子 螢 雅明 時雄 ばつは 典子 愛論 正雄 幹子 充子 修 重人 洋子 直 慕情 太田扶美代

アンテナに小さい嘘がひっかかり
 ふんふんと小さな事は聞き流す
 本当にお詫びしてるの囲み記事
 小さいが庭に蛙も住む我が家
 ミニトマト真つ赤夕日と競い合い
 大風呂敷に小さい穴があいていた
 小さいペン武器に不正を突いてくる
 門標は小さいままの現在地
 こせこせと他人の失敗突く上司
 小柄でもとても大きい父の背
 改革の文字が小さく揺れている
 小さい方取って損したこともある
 一隅を照らし続けた小さい灯
 大見得を切つて小石に蹴躓く
 ちっほけな花壇に妻の愛が咲き
 打ち水に小さな虹が顔を出し
 いたくたびも握りしめた小さい腹の虫
 チビの小さいが揺りしめる未来地図
 結びの小さいうちが勝負です
 小さい夢をそれぞれ抱いている木の芽
 まだ生きている心算小さい欲がある
 病身を小さい旅で慰める

小さい

平田 実男選



道信 善三 徳三 幸子 権悟 俊子 霜石 裕之 重人 輝夫 宇乃子 幸雀 一知 志洋 シマ子 幹子 ミツ子 彩子 志華子 康子

小さいが精一杯のダイヤです
半分は割っても小さい方がある
不平言う小さい男だと思ふ

ポケットの中で小石を握りしめ
七夕の小さな夢がぶら下がる

小粒でも甘くみるなど山椒の実
志小さくおかげで釘の味知らず

老いの背に小さい温もり日向ぼこ
風向きが変わり小さくなつた声

金魚の死孫と小さい墓を掘る
類染めて幸せと言う小さい声

小さめの茶碗にかえるダイエツト
小さい声集め政治を塗り変える

小さいが消えぬあなたシルエツト
孫とわたし時々小さい内緒ごと

佳 雄々々 扶美代

一風 巴子 晴翠 柳弘 ちかし

小さい声で暗証数字確かめる
里の盆小さい頃のボクに会う

小さいが書齋は僕の大王宙
仕舞い風呂私一人の小宇宙

銀山のニュース小さな町が湧く
人 キヨミ

妹が生まれ小さなお兄ちゃん
地 岳水

好奇心あおる小さな節の穴
天 奥時雄

小さいと蟻は思ったことがない
軸 スランプになると的まで小さくなる

意外

長浜 美籠選



アトムさえ意外と思う新世紀
温暖化意外に地球怒りんぼ

すぐそこが意外に遠い村の店
よく食べてよく寝て意外にも痩せる

不器用な父留守番の台所
意外にも姑の可愛い少女趣味

掛け軸に鑑定団の目が光る
ロボットの黙って修理受けている

百軒の団地意外な人が住み
青い目のとても上手な箸使い

片付けて見れば意外に広い部屋
生い立ちは意外偉人の少年期

一寝入りすると意外に冴えてくる
後押しに意外な人が名をつらね

検査入院意外な結果つれてくる
意外性だけが頼りという受験

どないしよ土壇場に胆座る母
本当の味方か酒で試される

意外にも飲めない人がよく喋り
共学になつて野球部強くなり

スープまで飲まず屋台の関東煮
強がるが意外に細い父の腕

浜丘 淳

水笑 きよし

英子 恭昌

注湖 孝一

四郎 四郎

みつこ 週行

一粋 一風

蕉子 正雄

ふりこ 猿杏

公誠 正和

遠野 黒兎

他人から見れば意外な縁の糸
平穏に行くはずだった遺産分け

同郷とバツタリ旅先の意外
キリストもアラームも戦好きだった

組板の鯉は意外と心澄み
助け舟出して意外な波が立ち

消去法だから残つただけのこと
定年後も妻と一緒に居てくれる

定年を機に関白が折れて来る
末席の意見が意表つて来る

貧乏な頃は意外と燃えていた
意外にも小骨の方が深い傷

あの人も離婚余程の事あつて
意外とは誰も感じぬ辞任劇

難関の父にあつさり許される
佳 充子

泰然と椅子取りゲーム勝ち残る
私にも隠れファンがいるらしい

一冊の本が意外な風を生む
本当のわが児だろうか出来過ぎる

意外にも真向う勝負挑まれる
人 庸佑

売る人も買う人もいる月の土地
地 霜石

子の日記尊敬するのは父とある
天 輝夫

ライバルが思ったよりも潔よい
軸 奥時雄

悶着が思わぬ時にけりがつく

初歩教室

題一 高い

三宅保州

私の川柳観から(七)

☆佳句を書き写す「書写」を習慣づけて、じっくりとその句の良さを鑑賞する。

☆入選の競争率が高く、質的にもレベルの高い結社や大会に参加することが、自分のレベルアップに繋がる道である。

☆川柳が上手くなる第一条件は、川柳が好きになり生き甲斐とすることである。

☆句は人なり 人は句なり

川柳は如何に短いかを思わねばならない。

そぎ落としそぎ落とししなければならぬ。

おのずから五七五の独り言

梶高薫風

梶野無限 この言葉に尽く

マクソポイント・アドバイス

「高い」を主役にして詠んでほしい。「高

低」とか「高い安い」と詠むと「高い」が主

役になりません。

原 高低の少ない道を選ぶ万歩 はじむ

添 高い坂道を避ける万歩計

原 給料の高い安いは気にするな 柳 歩

添 高給優遇に騙されないつもり

原 高い鼻低い鼻ありポーナス日 勇 治

添 棒グラフの高さに比例ポーナス日

原 背伸びしてひまわり高くもえている 房 枝

作者の思いまで詠むよう踏み込んで下さい。

向日葵の高々と咲き花孤独 新田武雄

ひまわりの丈おとうを思うなり 木本朱夏

原 高いほう褒めて買われ売上手 松 風

「売上手」は説明のしすぎで不要。それは

余韻として読者に感じてもらうように。

添 高い方褒めればかりに買われされる

原 年毎に気になり出した背の高さ 千 華

「年毎に」が分かり難い。

添 背の高いことも本人には悩み

原 高い高いされて父と子空の中 夢

されているのは子で「父と子」はそぐわぬ。

原 高くとも野菜国産妻選び (畑) 賢 治

原 高くても安全日本産を買おう 秋 星

投句時期に某国産の食品等の害毒性が問題

になっていったが、時事吟は何年後でも通用

するかも考えるべきだと思います。

原 頭が高いレベルは低い七党首 たん吉

少し言い過ぎでは。例えば「当選をしたら

頭が高くなり」ぐらいいにしたい。

原 鼻が高い孝行息子嫁が来ず 乃りこ

原 高望みしてはいいないが縁遠い 弘子

原 高のぞみしては良縁逃してる 信子

同想句は必ずしも悪くはないのですが、佳句

にするにはかなりの意外性等が望まれます。

【添削・批評句】

原 高利貸しさん血も涙もあるのかな 瑛子

添 せめてもは人情ほしい高利貸し

原 高いとこ望まず気楽一番だ 周子

添 高望みしないと楽に生きられる

原 高い服着ないでおしゃれ誉められる 忠子

添 高い服でないにお洒落褒められる

原 高齢下助け合いつつ登る坂 (河) 洋子

添 助けたり助けられたり高齢化

原 レシートの価格をちゃんと確かめる 藤朗

高いとは言えぬ。「：高く間違われ」等に。

原 毛皮買う夢を捨てずに二十年 すみれ

「二十年」は動く。「：未だに捨てきれず」

原 電話口一段高い声で出る 孔一

添 遠くからの電話に声が高くなる

原 夢一つ叶って今夜は高いびき 寿々女

中八。「叶って」を「叶い」で中七になる。

原 ブランドの高級服より農良着好き 雅代

ブランドと高級服は重複。農良着は野良着。

原 背が高くととの会話腰かがめ 綾乃

「人との」は言わずもがな。

原 要注意高く挙げれば当てられる 実千代

添 高々と手を挙げすぎて当てられる

原 高軒彼方は気持よろしかる 貞月

添 本人は白河夜船高軒

原 高級な着物を自負で持ったまま

添 高級な着物タンスで眠らせる キヨミ

原 背高の息子何処のDNA 智加恵

添 家系には無いが息子の背が高い

原 誕生石ダイヤでどこもしてゆけず 柁子

添 物騒でダイヤの指輪してゆけず

原 日本一高い富士山登ったぞ 實

添 富士山に登ったことが自慢です

原 人生の高い買物生きる智慧 稔

添 高い買い物で学んだ生きる智慧

原 棒グラフ高さと競う俺と友 弘泰

添 ライバルと高さを競う棒グラフ

原 電が降り野菜値段が高くなり (燭) 節子

添 電が降り野菜の値段高くなり

原 ママさんを一人じめした高い付け (後) 賢治

添 ママさんを一人占めして高くつき

原 踏み台がキツチンに要る改装後 宇乃子

添 キツチンに踏み台が要る改装後

原 一本当り高くなる理髮代 像山

添 髪一本が高つく理髮代

原 高齢者も役に立ちます智恵袋 千恵子

添 高齢者まだ役に立つ智恵袋

原 おかあさん頭の上で声がする やすの

添 おかあさん頭の上で叱る声

原 円高が少し楽しみバスポート 美智代

添 円高を待ちかねているバスポート

原 空へ空へ夢が大好き豆の蔓 徑子

添 空へ夢が大好き豆の蔓

原 高所恐怖でも飛行機は大好きで みち代

添 高所恐怖でも飛行機はとて好き

原 高い付け民は重みに耐えられるか (古) 節子

添 高い付け民は重みに耐えられぬ

原 高い服パーゲン日まで夢の中 麗

添 高い服パーゲンまでは夢の中

原 志だけが高いというニート かずお

添 志だけは高いというニート

原 マジックハンド月見上げては欲しくなり 映子

添 マジックハンド月を見上げて欲しくなり

原 高望み止めたら見える花の数 幸

添 高望みしては椅子から転げ落ち

原 高望みしすぎ椅子から転げ落ち 淳

原 背が高いだけが値打ちの優男 クックバラ

添 背の高い人のリュックに顔かかれ 堅坊

原 背の高い人には少し距離を置き 光子

背の高い孫を持つてるすだれ吊り きぬ子

子ども服お値段だけは大人並み 玲子

高い高いしてあげた子に背を越され 加お里

点滴を見上げて明日の日和待つ 昇

天高く梅干す母の丸い背な イセ

結局は夢に終わった高望み (高) 洋子

良く伸びた木陰は人を包み込み こそえ

肩書きが錯覚させる高い鼻 道子

本当に欲しい物なら高くない 孝子

白旗を高く掲げてお茶にする 雅明

大所高所神の死角に住んでいる 次根

高い木の陰で安心して眠る わこ

【今月の推せん句】

天辺で吠えているのは懦夫の群れ 宇野幹子

とかく懦夫は群れて遠吠えしたがるもの。

気位の高さで家計火の車 永田章司

まさに外面如菩薩内面如夜叉ということ

か。

高いビルまるで地球の刺のよう 土屋起世子

満身創痍の地球。見付けと穿ちの良さ。

いい夢を見よう枕高くする 今岡健柳

着想がお見事。あやかって枕を高くしたい。

【私の句】

高ければよいのだからかビルディング 何かも車椅子には高い位置 (登載洩れの方は役員が添削等して返送します)

秀句鑑賞

同人吟酒井一壺

— 8月号から

ふっつきれて全部磨いた窓ガラス

高島敬子

非力な私に予期せぬ秀句鑑賞の依頼に驚きましたが、せっかく与えられた機会ですので、勇気を出してチャレンジ致しました。

亡き薫風先生はいつも「二壺の句を作れ」と励まして下さいましたが、一度も褒めて頂いた記憶はありません。

故高杉鬼遊先生は常に「川柳を楽しめ」と教えて下さいました。ところが、その域にはるかに遠いところで、両先生とも永遠にお別れ致しました。誠に残念です。

両先生には、あの世で「まだまだ秀句鑑賞は早い」と苦笑いのごとでしょう。

川柳を続けているお陰で長生きをしています。天笑主幹選の一八五一句の鑑賞は、大変な作業だと、いま痛感しております。

「一読明解」の句を基本と考え、読ませて頂きました。皆さんの秀句を、最後は私の好みの句ばかりを選んで鑑賞させて頂く結果となり、申し訳なく思います。

作者の句意に会わぬところは、どうかお教しく下さい。

作者が心をこめて作った句は、読者の共感

も得られ力づけられます。作者は京都住まいで主婦の実感を素直に、さらりと表現された気持ちのいい句です。

わだかまりがなくなるまで窓ガラスを全部磨き、心がすっきりしたことでしょう。

毎日の生活の一端がこんなところにも息つき、いつまでも良い川柳を作つて下さい。

十本の指それぞれに持つ任務

安芸田 泰子

十本の指もみな頼り合い、また助け合つてそれぞれの役目を尽くしているのです。一本が怪我でもすれば、残りもみな駄目です。

人間も同じで、一家の一人が病気をすると他の家族も同じ苦しみです。

心の広い人は他人から頼られ相談され、共に仲よくなつて行くのではないのでしょうか。

十本の指に教えられました。

物のない頃は守つていたモラル

両川 無限

今の世は物も溢れており、だからこそ一層モラルが重んぜられるのでは……。特に国民の代表や、立派な国の指導者が大切なモラルを忘れ、自分の仕事をないがしろにしている、何たることかと毎日腹を立てております。読者の共感を呼ぶ句です。

銀山の世界遺産に黄信号

多久和 敬子

作者が投句された頃は、石見銀山の世界遺産登録が望みが薄かったでしょう。その後、「九回裏の大逆転」で世界遺産に決定しました。おめでとございませう。

実は私は終戦前、島根県大森町へ児童と集団疎開しており、大変お世話になりました。銀山のことも少しは聞いており、銀山の入口は何度も通りましたが、中を覗く余裕などありませんでした。

その後、退職前に一度行きましたが、寺は誰も住んでおらず、小学校は来年廃校とのこととで、町は活気もなく寂しい心で帰阪しました。あなたの句に接し昔を思い出し、今のあなたの喜びを私も頂き大変嬉しく思いました。町も大変でしょうが、これから活気溢れるでしょう。もう一度、大森町へ行って見たいと思っております。どうかお元気で……。

雨の日は少し湿っているお金

谷口 義

句はひとり歩きするとよく聞きますが、ひとり歩きする句は一人前の句だと思えます。気持ちのこもった句は共感を呼び、いつまでも心に残ります。思わぬ所で自分の句に出会ったときは嬉しいが、反面こわさを感じます。この句は人間味の表れた自然体で作られた句で、義さんの日常生活の実感が出ています。命のある句です。私の及ばぬところです。

顔も手も別人になるつかみ取り

関本 かつ子

「顔も手も別人になる」、全く面白い川柳ですね。作者は案外、真面目な性格の奥さんかも知れませんが、人は往々にして別人かと思う行動や態度を、知らず知らず出しています。言われてみればこんなことは、誰にもあるんじゃないですか。要注意です。

やはりそう見えたか席を譲られて

山本 蛙城

私も電車をよく利用しますが、いつも背を伸ばしシヤンとして立っ立っていても、周囲から見ればなんとなく身体全体に歳が出ているようですね。自分では分かりませんが、加齢ですか、寂しいことです。お互い気力でカバーしましょう。

たつぷりと流した汗が実を結ぶ

中島 志洋

志洋さんは戦争にも参加され誰からも頼られ、また親しみ易く心の広い人格者と推察します。志洋さんの句をいつも参考にしています。世の中すべてこうあって欲しいものです。

人間が好きで人間裏切れぬ

河野 桃葉

だが、こんな人は少ないのではないでしょう。この句のようだと世の中すべて平和ですが、そうは行かないのが人間の浅ましさと哀しいことに、お互い憎み合い、裏切りながら生きて行くのではないのでしょうか。

自殺するほどなら本音言えたはず

坂上 のり子

深い事情があったのでしょうか。他人には分からないことばかりですから、親にも言えぬ苦しさ、本当の苦しさは誰にも言えないのです。また言ったところで分かってももらえないのです。私には自殺する度胸などありませんが、世間ではどうでしょうか。鋭い川柳ですね。誰でもやっぱり長生きして楽しく終りたいですね。

今の世に美味しい薬なせ出来ぬ

時広 一路

私も全く同感です。何回も入院を繰り返返

し色々検査をしています。例えば胃の検査のバリウムなど、何十年前と殆ど変わってません。少し飲み易く味を付けたらどうでしょうか。医療などどんどん進んでいるのに？

次の世も遊べる癖をつけておく

土橋 はるお

大変ですよ、この癖は。本人の心次第です。どうか深みに落ちないように、身分相応に遊んで欲しいものです。

株分けが出来た頃から嫁がせる

太田 扶美代

介護保険情け切り捨て利を狙い

西村 りつえ

思った通り社保庁の句がたくさんあります。五句選びました。役人は長い間、何をしていたのでしょうか。あざれて物が言えません。

社保庁に怒りを越えて情けない

緑沢 風花

社保庁のミス万全の治療なし

野坂 なみ

ああ年金ゴミと一緒にされていた

川端 一步

許せない管理社撰な社保庁め

佐々木 満作

年金が消えていました悲しからず

近藤 正

—水煙抄

秀句鑑賞

—8月号から

渡辺 富子

昼寝している時通る選挙カー

相見 柳歩

参院選まつり中、美味しい公約を掲げて、立候補者の連呼は続く。年金、少子高齢化、憲法改正、教育再生など問題は山積である。昼寝などしてられない。今こそ山動く。

天は地の戦に飽きてピカソと哭いた

大峠 可動

ずい分昔だが、ピカソのゲルニカの前で、全身が凍りつくのを覚えた。地球のあちこちで唾み合いは続き、戦さの火の手は上がっている。ピカソの怒りと嘆きの涙は乾かない。

野次よりも手こわい冷めている視線

高山 清子

せめて口に出してノーと言えば通じる。どうせ言っても駄目だとあきらめ白けている若い群れが多い。冷めている視線は未来を見つめ、一歩踏み出す原動力になると信じた。

オーロラを見た夜は神を信じます

松尾 美智代

実際のオーロラを見たことはないが、テレビや写真のオーロラさえ、人知を超えた神秘的な美の饗宴に魅せられる。きつとこんな夜は、神を信ずる他ないだろう。

さあどうぞどうぞと奥の広いこと

田中 すす

「散らかっていますか」と招かれた家の広いこと。人の心も「さあどうぞ」と受け入れる大らかで奥行の深い人に惹き付けられる。

真相は誰も知らない髪を切る

塩路 よしみ

女が髪を切る時、未練を絶つ、昨日の私を捨てて心機一転する。誰も気付かないかも知れないが、私だけの真相を抱き一歩踏み出す。

ときめきを使い果して錆びて行く

早泉 早人

若い時の激しいときめきは、少しずつ減っていくだろうが、使い果しはないと思う。ときめきはいつまでも錆びないと信じた。

人間に頓着せずに進む四季

臼井 二英

喜怒哀楽を抱いて私達は生きている。哀しみで凍てつくような冬が胸に棲みついでいて、温い春陽を浴びる四季が巡り人を癒やす。

廢村の無念を残す桑畑

吉村 久仁雄

北陸では、養蚕が盛んであった。初夏には桑の実がなり口をまつ黒にして友と競って食べた。今では桑の木はなく草が繁っている。

待つ人があつてたいやき買つて来る

菅田 かつ子

あんこが詰ったぬくぬくの鯛焼を胸にかかえて帰る妻。「遅くなってごめん」と留守番の夫に鯛焼を渡す。「ゆつくりせよ」とも言う待っていたら立ちは、消えている。

今日は雨カレーと決めて小休止

小林 わこ

「今日はカレー」と決めて、外の雨も気にならず本を読むとする。雨に濡れた「たたいま」をカレーの香りが「お帰り」と迎えてくれる。

アンパンを食べてテンション上げてます

平嶋 美智子

ケーキと紅茶でシヨパンを聞く。でもこれから何かに挑戦しようとする時は、アンパンがテンションを上げてくれる。頑張れよと。

赤ちゃんの泣声嬉し垣根越し

金森 徳三

少子高齢化の行く末が気になる時、赤ちゃんの泣声は何とも嬉しい。子育ては大変だけど頑張つてと、エールを送りたい。

■各地句会だより

もくせい川柳会

藤井則彦

本会は、大阪府の北西部に位置する豊中市中央公民館で開催している句会である。(もくせい)は豊中市の市木 一九八四年(昭和五十九年)に橘高薫風先生のご指導で発足し、初代会長安藤寿美子さん、二代目の田中正坊さん、現・三代目の江見見清さんのもとに、これまで月一回の定例会を途切れることなく続けている。五年ごとに合同句集を刊行しており、再来年には第五集を出す予定である。

定例会

毎月第三月曜日の午後一時から行っており、遠方からを含めていつも三十名近くの方が出席され、終始笑い声の絶えない楽しい雰囲気のもとに進められている。毎回他の句会からゲストをお招きし選者をお願いしているのも、和やかなうちにも適度の緊張感が漂っているのが本会の特色であろう。終了後、近くの喫茶店で有志が集まり、川柳にまつわるのもやま話にふけったり談笑に興じるのも心安

らぐひとときである。また、新年会では盃を交わしゲームを楽しんだりしながら相互の懇親を深めている。会員の中には和紙細工や縫いぐるみ、鉢植えなどの得意な方がおられ、句会の席上皆さんにプレゼントされているのも微笑ましい光景である。



勉強会

句会とは別に、毎月一回(第一月曜日午後一時)有志による勉強会を開催している。司会者が適宜交代して、毎月の没句と秀句を材料に談論風発、忌憚のない意見交換と討議を重ねている。作者名を伏せて行うので自由闊達な研鑽の場になっている。時には「実はそれ私の句なんですよ」と告白しては座が大いに盛り上がる。また、時事問題や家族の話で笑いの渦が巻き起こることしばしばである。公民館まつりに参加

毎年十月に豊中市中央公民館で「公民館まつり」が開催され、日頃そこで実施されている各種のカルチャーや趣味の会などの成果発表が行われている。もくせい会の会員もそれぞれ自分の一句を短冊にしたために会場に展示している。好機とばかり求館者に川柳塔誌を配布したり「川柳しませんか」の小冊子を差し上げて誌友拡大にも努めている。

本年一月以降の各月最優秀句をご紹介します
人生の修羅場くぐった良い笑顔 尚士
言い負けた姿のままで沈む風呂 求芽
父の背の丸さへ家業継ぐと決め 楓楽
明日もまたつがな日と決めて 見清
新緑に渴いたいのち溶けてくる 早人
順風に乘れぬ翼にある迷い 隆
胸中に鬼が棲む日は鍋みがかく 美義

■句集鑑賞

『われも旅ゆく一人なり』

波多野五楽庵著

佐藤 古拙

六月三日、弘前市内のホテルで「川柳塔みちのく発足二十周年記念句会」が催された。その日を記念して川柳塔社前副主幹・波多野五楽庵さんの句集『われも旅ゆく一人なり』が出版された。

五楽庵さんらしい竹まいが、みてとれる句を並べてみたい。

コーヒーの波に溺れる挫折感

みんな捨てみんな拾って孤独なり

母の忌も枯梗の色も暮れなすむ

自転車ギーギーと帰るのか

ほおずきのひたひたひたと遠さかる

句集は七十五句を精選したもので、選句にあたられた八木千代さんの私信も添えられている。

読み終えたとき、若いころ読んだ井伏鱒一の『ささなみ軍記』の感動が甦った。

平家の公達が都落ちする有様を、淡々と記

述した軍記の体裁をとったのが『ささなみ軍記』であるが、その時の感動に似たものが、五楽庵さんの句集から湧いてきたのである。声高でない平坦な表現が、それこそささなみのように迫ってきたのである。

練りあげたしなやかな形容、機知、風刺など既成の川柳の概念には、むしろ程遠い透明な無常観のようなものが、句集の個性になっている。

妻を打つ程に哀しく酔っている

溜息の一つが妻を曇らせる

寝言言う妻よ今夜も不悴せ

「妻」という存在に対しては、ことさら自身を戯画化し余韻をもたせてくれる。

五楽庵さんは生粋の津軽人である。津軽は雪国である。それからぬか、雪に託した心象風景の表現のうまさ、隠喩の精緻さはどうであろうか。

子を産まぬ約束で逢う雪しきり

森中恵美子さんのこの掲句は、さながら長編小説を十七音字に納めきったような、物凄いい句であるが、それとも違う。

拿捕船へ雪は斜めに降り急ぎ

非情な雪をリアルに表現した斎藤大雄氏のそれとも異なる。

死ぬ人を送り続けて来た雪ぞ

その母もそのまた母も雪まみれ

いつの日か雪に抱かれて眠りたし

初雪や浄土はさてもかの如し

このようにあくまでも五楽庵曼陀羅の雪なのである。雪は母性回帰であり、心やさしい阿弥陀の化身なのである。

五楽庵さんの本職は歯科医であるが、法蘭学を修め、長年、青森県警察協力医として活躍され、一度ならず県警本部長から感謝状を受けているが、たびたび非業の最期を遂げた成仏と対面しているはずであり、それからくる死生観が、句作を興行きの深いものに仕上げ、川柳に対する観照をゆるぎないものにしていてと思う。

五楽庵さんの人柄を思わせる静謐な句を紹介してみたい。

そして花火の音が静かになつてゆく

目を閉じて無明の間に耐えている

咳はもう止まりましたか冬椿

冬籠り妻は小さな咳をする

真つ白な紙で折るのは父の墓

句の持つ品格、句品、を感じさせる句集であり、川柳というジャンルの多面性を知る上では、またとない句集でもある。

■句集紹介

『われも旅ゆく一人なり』

波多野五楽庵著

木本朱夏

俳人・三橋^{みつはしなかによ}鷹女は「一句を書くことは一片の鱗の剥脱である。一片の鱗の剥脱は生きてゐることの証だと思ふ。一片づつ一片づつ剥脱して全身赤裸となる日の為に『生きて書け』と心を励ます（原文のまま）」と述べています。

十本の指に火の過去水の過去

コーヒーの波に溺れる挫折感

こむらさきまで情念を捨て切れぬ

鷹女はなおも「失せた鱗の跡はもはや水遠に赤禿の儘である。今ここにその見苦しい傷痕を眺めわが軀を蔽ふ残り少ない鱗の数をかぞへながら独り呟く……」と激しい想念を吐露しています。

癌告知われも旅ゆく一人なり

やむに止まれぬ身の内の、雪の炎に灼かれるように吐きつくした十七音、透明な哀しみ

が雪の花びらのように結晶した二行詩、それが句集「われも旅ゆく一人なり」と申せましようか。

人生の節目を契機に、ご自身の心奥まで曝された句集は、厳しく削って削って、研ぎ澄まされた珠玉の収録作品はわずか七十五句。それとも七十五句も……というべきでしょうか。右の頁は空白のまま、左の頁に作品が三句、という目新しい趣向で仕立てられています。

五楽庵さんによれば「右の頁の白紙は、間、呼吸」ということで、決してかるくはない、深い哀しみに沈んだ作品の暗さを、空白の頁がほっと和ませてくれました。

風花の寂しさに逢う娘の回忌

五楽庵さんは幼い娘さんを亡くされています。無理やり鱗を剥がすようで詳細をお聞きするすべもないのですが、その悲しみにうちひしがれて、十五年間ほど作句から離れていたそうです。

月の砂漠を妻と歌ったことがない

五楽庵さんの第一句集「芸風書院『日本現代川柳叢書第34集』」に収められている作品です。愛娘を亡くした夫婦お互いの傷口を庇い合うような、五楽庵さんの妻に向けるまなざしには、労りとやさしさが溢れています。

環言言う妻よ今夜も不悴せ

冬籠り妻は小さな咳をする
妻病んで枯梗も秋も雨さらし

逆縁の哀しみ、病身の妻、そして我身に降りかかった癌告知。鱗は剥がれ、剥がれて赤裸の傷まみれの人生。父祖代々の地はしんと雪に埋もれ、それでも人は生きねばならず、「生きて書け」と鷹女は言いました、人の世の現実はずつしりと重く、ひりひりと傷みが、哀しみが伝わってきます。

死ぬ人を送り続けて来た雪ぞ

その母もそのまた母も雪まみれ
いつの日か雪に抱かれて眠りたし

咳はもう止まりましたか冬椿

この作品の椿の化身は、五楽庵さんの敬愛される八木千代さんでしょう。体調のすぐれない千代さんが、ご自分の体をだまし、だまし、五楽庵さんに語りかけるように書かれた情感あふれるお手紙が、跋文の代わりに取られているのも、心温まるものでした。

最果ての駅を横切る黒い猫

自転車がギーコギーコと帰るの

花吹雪 輪廻を少しづつ信じ

読み終えて私の胸を去来したのは、若山牧水の歌でした。（けふもまたこのころの鉦をうち鳴らしうち鳴らしつつあくがれて行く）。

追悼 宮川珠笑氏

3月30日没 72歳

法名 仁賢

疲れてるまぶた閉じれば音がする

この句は昭和41年の川柳塔として第一回目路郎賞に準優秀作第2席として選ばれた珠笑氏の作品です。作句は途切れていた時期もありますが、川柳塔誌に投句で参加され、句会にはあまり出られなかつたようです。

今年3月12日、入院された日も、例月通り、5月号に投句をされましたが、それが最後となり30日帰らぬ人となりました。

合同句集並びに最近の川柳塔誌から次の句を選び、人柄を偲ぶと共に、ご冥福をこころよりお祈り申し上げます。

遺句 抄

道問うておいて逆さま走つてる
ケイタイで二階へご飯知らされる
なあ心いちど洗ひにかけようか
介護されながら小柄を喜ばれ
快い目覚め喜劇の幕が開く
降ろされて柔和になつた鬼瓦

古時計やつとゴールのように鳴る
短命の易に逆らい古希祝う

会葬もビデオでお茶を飲みながら
強面の語尾に小心者のかけ
妬いてなどいいますかいなと古稀の妻
三世代私の靴が隅にある

仏飯は自動で炊いた無洗米

ガン取つて七年余命がまだ続く
老いるほど脱皮不足の葉が出る
一日で孫を笑わすネタが切れ
検査つげまだ病名が定まらず
同室の退院送りふて寝する

まだ寿命あるのか主治医笑つてる
予定表通院日から埋めていく
満期まで約款知らぬまま保険
にやにやと生きる私のロスタイム

聞いてない言うたの果ては笑い合う
初恋に逢えば妻より老けている
保険屋が葬儀心配してくれる
メロドラマ老妻快いびき

転倒のたびに歩幅が狭くなり
エンストのように言葉が出てこない
難聴は消えたが内緒にしておこう
言霊はときに涙を従える

悪性でないのか告知されるガン

酒と縁切れと肝臓ガン写真

余命より今日の手術が気にかかり
停年を待ってくれてたガンと生き
悪友の通夜に病院から抜ける
死は前に見えず後ろにしのび寄る

(文責編集部)

川柳單語

川上 三太郎

庭は 同じである

道の盡きたところ 精神一到

からはじまり だけでは

句は 成らぬ

実を虚にしたところ 句の道は

ろから 行くこと

はじめまる いよいよ深ければ

句なんぞ書く われは

時間がない いよいよ

と言う人 孤独なり

よく 〇 孤独地藏花ちりぬ

生きている るを手を受けず

時間がある (川柳雑誌400号特

句の目方は 集 特別寄稿)

さざなみ川柳創立40周年記念川柳大会

日時 10月28日(日) 午前10時開場

会場 名古屋市中企業振興会館(吹上ホール)

名古屋市中千種区吹上二丁目6-13

☆地下鉄桜通線、吹上駅下車5番

出口徒歩5分

会費 二五〇〇円(粗飯・句集・発表誌呈)

各題 2句 締切 11時30分

課題「歳月」名古屋 池田登茂子 共選

「辿る」岐阜 大島 凧子 共選

「仲良し」四日市 菱川 麻子 共選

「しなやか」中日 石田 寿子 共選

岡崎 近藤 智子 共選

桔梗 木野由紀子 共選

事前投句 「一筋」岩倉 山本 八葉 謝選

さざなみ 浅野 滋子 謝選

○事前投句は出席の方のみ、締切10月5日まで

投句先 〒466-0022

名古屋市昭和区塩付通1の47

安田 光子 宛

懇親宴 同館1階 レストラン吹上

会費 三五〇〇円

事前投句と共に申し込み

主催 さざなみ川柳

後援 (社)全日本川柳協会他

川柳マガジン文学賞作品募集

課題「笑」10句(表現自由タイトルつける)

締切 9月15日

選考者 赤井花城・今川乱魚・岩井三窓・大

木俊秀・大野風柳・柏原幻四郎・斎藤大

雄・塩見草映・雫石隆子・竹本瓢太郎・

西来みわ・尾藤三柳・平山繁夫

賞 大賞一名賞状と桶、副賞 句集出版

参加費 3000円

送付・問い合わせ

〒537-0023 大阪市東成区玉津1-9-16

新業館出版内 川柳マガジン文学賞 係り

第17回コスモス祭り川柳大会

日時 10月14日(日) 締切 12時

会場 さつき会館(頓原八神)

兼題(各題2句) 1時20分披露

「動」新家 完司選

「運」松 彬・川本 畔共選

「舌」富田 蘭水・熱田圭詩朗共選

会費 2000円(昼食・彩り、上位に賞呈)

投句締切 9月30日 投句料 1000円

投句先 〒690-3207 島根県飯石郡飯南町頓原三二八七

景山かずこ 宛

主催 東三瓶フラワーバレココスモス祭り実行委員会

共催 とんぼら川柳会

2007

文化祭吹田市民川柳大会

日時 10月28日(日) 11時開場

(多忙者9時から受付)

場所 吹田市文化会館 メインアター3階

(阪急北千里行き吹田駅西口前)

宿題(各題2句) 投句締切 12時15分

「連想吟」井上一筒選

「追う」森田 律子選

「ひと言」森 イク子選

「味」奥田みつ子選

「気まま」三好 聖水選

「罪」片岡 湖風選

会費 一五〇〇円(秀吟賞・参加賞・軽食呈)

アトラクション 投句締切後吹田市四ツ竹おどり

見学 一般市民の方の見学可。

著名川柳作家の作品を展示。

懇親宴 会費三千元(当日申し受け) 希望者

は左記へ申し込み下さい。

申込先 坂本晴美 TEL06-63884-2466

中川隆充 TEL06-68833-0744

主催 吹田市教育委員会 吹田川柳会他

事務局 〒565-0862

吹田市津雲台3-4 A22-704

中川隆充

本社八月旬会

八月七日(火) 午後五時半
アウイーナ大坂

うだるような蒸し暑さの中、87名の参加の下、八月旬会開催。

はじめに枚方市の同人宮川珠笑氏へ、氏のありし日を偲び、黙祷をささげた。

お話は守口市の同人井上桂作氏。

まずは最近、五月に発行されたばかりの、井上桂作川柳句集「時をつかむ」が配られる。内容は新聞のニュース・社説等から成り立っており、それらの時事吟へ、氏の考え方を全句に短い解説がつけて、読み易く読者に配慮されている。

そして今日のお話の本题「現代大衆川柳論」へと移る。桂作氏の作ったパンフレットは七つの標題から出来ており、それぞれ斎藤大雄氏の言葉・考え・意見・理想が生きている。情念とは、情念の句とは、また川柳界が今求めているものは、川柳の大衆化・その過程そして数百にも及ぶ川柳のテーマが「属性川柳」なるものに終わらせぬよう、指導者達への熱い呼びかけも添えられている。

「これからは寝転んで読める川柳論を目指し、また書かねばならないと思っている。」と述べている斎藤大雄氏の言葉を結びとし、興味の尽きぬ話は終わった。(扶美代記)

初出席は羽曳野市の安芸田泰子さん。

月間賞は堺市の柿花和夫氏に輝く。

(司会)美籠・昭(脇取り)恵子・(山)代

(受付)ふりこ・見清(書記)義

席題 「甘い」 高田美代子選

荊のある甘い香りの花が好き
惜敗は僕の甘さにあつたろう
甘いなどと思う男の鼻の下
負けました脇の甘さを忘れてた
ご機嫌で脇の甘さのポロが出る
夏の雲ショートケーキに見えてくる
苦も楽も上手に生きる金平糖
ノブカバ新橋さんとすぐわかる
時効まで少し控える甘い物
甘いのはおまえあんたで子は育ち
叩かれた西瓜甘いと言うている
野心家のふるまい酒の甘いこと
人間の甘さを猫になめられる
おふくろが扇いでくれた甘い風
口当り甘いお酒にだまされる
長旅を終えて番茶と甘い菓子
甘い実には落とし穴などない小鳥
封筒の中には飴が入れてある

正 旦 吉
朝子 弘風 哲男
千里 義
大輪 ばつは
恵子 子
和夫 子
集一 子
淳司 子
藤泰子 子
篤子 子
求芽 子
希久子 子

喜寿というのに甘えてくれる人が居る
甘い脇つかれて立場逆になり
甘い言葉すぐ付けあがる影法師
還暦になって甘さの味を知る
甘い汁一回吸うと癖になる
電子音の街で蜜豆パフェ
禁酒禁煙マンガブリン党になる
甘党の宴会すると呼びに来る
甘辛を使い分けてる深い皺
毒古家妻には甘い人らしい
こつちの水は甘いとアメリカが誘う
いちじくの実は甘言を聞き飽きる
甘い水吸った蜜は光らない
チョコレート貰った人に付いて行く
住
ラブラブがそのまま続き古稀と喜寿
うちの子に限ってなど甘かつた
甘い母ときに筋一本とおす
甘やかしています首輪で縛りつけ
赤ちゃんの周囲は甘い甘い風
人
ほこほこと甘い言葉を聞いている
地
土下座したら許してくれるはずだった
天
お言葉に甘える癖が直らない
軸
氷あずきを食べる虫歯をよろこばす

天笑 美智子 たもつ 正 善純 雅文 哲子 利昭 光久 一步 敏 扶美代 和夫 大輪 天笑 いわゑ 義子 保州 瑠美子 かりん 保州 義

兼題 「狭い」 堀 正和選

お客さまエゴノミー席ご無理かと 時雄
 狭い路地みんなに知れた痴話げんか 時雄
 幅員の狭い町道舗装せず 登
 血管が狭く採血ままならず きよし
 親方も肩身が狭いご乱行 いさお
 狭い国でも大國並の防衛費 善純
 日本は狭い狭いと大リーグ 修
 J R そんなにとばすな狭軌だろ 求芽
 職探し豊かな国の狭き門 正雄
 狭き門通ってニートとは悲し 光久
 狭量なのかな犠牲パントが出来ぬほく 幸雀
 咄家は狭い高座を広く見せ 昭
 隠しても狭い世界ですぐバレル 章久
 ビルディング都会の天を狭くする いわゑ
 産道をくぐれば父母の広い海 欣子
 了見が狭いと笑う紙コップ 義
 六畳ひと間狭さ知らずの新世帯 ただよし
 生と死の狭間に生きたるホームレス 愛論
 年金の枠にはめられて暮らし 玄也
 ふたりいて狭いお部屋で内緒ごと 瑠美子
 露地の道昭和の風がふいている 恵子
 京の街狭い路地からチントンシャン 瑠美子
 新しい命産道抜けて来る 朝子
 億ションに居ても度量の狭い人 則彦
 了見の狭さを悟る法話聞く 美籠
 寝たきりの父には狭い空だった (久) 千代

狭いところに割り込んだ飲み仲間 天笑
 頑強な身体で閉所恐怖症 玄也
 境界を引いて地球を狭くする 扶美代
 狭いなど思わなかつた大家族 たもつ
 少年の視野に地球は狭すぎる 楓 楽
 もう一人立つてくれたら座れます 麗
 佳
 避難所は狭いが帰る家がない 保州
 間口の狭い店が繁盛しています (志) 千代
 外人に挟まれてる機内食 耕治
 狭いけどワイワイ友が寄る我家 五月
 家族寄る狭い茶の間にある温み 庸佑
 人
 札東で叩けば開く狭い門 鐘造
 産道をくぐつてからも狭き門 和夫
 天
 狭いけど笑い絶えない窓あかり 朝子
 軸
 おばあちゃんが割り込んでくる狭い隙 朝子
 兼題 「枠」 藤田 泰子選
 年金の枠では描けぬ虹の橋 好
 別枠の大金残しては死ねん 時雄
 凡人の枠で仕事も恋もする 美義
 枠があるからはみ出してみたくなる 美代子
 四角い西瓜お前も枠にはめられて 保州
 黒枠の中でおしゃべりしてる過去 千恵子

枠外で敗者復活狙ってる 求芽
 枠組に入ってますか高齢者 富美子
 枠組はどうあれ俺は俺の道 弘風
 伸びる芽を枠にはめ込むエゴイズム 正雄
 別枠という慰めを知っている 扶美代
 枠外に大事な事が書いてある 昌紀
 法則の枠でうごめく人の群 (安) 泰子
 枠外でぶつ切り切れたコンピュター 愛論
 枠をはみ出てた息子も親になり 天笑
 はみ出した夫所詮は枠の中 舞夢
 枠のない世界でいのち洗う旅 弥生
 好景氣わが家は枠の外らしい 一步
 自分史に自己陶醉の枠一つ 柳弘
 面白い人がいっぱい枠の外 昌紀
 枠に入り自分らしさが消えてくる 美籠
 すぐ枠をはみ出す少年の答 希久子
 枠はずしストレス発散させている シマ子
 年金の枠で遊べるありがたさ 朋月
 原発に安全枠はない地震 あやめ
 常識の枠を超えてきた税金 善純
 枠を出て無知な自分に気付かされ 三喜夫
 国民の事などいつも枠の外 美籠
 枠とれてからの余生が面白い 昭
 枠外の余生の風に乗ってみる 希久子
 しがらみの枠で泣いたり笑ったり 靖鬼
 奔放に育てて日本を飛出した 佳
 枠の中やつぱり僕は死んでいる ダン吉

十七文字の枠に広がる大宇宙
年金の枠の中にも青い鳥

楓 楽
千代

四百字詰めに今夜もうなされる
制服がみな金太郎飴にする

保州
大輪

サラブレッド枠越え山野走りたい
地

哲子

ニュートンの法則からは逃げられぬ
天

ただし

まっすぐに歩くと枠の外に出る
軸

義

土足では踏み込ませない花の枠

兼題 「チャンス」 川上 大輪選

僕を見てチャンスが回れ右をする
生ゴミの日にはカラスも忙しい

雅好

出世するチャンス汚職と紙一重
チャンス到来河童に待ったかける鮫

雅文

カレーライス好きな男とチャンス待つ
あかんたれスベアキーまであげたのに

柳伸

縋りつく薬一本にあるチャンス
宝くじ全部チャンスがついている

幸雀

節くれた指は魚信をのがさない
大ピンチ今こそ男上げる場だ

扶美代

落選の議員解散待っている
チャンスには強い男の太い首

天笑

愛告げるチャンスを開けた雨やどり
正直を歩けばきつとくるチャンス

和夫

チャンスなど何処にも書いてないチャンス

一歩

まだチャンスあると髪の毛染めてみる
叱られたこともチャンスにしてしまおう

正雄

雑巾のラストチャンス奪わない
幸不幸背中合わせにあるチャンス

美籠

どん底で神が伸した手を掴む
再婚のチャンス妻も狙ってる

義子

神さまがチャンス預かる言うたまま
鉛筆の倒れた方にあるチャンス

修

条件の揃うチャンスが恐ろしい
逆境もチャンスに変える風車

敏

待ってはだんだん歳をとるチャンス
ヒット曲一つ一生歌手である

希久子

鍵穴を抜けてチャンスが逃げてゆく
佳

利昭

チャンスだけくれるが何もしてくれぬ
清水坂の七味にチャンスしはせて

ばっは

絶対のチャンスにくしゃみ止まらない
好きな人チャンスに何もしてくれぬ

恵子

チャンスから転がり落ちただんご虫
地

五月

何度かのチャンス僕にもありました
天

求芽

折角のチャンスに傘が開かない
天

ダン吉

回数か

求芽

折角のチャンスに傘が開かない

俣子

回転寿司の皿にチャンスが乗ってくる

兼題 「止まる」 塩満 敏選

とび出した女は急に止められない
停電がオール電化を黙らせる

美義

心臓が止まると生きていられない
川柳は老化を止める薬です

雅明

思考回路止まったままの熱帯夜
叱られて心に止まるあつたかさ

螢

しりとりが止まりスヤスヤ児の寝息
引つ込みがつかんとなたか止めてくれ

いさお

止まらずに走れと影が後を押す
停止線守って夫婦仲がよし

楓 楽

思考回路止まってしまふほど暑い
スカイブルー時間を止める原爆忌

かりん

酒タバコ止めてこの先笑えぬ日
炎天に鎮魂の鐘鳴り止まず

美智子

野次馬の足も止まった五山の火
時々止まり景色を眺めよう

集一

心臓が止まったほどの出合いです
立ち止まり見上げる空は広がった

千恵子

不意打ちの接吻でした息止まる
坊っちゃん暴走止めた民の声

公誠

僕だけが君の涙を止められる
蟬の声止んで孫たちわつと来る

舞夢

ヒロシマの時計は今も止まっている
止まったら喰われてしまう雑魚の群れ

朝子

この指に止まった妻よありがとう

東吉

地酒うまい里に止まる河童A
駐輪が行く手を阻む車椅子
支持率の地滑り誰も止められぬ
止めたつて駄目出来ちゃった婚をする
あせらずに一旦停止する老後
止まり木に鷹しつかりと目線据え
止まらずに上ると決めたこの石段
齋場の時計よしばし止まらぬか

不自然な絆創膏が呼ぶ波紋
ヒロシマの波紋世界へ渦を巻く
しょうがない波紋おこして辞めました
品格の波紋に揺れている国技
中越に広がる原発の波紋
おしゃべりにもらしたことは波紋呼ぶ
さりげないひとと言波紋納まらず
神さまの造形だろろう砂の紋
弁解をすればするほど波紋の輪
小さい嘘波紋でかくてうろたえる
欄外のメモが大きな波紋呼ぶ
柳人に静かな波紋彬の碑

則彦 昌紀
集一 千恵子
一步 ダン吉
美籠 修
善純 昌紀
喜子 紀
庸佑 あやめ
好 美代子
公誠 美代子
一風 アキ
光久

毒舌が止まる時には仏さま
九条がやっぱり止めていた戦
よく喋る口だキッスをしてやろう
自動車のラインも止めた大地震
鈍感な耳に止まらぬ民の声

正直に言った波紋はデカくなる
スパイスが効きすぎ波紋まだ続く
石投げて小さな波紋見とどける
ときめきが欲しくて波を立ててみる
家中に波紋が及ぶ妻の風邪
波紋だけ投げて素知らぬ顔を決め
臨終のひとつと波紋また広げ
内緒ばなし電波のごとく広まった
新入りがえらい美人という波紋
一票の波紋が地図を塗り替える
デカ過ぎた波紋に小石狼狽える
まだ若いのお隣に救急車
八月の波紋は消えることがない
ふざけから波紋広げていくいじめ
不用意なひと言何処までも波紋

正 美代子
三喜夫 美代子
美義 美代子
恵子 美代子
正 美代子
楓楽 美代子
靖鬼 美代子
正和 美代子
扶美代 美代子
耕治 美代子
富美子 美代子
幸雀 美代子
五月 美代子
保州 美代子
俣子 美代子
美代子 美代子

政治不信もうどうにも止まらない
美しい国へ止められない使命
故郷の時計が止まる母が近く
この指に止まれと指を出してみる

柳人に静かな波紋彬の碑
正直に言った波紋はデカくなる
スパイスが効きすぎ波紋まだ続く
石投げて小さな波紋見とどける
ときめきが欲しくて波を立ててみる
家中に波紋が及ぶ妻の風邪
波紋だけ投げて素知らぬ顔を決め
臨終のひとつと波紋また広げ
内緒ばなし電波のごとく広まった
新入りがえらい美人という波紋
一票の波紋が地図を塗り替える
デカ過ぎた波紋に小石狼狽える
まだ若いのお隣に救急車
八月の波紋は消えることがない
ふざけから波紋広げていくいじめ
不用意なひと言何処までも波紋

天 花束を贈り波紋を楽しまん
ひとつ告発したらばろぼろ拡がった
柳花和夫

兼題 「波紋」 河内 天笑選
ベテランの故障で二重元氣出る
角界に波紋扱けたご乱行
大臣の一言世論くつがえる
大リーグ一石投げたのは野茂た

兼題 「波紋」 河内 天笑選
ベテランの故障で二重元氣出る
角界に波紋扱けたご乱行
大臣の一言世論くつがえる
大リーグ一石投げたのは野茂た

兼題 「波紋」 河内 天笑選
ベテランの故障で二重元氣出る
角界に波紋扱けたご乱行
大臣の一言世論くつがえる
大リーグ一石投げたのは野茂た

兼題 「波紋」 河内 天笑選
ベテランの故障で二重元氣出る
角界に波紋扱けたご乱行
大臣の一言世論くつがえる
大リーグ一石投げたのは野茂た

兼題 「波紋」 河内 天笑選
ベテランの故障で二重元氣出る
角界に波紋扱けたご乱行
大臣の一言世論くつがえる
大リーグ一石投げたのは野茂た

兼題 「波紋」 河内 天笑選
ベテランの故障で二重元氣出る
角界に波紋扱けたご乱行
大臣の一言世論くつがえる
大リーグ一石投げたのは野茂た

第一〇二回 大阪川柳の会
日時 十月一日(月) 17時開場
会場 大阪市北区梅田第2ビル5階
生涯学習センター第一研修室
宿題 各題2句・18時出句締切・席題なし
▽肉・村上水筆選 ▽大丈夫ですか(詠み込
み不可) 菱木誠選 ▽撫でる・西出楓楽選
▽心・磯野いさむ選
会費 千円 欠席投句(会員のみ) 9月29日
〒532-005 大阪市淀川区新北野1-3-141 706
本 田 智 彦 宛

むせぶか

毎月24日締切・30句以内厳守

編集部

和歌山三幸川柳会

喜田 准一 報

赤シャツを買った理由は紅隠し
 広告を背負ったようなシャツの文字
 明日のシャツ選んで明日の風を読む
 縞のシャツ陽気にさせて風に乗る
 散歩するポチにババより高いシャツ
 流行がはみ出ししているシャツの裾
 春が来たババシャツ脱いでキャミソール
 落ちていたシャツを洗うと喋り出す
 だぼシャツの父の昭和が遠ざかる
 採決を取るには早いタイミンク
 船出するタイミンクずれまだニート
 さすが妻濁いた頃に出る麦茶
 殻を破る刻をはかっている卵
 タイミンクよく時代の波に乗る翼
 雲ゆきで切り出す母のタイミンク
 タイミンクよく進めます千の風
 桃色に染まった恋の日も遠く
 もう私いくら染めてもセピア色

義 美 枝 子
 イ セ
 起 世 子
 孝 子
 碧
 桂 香
 宏 夫
 次 根
 准 一
 徑 子
 公 子
 朱 夏
 み ね
 菜 摘
 瑛 子
 一 歩
 昇

白髪染め八十になり止めました
 染められて染めて相性よしとする
 しゃぼん玉幼な心に夢無限
 カンパミチコの彩に染まったことがある
 白無垢の白の深さも知らぬまま
 世界観少し変わったバスポート
 ハニカミ王子を世界も僕も追っかける
 ばら色の世界へきみと会ってから
 てにをはでころりと変る詩の世界
 子には子の世界スーパは届かない
 世界中どこでも通じます笑顔
 タイミンク見てから渡すタイミンク

三面鏡一番若い今日の顔
 素通りの出来ぬお店でくせになり
 吹き出してワツと抜がる笑顔の輪
 かくれんぼあじさいの中見つからぬ
 そのくせがあなたらしきを生んでいる
 お互いの癖は知っている日々平和
 凌霄に雷雨ひととき容赦なし
 山ざくら今は自若としてみどり
 在宅介護幸せだった亡友の顔

ロース川柳会 山崎 君子 報
 みつ子
 藍
 哲 子
 トミエ
 いわゑ
 武庫坊
 年 代
 義 子
 君 子

川柳塔おっぱい吟社 木村あきら 報
 じっくりと者語めています明日の夢
 もう一度お茶入れ替える聞き上手
 綺麗事はかり言ってる時でない
 ひかり
 八重子
 はつ恵

蛇口から溢れる水にありがとう
 多数決正論隣でヤセ細り
 穏やかな水面乱す人の口
 ハードルを下げて気持ちに楽にする
 西瓜玉起こせば鴉屋根で待つ
 もう一雨欲しい蛇口も遠慮勝ち
 歳月が癒してくれた臍の傷
 生きている証しに今日も雨戸開け
 何もない健やかあれば吉とする

松露川柳会 小西 雄々 報
 増税が重石のようにのしかかる
 産声が響く命の重さ告げ
 期待してがっかりさせるタイガース
 見るからに貫録つけて金バツジ
 重い空気も明るい声で軽くなる
 あれこれと役がまわって気が重い
 重たいが孫可愛さに瘦せ我慢
 責任の重荷おろしてはっとする
 里帰り母から重い荷をもらおう
 再検へ疑心暗鬼で気が重い
 ボケットの重さに耐えている拳
 役柄が重くりタイイヤしたくなり
 一族の重い絆を絶やされぬ

東大阪市川柳同好会 森下 愛論 報
 あきら
 賢
 よしみ
 いさむ
 弘
 放 任
 かおり
 貞 月
 寿々女
 興
 雅 子
 美 明
 ち え
 敦 子
 弘 子
 公美枝
 信 雄
 鈴 枝
 和 代
 智恵子
 静 江
 雄 々

探しておこう極楽へ参る道
 味を探すいま板前の舌の先
 和 子
 雅 文

ささやきの小徑で陽炎を探す
午前様妻の笑顔に裁かれる
尻に敷く妻という名の独裁者
飽食の時代人間裁かれる
弟のお下がりが兄が着るサイズ
特大の母のおっぱいありがとう
目標は九号今日も万歩計
産声がみな喜びの顔にする
ささやかな喜びだけで無料パス
喜びの心が咲いている笑顔
美しい国で弱者があえいでる
弱点を握られ妻の後をゆく
少しだけ弱音を吐いた日の懺悔

岸和田川柳会

土橋

房枝報

恋の火を燃やすカローリ 枯れて老い
甘い飴なめたあとには鞭が待つ
下駄箱の隅で年取る蛇の目傘
五月雨の京都を歩く蛇の目傘
番傘にコマージュしたその昔
兄弟のおしゃべり弾む母傘寿
判決の結果待つてる傘の波
詰め物を飴に取られてまた歯医者
船細工見詰め子等の夢無限
わた飴の郷愁誘うちぎれ雲
明日があるだからチャレンジ忘れない
難問のクイズへ挑む鼻メガネ
うようよとおばさんが行く早慶戦

柳弘

緑

風子

賢子

克己

ばつは

美子

太郎

あや子

秀夫

朝子

湖風

愛論

笑司

連休の人出うようよ潮十符
観覧車下界うようよ蟻の列
この夏も火垂の墓に涙する
当落は無視で出てくる選挙好き
カローリ表眺めてレシビ迷つてる
旅宿でカローリ気にせず舌鼓
試着室カローリ過多が拒絶する
カローリを制限する国飢えた国
万歩計消費カローリ計るだけ
猫だけはカローリ表があるらしい
カローリオーバー公園一周多くなる
カローリを補うサブリ高くつき

竹原川柳会

時広

一路報

しっぽだけ掴んだことがある闇夜
地を掴み臥竜の松の仰ぐ天
掌の中に掴んだ風がよく笑う
幸せを掴む両手は祈りの掌
鵬の白い翼にがある気迫
新しい翼を待つている産着
宇宙遊泳翼はいらぬ宙返り
父の翼思えば涙もろくなる
お休みを下さい翼洗います
片方の翼で助走繰り返す
柳葉翼たたみ猷体の道ゆく
姑さんが大きくしてくれた翼
ハモニカを吹く少年にある翼
物忘れ今日一日が言われない

幸子

ふみよ

蛙城

酔粹

けい子

俊昭

弘子

寿海

ダン吉

房枝

東吉

規代

佳句地十選 (8月号から)
光井玲子
相合傘の想い出ふつと青春に
手ころだと思ふ相手もそうらしい
近道はあえて書かない父の地図
取り敢えず手をあげてから考える
病院に行くのになぜかおしやれる
ブライトがどつかとあぐらかいている
屋の月昨夜の夢はみんな消え
お荷物にならないように生きたいな
余生いま鈍感力を光らせる
人形に泣かされて出る文案座

瑞枝

椒子

庸佑

利昭

ゆき子

はるお

観子

武庫坊

楓楽

螢柳

父の日に亡父と対話するお酒
チグハグな気で飲んでいる下戸の酒
深海魚遠かな夢を見つづける
聞こえますか子守歌口遊む
女から母へ強さも倍になる
念仏に支えられている生きている
古里の生家支える重い責
支え役昔も今も妻がもち
私の矜持に伸びる支柱根
八起き目を支えた妻の土性骨
ラストページに支えてくれた礼を書く

節夫

太虚

比呂子

史子

千枝

房子

半徳

笹舟

あゆみ

敬子

一路

川柳塔唐津

仁部

四郎報

實

阿呆らしい満点目指す窮屈さ
 仲よしに見える女の輪の笑い
 二次会の徳利ロマンが溢れ出る
 都合よく死んでくれたのはずはない
 そんな差があるはずがない私の子
 接待をしないと仕事貰えない
 老いの身に火種を抱いて待つチャンス

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

勝 視
 水 笑
 蜂 朗
 四 郎
 輝 夫
 高 明
 晴 翠
 はるみ
 恵美子
 好 栄
 かつ子
 ちよえ
 伸 子
 聖 子
 博 利
 清 泉

川柳クラブわたの花

山本 宏至報

孝 子
 和 子
 ますみ
 ミツ子
 君 江
 耀 一
 民
 知佐子

糠床を提げてばあちゃん同居する
 美人でもへそシルツク目を反らす
 長生きを趣味に笑って清く生き
 涙雨絆を深くきつくる
 三十三度早くも真夏北の国
 自治体は借金作り世界一
 世界地図を端からかじる温暖化
 歩行者が威張って見える仮免許
 バランスを絶妙にとる書家の文字
 点検をするのはいつも事故の後
 黒い雨美わし国に降りつづく
 また理屈言うてはるワとほつとかれ
 大丈夫母の一押し背が温い
 コンチキチン祭り一色京の町
 俄か雨二人の仲を深くする
 天下り悪い奴ほどよく太る
 打ち明けて喉の小骨がすつと取れ
 国盗りで古今東西揺れる星
 会話中記憶の扉開けゴマ
 笑いこけ時を忘れたい雨の中
 煩惱の減って活き活き顔の艶

川柳ささやま

遠山 可住報

介護サービス安心できぬ保険かけ
 自画像はすこし若さもおまけして
 天皇に最敬礼せず旗を振る
 負うた子に今は押される車椅子
 デイサービスおしゃれの日です少し紅

美代子
 莊 治
 博 子
 俊 子
 たえこ
 正 春
 浩 三
 幸 枝
 晴 美
 宏
 美はる
 欣 子
 ふりこ
 義 明
 いっふみ
 宏 至
 はじむ
 妙 子
 克 美
 愛 子
 一 風

すつきりとお札が言えた日の笑顔
 サービスに合撃をしていい笑顔
 サービスも過剰になると嫌になる
 お札だと高価な品になやむ日々
 生かされて生きる毎日札を言う
 弥陀の手へサービスは無い百八段
 信仰の違いが流す血の歴史
 肩書きへ金一封が臭おてくる

高槻川柳サークル卯の花 瀧本きよし報

不協和音ばかりで何も決まらない
 決めかねる心見透かすティーカップ
 相談の素振りしながら妻が決め
 若い日の愛は熟れ過ぎないように
 お若いと褒められアテランスが取れず
 米寿とはまだ若いと言う白寿
 若い文に心豊かに水を遣う
 身の上の視野で呼吸を整える
 ライバルがいつでも視野の先にいる
 人はみな神の視野から逃げられぬ
 視野の隅に子を置いている立ち話
 年金の出る日に孫からメール来る
 金も要る話の輪には入らない
 初対面なのに合鍵もらつてる
 失敗の度お釈迦さま使います
 割り勘でいつも手元に残る金
 低い雲せめて午前には泣かないで
 雲行きを読んで如才のない男

靖 子
 多美子
 照 代
 かほる
 つや子
 富 美
 哲 男
 可 住
 泰 雄
 美 籠
 尚 士
 典 子
 昭
 かずお
 求 芽
 美 義
 活 恵
 宏 章
 一 央
 重 人
 昭 二
 幸 雀
 孝 一
 隆 充
 照 子
 庸 佑

口止めをされて淋しく見てた雲
ちぎれ雲ざわめくものをまだ持つて
この上は夫があればと日日思う
ごめんねの一言やっとけじめつく
日めくりの今日一日にある祈り
鯨だめ牛は買ってと星条旗
お隣の錦鯉眺ね留守三日
血圧の高さを競う同窓会
毒舌でいいいじちゃんにようなれず
美しい国ニッポンの溝を掃く
してはったようにしてます墓参り
点滴の白い時間にある虚脱

西宮北口川柳会

黒田 能子報

一粒の種が未来の話する
この星を捨てて行き場の無いヒト科
成功の美酒は初心を忘れさせ
どうでもいいことは不思議に忘れない
忘れよう出会いは神のいたずらか
症状がないと忘れてる薬
大麥だパンの予約を忘れてた
曆にも書いた予定また忘れ
落雷を巧みにかわすやじろ兵衛
落しそな予感して居て落して来
苦勞人だ落しどころを知っている
掃宅して素早く落す厚化粧
落してもあれですんだとなくさめる
お茶碗を落して医者に診てもらう

我儘も一粒種と甘やかす
小粒だが結構くらくつく男
粒よりのいちごを食べてゴロ寝する
つぶ粒の南部鉄瓶うまいお茶
男手のミルクで一粒種そだつ
一粒の重みを知っている大地
クラス会途切れた過去をつなぐ酒
神様を勝手なとき思い出し
身を焦がし光通信するホタル
懐にレモン一つを入れておく
いろいろな過去を秘めてる男の背
拉致家族今年も会えぬ天の川
今年また西瓜の種が芽ぶく庭
アバウトに生きてるさして支障なし
粒あんかと必らず聞いた母だった
期待した数だけ挫折あるだろう

川柳塔鹿野ひか月 土橋

グリーン車で言葉が少し固くなる
青春の楽譜砂丘に埋めてある
会者定離星に願ひをこめてみる
精いっぱいスタターダストで終ろうと
プライドは捨てて言いたい事は言う
着飾った言葉につまり舌を噛む
花道を上手に飾る誉めことは
それぞれに思い出多く難飾る
着飾れば今日はどちらと尋ねられ
年金の半分ほどは貯金する

すわ地震枕抱えて飛んで出る
ゆつくりと枕を高くして眠る
ふるさとに帰り仏間の枕抱く
ひざ枕どうしてこんな気持ちいい
夫婦喧嘩ああ手枕の空しさよ
丁度よい枕の高さよく眠り
蒸し暑い今夜は陶器枕出す
枕から爽やかな夢みて目覚め
ストレスの涙枕は知っている
ストローも一役かっている介護
ストローで母と作った蜜籠
北枕菩薩の顔になってきた
いつの間にか枕を交わす仲間となり
酔い加減座ぶとん枕で夢うつつ
膝枕胸の鼓動も元気づく
札束が枕の下に敷いてある
富士山に登って古稀の高枕
手枕をして考えるひとなり
風さやか昼寝の母へ蕎麦枕
枕にも季節のけじめ必要だ

尼崎いくしま川柳会

春城武庫坊報

初胡瓜曲がっていたがうまかった
無農薬曲がる胡瓜に母の味
曲らずに成人式を無事迎え
もう山を越えたと笑顔見せた医師
あいさつに汗も飛び交う山歩き
再びは適わぬ登山靴仕舞う

萬の 乃りこ 高栄 義一 武史 五月 きよし 勲弘 石舟 公子 葉子 郁夫
いわゑ 哲子 折杭 求芽 悦子 朋月 歳子 昭三 宏一 比る 光志 春美
江美 萬的 房子 奮水 晴美 曙蝶 哲男 耕治 正和 順子 孝一 五月 利子 富喜子 嘉代子
幸枝 螢報 陸子 ひろこ 和子 節子 八重 武子 かおる きみ子
はるお かつみ 小生 稔 重忠 久枝 あづま 富久江 房子 永子 みどり 菊野 鬼一 実満 弘子 石花菜 螢 くに子 孔美子 年代

今日も雨一人しらずかに友思う
秘めことを見ぬかれそうなレントゲン
本場の事を言うのに要る勇氣

山頂が見えて歩幅を整える

鬚ものは平成の子に見放され

犬散歩役になつてやら袋さげ

平凡が至福と思つていま切に

足長の女の横に立つ引け目

秘伝と聞き欲の皮張るこの世俥

はたる川柳同好会

水野 黒免報

参院選握手の季節やつてきた

先のない総理は急ぎ法作る

宴会の締めは一本とあ二次会

目一杯ゆるめて握る赤い糸

不屈きな大臣ばかりで悩ましい

戦後史に覚えきれない総理の名

握手して票読みもする選挙戦

総理より宇宙旅行士子等の夢

生き様に拍手をしたいお葬式

もみじの手柏手を打つ三歳児

握り飯硬さと塩にこつが要る

若しかして天下を握る可愛い手

握つたら放さぬ人に誘われる

大トコが時価の顔する握り寿司

大胆な野次へ拍手で加勢する

にぎり寿司味より先に皿かぞえ

身辺を整理しようとし重い腰

うぶだった白い手そつと握つた日

尼崎尾浜川柳会

山田 耕治報

凝り性の癖はどこでも顔を出す

大吉とピリケンさんを持ち歩く

朗読のさわりの部分熱を入れ

逢いたいのが小さなこだわりある惱

ジャム作りぐつぐつ煮える鍋の歌

こだわりを捨てたら肩が軽くなり

うまいこと言い分け出来た気でいてる

熱弁に乗せられ無駄を買わされる

こだわりとハテナが生んだ新製品

舞台から熱気つたわる藤十郎

ままならず豪雨は知らぬ空いたダム

暗い世に心温もるエピソード

それぞれの想いをたたむ衣裳箱

熱くなる男を冷す請求書

いいコロンだ宿の廊下のすれ違い

買って帰る苺ケーキをなぜ嫌う

過去はみな影の形で連れてゆく

古傷の一つ二つは傷じゃない

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

飽食に馴れて心が飢えてくる

慣れなれて夫に暴言吐いてくる

沈黙に慣れて静かに餅を焼く

馴れるまで時間のかかる無器用さ

馴れて来た介護へ手抜き考える

自分史へ苦勞の章はカットする

都合よくカットされてるインタビュ

あと僅か並び疲れてカットされ

高いビル月半分に切っている

不都合をどんどんカットする余生

川柳塔わかやま吟社

牛尾 緑良報

人間を愛し心の灰汁をぬく

選り好みしすぎた蝶の転び癖

少年の今日の雪崩を受け止める

モザイクを埋めて私の道選ぶ

選ばれて欲しいあなたに選ばれぬ

私が選んだ人を見てほしい

戦争の好きな男を選ばない

選ぶのはわたし歌うのはあなた

国選の弁護士ドラマいつも勝つ

キヤッチでできそうな蛍を目で送る

真相キヤッチ記者の手帖が忙しい

迷わせるキヤッチフリーズ多種多様

キヤッチした父母の背中にある教え

君の愛キヤッチでできずに日が暮れる

情報をつかむアンテナ高くして

平凡に生きて得るもの失くすもの

切り札を握つた妻は慌てない

平凡と言う非凡さを忘れる

がっぽりと儲け平気な顔でいる

さらけ出す詩にわたしの灰汁が浮く

わたしらしく生きた灰汁を秘めている

弘直

烈

慶子

香住

加津子

寿子

登美代

あきこ

精子

泰女

保州

英子

三男

よしこ

小雪

裕美

和子

和子

順子

三喜夫

怜

紀子

東吉

豊太

徑子

富美子

川柳塔なら

坊農 柳弘報

童心の母を抱きよせ眠らせる
抱いてみて親を自覚の若いパパ
勇氣出し告白してる竹トンボ
梅雨寒もハニカミ王子熱狂し
梅雨空に満艦飾の下で寝る
降りつつくんと明るい傘をさし
梅雨空を睨んで傘は置いて出る
梅雨よりも長い女の立ち話
三脚にカメラを乗せて待つ我慢
雨脚の厳しさ君はきつと来る
恋終わる針千本の梅雨になる
梅雨明けて疎遠を詫びる手紙書く
脚光を浴びる夢あり馬の足
三食昼寝脚本のない主婦の午後
レンジ袋はもういらぬという勇氣
勇氣あるペンが告白する腐敗
いざという時の勇氣を持つ乳房
梅雨空を仰いでひとつ義理を欠く
六月の雨に女は愚を溜める
脚光を浴びて花束もらう定年日
写真抱く母は戦を嫌い抜く
わが恋もあじさい色に染まる梅雨
雨の匂いと歩く六月の土踏まず
ブライドはもう捨てました馬の脚
失脚を勇退などと言つてはる
水無月の雨も女もいとおしい

美はる 東吉 カズ子 弘風 千梢 利昭 茂雄 春雄 真理子 六助 良一 隆盛 理恵 信子 和夫 完次 富子 國治 一風 比呂志 朝子 秋雄 洋子 ダン吉 のりこ

託が状は梅雨のはじまる前に書く
この修羅を越えたら抱いてお母さん
脚本のない人生が面白い
本当の勇氣鱗剥いでから
弥生 博一 孝子 道子

川柳茶ばしら

板山まみ子報

サミットもトップ記事には程遠い
わきまえているつもりでも腹を立て
追い風を素通りさせる能天気
七夕のような逢瀬に薄化粧
天の川地上も異変続きです
不満のないように分ける難しさ
老害の陰口話聞かぬ耳
まみ子

川柳ふうもん吟社

夏目 一粹報

社保庁のまんぢやら神よ許すのか
大穴をねらつて鼻の差で負けた
あじさいがコスト無縁で咲いてます
罪の数隠しているが若作り
まんぢやらな支出けつして許さぬぞ
コストには含まれてない笑顔です
地図のない近道だった戻りたつた
まんぢやらな男だが何故か憎めない
千の風仏はどこに居りますか
若作りの妻を夫は心配す
借金遺産に家族がつくりだ
顔だけは若作りして足しげれ
まんぢやらもジョークのつもり根は真面目
洋々 蟹郎 善夫 一瑞 圭一郎 無限 美恵子 昌鼓 あしび 雅女 穀 穂 子

南大阪川柳会

吉川 寿美報

頑固な鱗落とす葉がみつからぬ
コストより健康でいる動いている
コスト割れしても匠の意地通す
まんぢやらを描いたようなピカソの絵
若作りしても変わらぬ影ぼうし
まんぢやらに生きた証のつけが来た
まんぢやらな方がいい時だつてある
商戦に原価切つての叩き売り
年金のまんぢやらだけは許せない
ああフォークがつくり落ちて空を切る
好物がコストアップでがっかりだ
じみ派手に着こなす老女の若作り
青虫がつくりさせせる夏野菜
がつくりだスカイラインは雲の中
これしきの事でガツクリするものが
がつくりと落としたり肩に舞う馬券
三角形のてつべんにいる不安
中国製のやせる葉を飲んでます
六億円当つたくじを持ち歩く
カンニング友の視線がつきやがる
閉ざされた襖の奥に気配あり
毎日がいイベントだろっや蟻の列
満天の星のイベント夢しい
イベントに出合いの夢を膨らます
半額の本に結構美味いもの
イベントの花火に恋も咲きました
茂登子 菖子 春名 かをる 諏訪男 一京 美雪 夢路 金祥 虎尾 由美子 志げ緒 喜美子 義徳 秀四 喜子 一粹 栄子 弘風 なぎさ (吉) 修 たもつ 祥昭 福世 初太郎 志華子

夜光虫海の祭とみて詩人

(海) 洋

半額に弱いお方で買い溜める

柳伸

半額になつても行かぬ映画館

(蘭) 修

半額でやつと買う気が起こりだす

東吉

半額にひかれられない物も買い

直子

半額の値打ちになつた定年後

尚士

半額にしてもコロツケまだ残る

章久

半額の顔で澄ましてゐるスーツ

太郎

何が不足か突然暴れ出す鯨

昌紀

マイナスをプラスに変えて揺れ戻す

勝弘

揺れながら出発点に戻る旅

郁男

戦争ノ一赤エンピツに揺れはない

一步

コムスンもノバもみつちり叩かねば

ルイ子

みつちりが華を咲かせたイナバウアー

ばつは

どんどん晴れ女将修行はみつちりと

和雄

和の心みつちり雨上りの羅漢

柳弘

平手打ちみつちり父の愛こもる

更紗

妻の勘みつちり油絞られる

楓楽

生き様をみつちり学ぶ師の背中

集一

10歳のリボンが映える渡り初め

重人

揺れなさいいずれ落ちつく九条に

ただよし

川柳塔きやらばく

大塚

恵子報

あまたある星の一つを探してる

恵子

プラス志向で命明るい方を向く

日枝子

万華鏡あの世の空も星が降る

瑞枝

野も山も雨にしびれを切らしてる

蘭

出逢いから六十余年旅つづく

すみえ

八十路坂借りた命をいただいて

晶子

渋滞で急がば回れ工事中

章江

深みどり何かひとつをやり遂げたい

てい子

一筆箋にこころ溢れる夏の詩

千代

背景の壁はいつでも青空で

ふみ

ふるさとを歌えば心澄んでくる

田鶴

お化け見て驚いている夢を見る

天雀

鏡にはやつぱり亡母の顔がある

春枝

子育てを覚えてくれるコウノトリ

初枝

住民税アップに波紋よんでいる

玲子

柳絮とお昔は遠く雲がくれ

ゆき

早苗田の曲つたままにまだ続く

寿々子

新緑です心の保養しませんか

亜弥

ほろ酔いがさめると尻尾切れている

なみ

梅の木に亡父の伝言ウメがなる

やえ

赤いバラ私を満ちた気にさせる

那珂子

長柳会

村上直樹報

蝉しぐれ選挙選挙と小うるさい

直樹

難問も早く片付く選挙前

たけし

握手した手袋初心知らぬ顔

芳野

選挙前電話してくる知らぬ顔

正一

開票と同時に確する不思議

正美

まるで通夜選挙破れたたるまさん

輝子

公約は選挙終れば知らぬ顔

不二雄

お世辞でも見事と褒めて喜ばせ

武男

襖絵の見事な虎がとびだしそう

もこ

難病にバイオの技術待つ医療

登美子

和さんいつも講話は長尾鶏

靖博

震災で雑魚寝余儀なく飯の宿

美代子

釣書きの趣味は読書に嘘がある

三和子

釣り草に疲れた命ぶら下げて

明子

大物を釣り上げました玉の輿

けい子

うかつにも釣書に釣られ今夫婦

敬二

釣りの朝妻を起さぬ忍び足

幸雄

見事です師匠の舞の足さばき

靖子

甘言に釣られ嫁したと妻の愚痴

和代

恐いほど見事に当たると妻の勘

正博

芸でない芸へ見事なピエロの手

英美

忠誠心見事で哀し盲導犬

富美子

大リーグサムライ達に喝采を

和子

釣忍打ち水涼し路地の暮れ

史

釣りしのお日本の夏の句読点

正子

しにせ宿仲居にまでも気を使い

明信

母ひとり厳しい父を演じ切る

一慧

宿の朝いつもと違う妻の顔

よしお

絵手紙の見事に画けて蝶が舞う

マサ

選挙後の増税なんてマル秘の秘

淳司

川柳花の輪

妻谷

重風報

つる伸びて隣でキユウリ育つてる

ミヨノ

公衆のマナーも出来ず育つ子ら

隆子

育つほどスネの細さが気にかかる

音成

逆境に育つたせい日々平和

重風

子育てを終えて母さんグイェット

一幸

なにくそをバネにがむしやら独り立ち
親から妻男は誰かに育てられ
糠床を作って茄子の出来を待つ
お母さん子供の声が上にある

川柳大阪

長井

善純報

回る寿司油断してたら待ちぼうけ
無駄遣いつけがまわつた残高表
ほろり出す女の涙ゆだんする
油断して後継ぎ居ない道具箱
油断して出来てしまった子沢山
誕生日間違えまとも恋終る
花束を受ける背中は隙だらけ
油断せず九条皆守らねば
ちよつとした油断でかわる風の向き

尽くすこと誓つた指輪だつたのに
沢山の議論尽くしてこれかいな
尽くされて甘えて共に恩返し
尽くしてもなせに逆らう反抗期
地酒よし語り尽して夜が白む
尽くしても評価上がらぬ主夫の僕
歌のように尽くす女はおりません
尽しても尽しきれない親の恩
善の道尽くす男の太い指
五十年よくぞ尽くしてくれました
全力を尽くせば見えてくる明日
この人に尽くすと決めた日の涙
尽されてつくす笑顔があたたかい
保護色で時どき息を潜めてる
色々と仕掛変えてもビクは空
色眼鏡それで色分けされた過去
新緑の山が炎と化すツツジ
みちのくの誠意が胸にしむ暮色
この色に勝つものはない空の青
人ごみに油断の穴が待っている
油断した酒は内緒をほろり出す

勉 一
泰 子
善 栄
やすの
笑 風
修 修
五 月
彦 太
勝 弘
利 昭
紀 雄
洛 醉
和

高知川柳社

川竹

松風報

冗談めいた話は本気かも知れぬ
冗談で言つてよい事悪い事
冗談の一つも言えぬ石頭
冗談と平謝りへ汗も出る
冗談でも入れて講師の演技力
ご冗談でしようと軽くあしらわれ
冗談の中のジョークが効きすぎる
冗談と浮世の憂さを飛ばす酒
義理少し欠く年金の明細書
肩書きを祝儀袋の中に詰め
出席へ戸惑う義理の披露宴
義理がある押っ取り刀さげていく
義理人情薄れれ鳥乱れ出す
義理ばかり立てては細る床柱
ふる里へ義理立て帰るUターン
無理しても義理は果せと天の声

初 江
和 恵
勢 子
暖
千 鶴
みどり
京 子
正 躬
幸 子
功

年金の中から義理のし袋
年賀状義理にも一筆添えて出し
義理人情あつてこの世は捨てられぬ
潮風がねつとり焦がす漁夫の肌
こげ飯を握つた亡母の割烹着
天高く高く合格した帽子
軽い嘘こんな重く残るとは
いざごさは御免だ暑い暑い夏
コムスは何方を介護しましたか
ねつとりと口説きあつさり断わられ
お出掛けは帽子がわりにアテランス
ねつとりと夫婦を丸くするお酒
ねちねちと昔のはなしむし返す
叶うまで夢を追うてるねばり腰
励ましの嘘です神よ許されよ
私の余生いたわる夏帽子
つまずいた道で拾つた知恵ひとつ
裏のうら読んで男は生き残る
ときめきを買う一輪の紅いバラ
未知数の明日へ残り火は消さぬ
政治家の嘘でガラスの森ゆれる
赤帽子白帽子どちら勝つても勝ちは勝
真つ白い皿にやがての夢を盛る
七難を隠してくれる帽子選る
毎日とたたかい刺激たべている

松 風
和 江
耀 一
柳 伸
欣 之
浩 三
秋 雄
紀 雄
いさお
宏 至
あかり
朝 子
扶美代
ますみ
一 風
民
加 央里
賢 子
元 紀
春 蘭
寿 鶴
國 治
弥 生

八尾市民川柳会

宮西

弥生報

なにくそをバネにがむしやら独り立ち
親から妻男は誰かに育てられ
糠床を作って茄子の出来を待つ
お母さん子供の声が上にある

勉 一
泰 子
善 栄
やすの
笑 風
修 修
五 月
彦 太
勝 弘
利 昭
紀 雄
洛 醉
和

回る寿司油断してたら待ちぼうけ
無駄遣いつけがまわつた残高表
ほろり出す女の涙ゆだんする
油断して後継ぎ居ない道具箱
油断して出来てしまった子沢山
誕生日間違えまとも恋終る
花束を受ける背中は隙だらけ
油断せず九条皆守らねば
ちよつとした油断でかわる風の向き

初 江
和 恵
勢 子
暖
千 鶴
みどり
京 子
正 躬
幸 子
功

年金の中から義理のし袋
年賀状義理にも一筆添えて出し
義理人情あつてこの世は捨てられぬ
潮風がねつとり焦がす漁夫の肌
こげ飯を握つた亡母の割烹着
天高く高く合格した帽子
軽い嘘こんな重く残るとは
いざごさは御免だ暑い暑い夏
コムスは何方を介護しましたか
ねつとりと口説きあつさり断わられ
お出掛けは帽子がわりにアテランス
ねつとりと夫婦を丸くするお酒
ねちねちと昔のはなしむし返す
叶うまで夢を追うてるねばり腰
励ましの嘘です神よ許されよ
私の余生いたわる夏帽子
つまずいた道で拾つた知恵ひとつ
裏のうら読んで男は生き残る
ときめきを買う一輪の紅いバラ
未知数の明日へ残り火は消さぬ
政治家の嘘でガラスの森ゆれる
赤帽子白帽子どちら勝つても勝ちは勝
真つ白い皿にやがての夢を盛る
七難を隠してくれる帽子選る
毎日とたたかい刺激たべている

松 風
和 江
耀 一
柳 伸
欣 之
浩 三
秋 雄
紀 雄
いさお
宏 至
あかり
朝 子
扶美代
ますみ
一 風
民
加 央里
賢 子
元 紀
春 蘭
寿 鶴
國 治
弥 生

京都塔の会

都倉 求芽報

困難にあえて挑んで意地を見せ
猫のいびきが部屋にあふれている安堵
駄目押しが通用しない紫陽花よ
寄り道もせずに家路につく燕
赤ちゃんポストつばめの親子笑つてる
あやふやな老いが輪郭見せはじめ
あやふやな感性でするしつけかも
あやふやを敵に回して疲れ果て
癌再発 心濁つて聞統く
調律をせねば和音が冴えません
寂聴節 言葉濁さぬとこがよい
謝罪して心の濁りとれてくる
思い切り濁りまっ白を探す
少し泥混せて隠れることにする
話す勇氣出るまで言葉濁しとく
水晶玉濁つて見えぬ僕の過去
香水に軽い遊びが濁りだす
亡き母へ直通電話夢の中
被災地へ直通で着かぬ義援金

はびきの市民川柳会

徳山みつこ報

好き嫌い何もなくなりほけ始め
嫌いやと思う心が顔に出る
嫌いでも仕事上では笑顔向け
誰にでも親切にする彼キラライ

一壺
フジ
千鶴
六点

蝶々に嫌われたのか美がつかぬ
喧騒を嫌って森の奥で吠く
夕方になると背中が酒求め
好きやねんやんわり胸を突く言葉
責任がないから好きなことを言う
好物の酒を墓前に無沙汰詫び
ゴールしたときどき感がたまらない
面接へ深呼吸したドアの前
ラブレターときどき開けた青春譜
父の日に心ときどきりボン解く
一夜漬け挨拶とちる披露宴
ゆるやかにときめき減つて黄昏れる
内緒事絵文字で届くEメール
メールまで若作りする絵文字入り
父の日に天国へ打つありがたう
追伸に少し苦言を書き添える
メールより声が聞きたいじじとばば
拉致の子へせめてメールを届けたい
消し忘れたメールが招く妻の修羅
ケータイもメールも知らずつがない

川柳塔みちのく

小寺

花峯報

恩人の恩に合わせて決める無理
同窓会靴が決まらず遅刻する
決めました今日は一日寝て暮らす
鶴を折る一羽一羽に願ひ込め
上座から必ず決まる咳はらい

由紀
柳子
美鈴
成柳
一呑

泰子
扶美代
猿杓
光男
敏

小さい善支援するのは気持よし
登下校児童の安全支援する
決まらずにとつと冷や汗始球式
子離れを決めて二人の旅に出る
災害の支援に笑顔握り飯
献杯の中に苦さの終戦日
六十億の一人伴侶が側にいる
延長はバンドで決めた優勝旗
顔の皺苦楽の過去を語り継ぐ
九回の裏でヒットが会釈する
猫の手になつてりんごの摘果する
のびのびと演技を決める一輪車
蜩一匹川の浄土に流れつく

あかつき川柳会

山本

柳昌報

太陽が笑うゴッホもひまわりも
太陽を背に朝市の荷が動く
梅雨明けの太陽を待つ茄子胡瓜
下町の太陽だった妻である
お日様に約束がある四季の花
太陽の光は格差なく照らす
太陽が憎しと焦がす白い肌
太陽とひまわりのようあの二人
夕映えに女の嘘がろ過される
太陽と遊んで熱れるのはわたし
時計今正午を指して終戦忌
喜びも哀しみも知る花時計

良知
たつお
祥昭
利昭
柳弘
東吉
章久
蕉子
美弥子
森子
富美
朋月

時計無視介護の日日は自然体

電波時計その律儀さが気に入らぬ

八月を忘れはしない古時計

出直しの朝を励ます鳩時計

次世代へ繋ぐ時計の螺子を巻く

遅刻する人の時計は合っている

ごはん食べるいつか一人となる二人

信念を曲げず獄死をした生命

お静かに青い命が土を割る

うちの猫ごはんも余所で食べてくる

漱石の猫を水瓶もて余す

拉致された三毛は三味線に化けた

猫だけが愚痴を真面目に聞いている

招き猫の手は損をして得を取る

安倍政治家事尽さず天命待つ

核戦争屍のみが残る星

鶴形死なせた闇が忍び寄る

ワーキングプアと貧乏言い換える

豊中もくせい川柳会 江見 見清報

重なつて不義理出てくる予定表

バス待ちへたまたま友の車来た

少年の過去はリセットして生きる

国なまりしぜんと出てる里帰り

頼りにはならぬ俺だが風よけに

電話から故郷の青田たぐりよせ

砂時計落ちた分だけ信じてる

シマ子

昭

美智子

朝子

集一

たもつ

恵美子

克己

郁夫

ふみこ

慶一

卓

見清

元紀

紀雄

正

純甲

尚士

見清報

美智代

タミ

啓生

慶子

郁子

満寿巳

玲子

天国へ行けると思う勘違い

頼られる人になろうかいや止そう

お別れに深層水があふれだす

年金も子らも目減りの国に住み

挑発を重ね言葉でおびき出す

朝顔は初恋色で胸に咲く

焼きたてのパン幸せの中にいる

団塊にたまたま生まれ損ばかり

この人の頑固は国宝級である

北極星迷ったときは頼る父

国という枷が私を離せない

国境を越えてお日様照っている

がんばって産めよ殖やせよ国のため

一灯に頼り暗夜を行く勇氣

苔むした亀にこの世を問うてみる

赤い服たまたま着たい乱気流

太陽が頼り生きとし生きるもの

頼りたい頼られたいにある誤解

気紛れではないがたまたま出た善意

砂まじり浅蜷の意地を褒めてやる

重箱の隅は無縁の嫁姑

梅雨空の向こうはきつと浪花節

半径をのばして夢とすれちがう

富柳会 池 森子報

荒波を越えて二人に春がくる

波風を立てず素直に今日を生き

巴子

佳恵

宇乃子

美義

求芽

孝一

美籠

遠野

寿美子

勇治

肋骨

夢

尚士

則彦

見清

都代子

幸雀

千津子

比ろ志

寅次郎

知香子

早人

あきこ

森子報

鐘造

紅紫朗

波乱万丈酒場の隅に置いてある

パリのモデルどの娘もキリギリス

血圧も脈もナースが上げている

飽食の猫が忘れたねずみとり

ハンカチをハニカミ王子追いつける

改めて健康願う歳となり

老人のトリオが集う夜行バス

球児等を各球団がマークする

思考を泳がせる沈黙の間

波風に揉まれて丸くなった貝

子育てのモデルは母の日記帳

物やない心の中を問いなはれ

愛憎の波動時空を突き抜ける

波にのり波間をぐる生き上手

シンプルな旧型モデル私向き

生きざまを鏡に写し前うしろ

ままごとで常の私が暴かれる

油断から足元揃う波しぶき

人波に押されて僕が試される

プラモデル作る父親子は昼寝

それぞれの想い錯綜して佳境

さざ波になって夫婦の共白髪

極楽の波から妻が帰らない

夕焼けの街で乾いてゆく仮面

これからは急行乗り換え各停で

ゆるぎない存在示す葱坊主

それぞれが椅子に刻んだ自尊心

和子

千華

隆彦

淳司

高鷲

壽峰

浩子

登子

深雪

佳子

佳子

巳代一

ひろし

田鶴子

未知

寿之

伸雄

恵子

よしみ

武人

奏子

澄子

晴美

鬼焼

七朗

よりこ

アキ

もう一波乱あるだろう花の首

翠洋会

谷口

ほんのりと酔えば天下は俺のもの
ほんのりと化粧天寿を全うす
あの頃の話が増えた箸一膳
ほんのりがおいしい水を飲んで
ラブシーン類あからめたのは昔
ほんのりと送り手思ひ鶴を折る
ほんのりと月を眺めて露天風呂
ばれましたほんのり赤く盗み酒
年金も税も保険も詐欺に似る
マスコミに息子王子にされました
地も動き政治も動く音がする
しやあないなあ口がすべって首がとび
政治家の仮面選挙で塗り替える
逆転の相撲に行司うろたえる
ミート社の悪事に神もあきれはて
無事電話つながり安堵する茶の間
被災地の苦悶を思う仕舞風呂
天下国家論する苗にあるやる気
夏風去って安堵の夕座敷
コムスンに老人の杖とはばされ
インテリに見えてその実三枚目
よしこれで勝てると読んだ駒の首
自己流でたのしく生きる老後です
ブランド品ボクも着けてるセレブ大

森子

義報

楓楽
照子
美籠
日の出
恭昌
孝一
春
茶々
尚士
蕉子
捷也
千梢
集一
久峰
絹子
桃花
志華子
富子
水昇
れんげ
満作
正雄
舞夢
げんえい

子を生んでいとも自然に母の顔
たいくつな順路こっそり裏がえす
若かりし頃それなりに美しい
年寄りのおしゃやれな杖に元氣みる
女性の品格問うて男が試される
梅雨の午後鏡とじつと睨めっこ
川柳塔のぞみ
播本
雨よ降れどうぞせ追われる青テント
右脳は挑み左脳は知らん振り
バス電車待たずに乗れた誕生日
お使いの飴玉一つ魅力的
どうぞせ余ら長生きの名を金魚にも
どうぞせ余る米なら世界の難民に
利上げ前慌てて買ったマイホーム
デートするふたりに夕陽海に落ち
どん底で神が伸した手を掴む
どうぞせ濡れる梅雨なら梅雨のいでたちで
正直にならう時がゆるしてくれるから
もう三日折れる頃合い見つからず
タイムミングいつでも悪いこの私
赤い糸引けないままに老いてゆく
ライバルのバーの高さにかなわない
年金の目減りはどうぞせとめられぬ
さくらにも拍手をさせるタイムミング
どうぞせまだ退院出来ぬなら寝よう
どうぞせなら奴も道連れ北の駅

すみ子
理恵
千歩
さと美
昭
みつ子

充子報
蓄水
公誠
哲代
リッ
遊花
やすお
方子
あきひこ
鐘造
シマ子
尚
乃りこ
那珂子
明夫
権悟
清
つよし
きよし
恭昌

三歳が一番面白いことをつく
小さい傷いつも何処かに持つ十指
水やりが終った後の通り雨
そうだったどうぞせ他人のあんなです
失恋の痛み慣れたフェミニニスト
奇跡的キャンセル待ちで買った株
となり合せただけで高説聞かされる
余生よしおまけのように恋もある
一言を足して生徒に慕われる
花開く一瞬黄うマクロの目
川柳塔まつえ吟社
三島
汚された海に帰ってゆく夕日
沈む日に私溺れたことがある
夕日にみんな見抜かれている私
私まで真つ赤に染めて夕日落つ
まっかな夕日笑ったままの水平線
夕日まで見てから帰るスケジュール
紫陽花にそつとささやく地藏さま
人は善値踏みなさらぬ地藏さま
うさぎと地藏を囲む童唄
地藏さん心のケアも聞িয়েくれ
六地藏深い悩みをきいて
わたくしを無言で諭す石地藏
わいわいと未確認情報泡立てる
わいわいの訳は財布が知ってる
わいわいと予防注射の列に居る

賀世子

あやめ
洋子
千代
勝
康子
義子
由一
充子
桃葉
桂子
蘭
幸子
多喜
薫
茂美
日出子
房子
小生
知恵子
浜丘
紫見
たけし

わいわいとかつぐ御輿に紛れこむ
わいわいと騒いだ後の虚脱感
わいわいと街を燃えさす豆紋り
方言で古代出雲を盛り上げる
方言に笑いこころげて打ち解ける
故郷の方言和む祝酒

美しい人のあいさつばんじまして
だんだんで始まりほんならで終る
方言を丸出してしてツアー旅
まくし上げ足湯に並ぶ福の顔
傷ついた猿も仲間足湯する
見知らぬ人と気安く話す足湯
足湯から温い話題が湧いてくる
いい話弾み足湯の顔馴染
なでしこはいない足湯の賑やかさ

ピーナツつひと袋あく雨しとど
ひと眠り違う答が見えてくる
そのくせも今や空気になりました
正論をじっくり煮込む落し蓋
総一億堪忍袋の緒が切れる
待ちぼうけ見知らぬ人に恋をする
胃袋にどんどんつめるバイキング
うっかりと本音洩らしてからの溝
自信ない私の声はピアニッシモ
米袋つぎつぎ次に子が育つ

サークル檸檬

吉田あずき報

英子 治代 玲子 蘭水 政子 ちえこ 礼子 柳歩 幸子 捷子 和歌子 静恵 昌枝 叮紅 注湖

袋綴じにされてしまった僕の夢
人情がまだ生きている袋小路
ゴミ袋いっそ私を捨てようか
ブランドの袋に中身直打ちあげ
岩美川柳会
石谷美恵子報
会議には必ず混ぜる人がいる
少し酒混ぜて私のかくし味
母の愛父の嫉と混ぜ合わせ
牛に豚混ぜてどっさり金もつけ
ひらめいた言葉無理に混ぜてみる
建前に本音混ぜればややこしい
冗談に混ぜた言葉が煮こぼれる
幸不幸混ぜて人生味があがり
かくし味少し混ぜてる人気者
ねじまがり錆びてにんげんくさい釘
錆びついた釘のあたまたが邪魔をする
釘抜くやテコの応用またたし
口答えしない釘だがへまがある
叩かれる釘に譲れぬ自負がある
揺れている心真つすく釘打てぬ
しあわせを掴もう錆びた釘同士
お金ならないと始めに釘をさす
爽やかなブレーキだった毒舌家
窘めて頷いてから長い酒
あきらめも誇りがそばにいる安堵
欠伸する夫がそばにいる安堵

昌紀 美籠 みつ子 光久 圭一郎 孝男 一粹 節子 睦子 一京 菖子 完司 螢 はお 重忠 よしえ たぬ 幸枝 雅女 忠良 蟹郎 きみ子 一瑠

増税にブレーキかける我れの票
目と口を肥やす浪費が止められぬ
ブレーキを掛け合い党首談義する
暴走をしたがる子へのブレーキに
ブレーキを踏んで余生を送りたい
わたくしの良心欲が混ぜかえす
美恵子

倉吉川柳会
竹信 照彦報
長梅雨でトマトは腐る気も腐る
湿舌が南にとまり長い降り
じとじと思わせぶりな梅雨男
アデ虫とナメクジとあじさいの梅雨
ゆらゆらと合歓の花咲く梅雨晴れ間
梅雨の空晴れば暑く身がもたぬ
どうやらどうやら渡る世間の知恵
ひらめきどうやら声を上げそうだ
どうやらどうやらこまで来たら風まかせ
ひさびさの雨でどうやらと鮎動く
生きる旅どうやら終り見えて来た
汗流しどうやら度胸ついてきた
言い訳もどうやら言えぬ月曜日
あの二人どうやら只の仲じゃない
ポンコツのチャリンコ漕いでまた達者
八十路坂自転車こいでお浄土へ
自転車に乗りなさんなど子に言われ
家のより良い自転車粗大ゴミ
自転車で行けば鳥もよびかける
泰輔 酔芙蓉

重忠 和子 悠子 萩江 睦子 美津恵 玲子 康子 龍枝 貞子 由紀子 賀寿恵 きみ子 日出子 節子 日生子 節子 泰輔 酔芙蓉

自転車が次第に重くなつて来た
延命のあらゆる手段おこわり
誕生も結婚式も死も喜劇

山川草木あらゆるものに神宿る
煩惱にあらゆる欲がつきまとう
真つ白はあらゆる色に染められる

太陽の恵みあらゆるものに降る
年金であらゆることが暴かれる
年の功あらゆる苦勞なめて生き

前向きにあらゆる事に立ち向う
乗り捨ての自転車天を仰いでる

大原川柳社
山本 玉恵報

いつだつて顔色変えた事がない
冷静さをすぐに忘れる血の流れ
冷静にいればつめたい人と言う

冷静に話せば笑顔美しい
千客万来器用な父の腕が鳴る
風向きがちよよいちよい変わる反抗期

言い返す言葉冷静さが足らぬ
冷静になれて窓際温める
冷静に冷静に包丁研いでいる

冷静に大風呂敷のあとしまつ
冷静な判断力が功を立て
冷静な人におだてが空回り

針の跡子には話せぬ過去があり
冷静な距離老婆の胸の内

かつみ
完司
石花菜
鬼一
螢
風露
和枝
次男
常代
勝誉
照彦

冷静になつたら見える花の刺
冷静な父居てくれる火の車
前後してお客が揃いにぎやかに

冷静な判断命取り止める
冷静な対処大人の離婚沙汰
冷静を欠いで思はず恥をかき

不器用で仕事は出来ず口達者
さからわず器用にかわす生き上手
冷静さ時どき失せる鍋の蓋

川柳ねやがむ
森

嫁入りの荷物に血筋まで詰める
笑顔よし代々からの贈り物
家系図は清和天皇から続く

週れば桓武帝までいく血筋
一流の血筋の中で苦惱する
専門家一人も居ない保険庁

専門は駅裏にあるコップ酒
ふるさとの医者はひとり何でも屋
この頃は謝罪専課がある会社

専門的に言えばと喋る若い医者
難しい専門用語飛ばし読む
戸締りのことは空裏に聞けばよい

専門は無いが何でもこなす妻
専門になると厳しい風当り
病氣と共に回復しました妻のぐち

五分粥になつて寝間からもう指図

あすなろ
真
たづ子
みさえ
美佐子
巴子
喜美子
悦子
妻子
辰江
南花
地佳平
はじ芽
敏夫

さちこ
あやこ
文代
とめの
恵潮
己吉子
静子
絹子
玉恵
とし子
かすみ
弘風
利昭
博泉
たもつ
郁夫
忠央
純甲
麗
さち子
仁清
勇太郎
恵子
あやめ
高栄

回復は母のやさしいチンプイ
青春に形状記憶あるならば
もう元に戻る日もない欠け茶碗

回復の一步しつかり大地踏む
出世払いの家賃まとめて礼にくる
行き詰り基本に戻ることに覚え

まだ女恥じらいながらピンク着る
愛したら迷惑ですかという弱気
ロケットも永住権が欲しくなり

合格ならいいさビリでもトップでも
さがして居るおでこに乗つた老眼鏡
梅雨の入りせめて明るい服を着る

専門の医者が言うてるこれは恋
涸びてするめのようになる猛暑

すみよし川柳会
岩崎 公誠報

タクシーのメーターに酔い覚めて行き
やんわりと我が身をだます酒に酔い
酔う気分一度なりたい下戸の人

披露宴酔つて婚殿寝てしまひ
酔うほどに天下国家を熱く説く
もう一寸もう一杯が仇になる

努力した結果とビールおいしそう
幸せになろうと酒に酔つている
ハープ館香りの渦に酔わされる

酔えぬまま花嫁の父独りぼち
休肝日誓いをやぶり二日酔い

朝子
弘一
洋
賢子
一風
庸佑
ルイ子
薫
ただよし
集一
一笑
日出子
修
亜成

遠野
篤子
定子
舞夢
裕之
明江
日の出
公誠
蕉子
半銭
萌

お酒よりムードに酔って本音吐き
酔ってきたらしいな口がよく回る
酔う程にちらちら見えてくる本音
酔っ払いの愚痴は背中できき流す

むらくも川柳会

毛利

幸報

りつえ
かりん
昌紀
桃花

自己主張多い孫等の夏休み
カラフルな水着賑わう夏休み

夏休みあつて子供の夢うつ

夏休み計画だけは出来ている

親も子も嬉しい悲鳴夏休み

夏休み蟬が宿題せきたてる

一合でとけた心のわだかまり

苦も楽もみんな吸い込む新ネクタイ

稜線にむすばれて行く月の窓

蹟いた石に親父の声がする

舞扇わが人生を紅に

茶摘みする昔の乙女の懐古談

同窓会しわの数だけ成長し

円満は耳が遠いか惚けた振り

合掌をほどかないよう生きていく

今日の句座たのしく若き人つどう

花が好き相性びつたり影法師

入学を陰で見送る祖母心

川柳さんだ

北野

哲男報

一瞬に焦がす夜空の恋火花

婦美子

幸報

美恵子
定子

彰

美保

定子

幸

俊夫

蘭水

瑞枝

秀夫

かずこ

愛子

信夫

義良

恵美子

ます美

喜美

久子

万華鏡アリ地獄とも火花とも
生涯と決意ではめた指輪だが
質草にならぬ指輪は持つている
絶世の美女は指輪などはせぬ
頬張った水あわてる電話口
温暖化氷河が溶けて赤信号
躁鬱もやがてジョッキの泡の中
ピアガーデン夜空見上げて大ジョッキ
ジョッキやめコップにかえる身が大事
大ジョッキ重ねて顔が緩みだす
この人に決めたと大ジョッキ
マイジョッキ大きい方は妻のもの
白魚の指もお茶より小ジョッキ
父の日は休みにするかダイエツト
宅急便旅の思いを詰め合せ
退職した今も夢みる棒グラフ
川柳に飽きたら地球離れます

城北川柳会

小谷 集一報

ふくよかな皮膚だ人生今が花
てのひらのまが知ってる老父の汗
伐採が続き地球の肌荒れる
銭湯に皮膚一枚を脱いで来る
教員の免許タンスで欠伸する
免許などいらぬ母のにぎり飯
妻の座の免許はどかんとしたお尻
もう待てぬ長い別離の拉致家族

二英
茂山
朋月
正和
歳子
順子
哲夫
藤朗
美紗子
光久
忠
章子
哲男
一泉
雅司
好文
キヨミ

戦火にも飢餓にも逢うた長い旅
しぶしぶと愚痴を聞きまだ友でいる
雷鳴へしぶしぶ出向く検査の日
しぶしぶで持ったマイクを離さない
蟻の列しぶしぶ並ぶ二三匹
丁寧生きて厳しい顔になる
病い明け気随気儘に暮らしてる
悩む事生きてる証またたのし
突然のお客に困る風呂上り
合槌を打ってはまった落し穴
紫陽花は散り際の意地みせている
原点に戻って見たらと波の音
成長はどうあれ詩いた種生える
あつさりと茶漬で済ます旅帰り
高層の眺めは心広くする
選択肢増えて森から出られない
もう半分あと半分のカレンダー
貧乏のラインを下げた富裕国
竹の子の夢を無理矢理棺にした
本を読む少し賢くなったかな
空白のページの中でごろ寝する
ここにいますときどき噂とどけます

求芽
麗
容子
千歩
郁夫
あやめ
昭子
高栄
はじめ
倫子
美智子
萬的
典子
順三
志華子
明子
弘風
正

川柳塔打吹

野口節子報

台風に呪文となえる製作り
古女房忘れた頃のつむじ風
甘く見た風に足元すくわれる

重忠
和子
美代子

蒲焼きの匂いが風に乗ってきた
参院選年台台風吹き荒れる

琉球に破れかぶれの風が吹く

冗句サラサラいい人なんだこの人は

サラサラと筆が流れて字が余る

サラサラと三文判ですむ暮し

過去は過去あつさり捨てて砂時計

談合の違反を包む天下り

嘘の数ラップに包み知らぬ顔

包むなら大風呂敷に夢いっぱい

子の過ち大きな愛で包み込む

嘘八百包んでメイドインチャイナ

夕闇の包み残した栗の花

温暖化地球を包む悪いガス

羊水に包まれ生まれ出た命

包んでも包みきれない親不孝

にんげんを包むとしみだす心

留守守る爺婆ちゃんの過疎の村

着信の番号見分け居留守決め

極楽へ閻魔の留守にサツト行く

留守ですと貼り紙してて母昼寝

仏壇の土産で留守を頼まれる

留守しても鍵はかけない城下町

ゆうパック留守にメロンが来たらしい

どの家が留守かだいたい知っている

影法師雨と曇りは留守にする

鍵っ子に思いあふれるママのメモ

たけ代
公恵

石花菜

やえ

和枝

螢

龍枝

小生

美知恵

禎元

美美子

三津子

佳女

玲坊

善江

滋

芳光

孝恵

京子

照彦

紀美恵

睦子

さみ子

きよ子

よしえ

完司

玲子

夜市川柳二十五周年

記念大会に出席して

— のびやかなひととき —

新家 完司

二十五周年という節目の大会。鳥取県からの選者は、岸本安章さんと倉益一瑠さんと小生の三名。私の車に同乗して下さったのは、春木圭一郎さん、植田一京さん、倉益一瑠さん。鳥取駅南を六時半に出発し中国自動車道へ向かう。早朝にもかかわらず、四人のテンションは高く、車内は川柳談義で熱気ムンムン。

阪神高速で五キロほどの渋滞があったが、会場の堺総合福祉会館到着は十時前。会場へ入って驚いた。正面の壁に魚が

いっぱい泳いでいる。蛸より小さい鯨がご愛嬌。堺川柳会の皆様の手作りという。人生を楽しむ余裕が楽しく、大歓迎の心意気が嬉しい。

昨夜から来られている安章さんと会場で合流。出席者は百四十名ということで大人り満員。さすがに節目の大会である。披露前の出し物は、河内月子さんと米澤徹子さんのフラダンス、そして河内天笑主幹のハワイアンソング。川柳会場であることを忘れてしまいたいような、のびやかなひとときであった。

夜市川柳大会の特徴の一つは、ユニークな賞品の数々。小生は、「紀州の梅干」 「もみじ饅頭」 「ネスカフェ」 をゲット。帰路、快晴の中国自動車道は美しい夕映え。またもや川柳談義に花を咲かせ、大笑いしながら無事に帰宅した。

お願い

川柳塔事務所への郵便物は必ず新住所をお確かめの上ご送付下さい。旧住所からの転送は到着日が遅れますのでよろしくお願い致します。

川柳塔 事務所

第5回おかやま県民文化祭協賛
井原市文化祭川柳大会

と き 11月10日(土) 開会午後1時
ところ 井笠地域地場産業振興センター
(井原線井原駅から北300メートル)

事前投句 各題2句、締切10月5日(金)

投句料 1000円(郵便小為替)

用紙 B5用紙に3題6句連記

題と選者

「匠」恩塚 治子・「風」小野真備雄

「味」岡田 耐子

当日句会 各題2句 締切11時30分

会費 1000円(昼食・作品集代)

題と選者

「筆」高木 勇三・「端」藤 帆子

「雑詠」板尾 岳人・「席題」広畑こうじ

お話し「思いやり」一輪の花にも

長谷川紫光氏

賞 各題優秀作品に会長賞他

主催 井原市文化協会 後援 岡山県文化連盟

投句先 〒715-8601 井原市井原町311-1
井原市文化祭川柳大会宛 ☎0866-62-9541

第5回おかやま県民文化祭
第2回 岡山県川柳大会

と き 10月13日(土) 10時開場、13時開会
ところ 西大寺ふれあいセンター
(JR西大寺 徒歩8分)

兼題と選者

第1部(事前投句)各題2句

「挑む」濱野奇童・「仏」小島蘭幸

「履物一切」若草はじめ・「追う」森中恵美子

応募会費 1000円(郵便小為替同封)

締切 9月3日消印有効

課題別に葉書大用紙に2句連記、裏面に

住所氏名(雅号)

送り先 〒704-8112 岡山市西大寺上1-15-28

西大寺川柳社 久本に地宛

第2部 当日11時30分締切 各題2句

「密か」山本美枝・「水」船越洋行

「逆らう」小沢誌津子・「味」三宅基雄

「音」小野真備雄

出席会費 1500円 発表誌・参加賞呈

表彰 岡山県知事賞ほか9賞

昼食 会場および周辺の食堂をご利用ください。

主催 岡山県川柳協会・県民文化祭実行委員会

後援 岡山市・社全日本川柳協会

西大寺文化連盟 他

第17回「太平記の里」
全国川柳大会開催要項

主催 太田市・太田市川柳協会他

後援 市教育委員会・社全日本川柳協会他

日時 11月18日(日) 9時30分から

締切 11時30分

会場 太田市福祉会館 TEL 0726-45-8291

第一部(当日参加の部)

課題と選者(各題2句、表現自由、新作)

「灯」今川 乱魚・「歌」川俣 秀夫

「田」荻原 柳絮・「愛」成田 弧舟

「玉」田中寿々夢・「神」深町 金鳥

「声」竹本瓢太郎

第二部(郵送での参加者)

宿題 「煙」

選者 斎藤大雄・大野風柳・西来みわ・
河内天笑・磯野いさむ・本田智彦・
小松原爽介・吉岡龍城

応募方法 2句詠、参加費1000円と郵送

第一部・第二部の特選句中最優秀句に句碑

締切 9月28日(金) 消印有効 前夜祭あり

投句・連絡先 〒373-0851太田市飯田町818

「太平記の里」川柳大会係 TEL 0276-45-8291

第31回 ひらた川柳大会
[時実新子先生を偲んで]

日時 10月28日(日)

開場 10時 開会 13時

出句締切り 12時

場所 平田文化館(一畑電車「雲州平田
駅」下車、徒歩10分)

兼題と選者(席題なし、各題2句)

[時実新子] 近藤ゆかり 選(博多)

[父] 新家 完司 選(鳥取)

[母] 門脇かずお 選(米子)

[隠れる] 三澤 放舟 選(鳥取)

[花] 内田 久枝 選(松江)

[恋] 別所 花梨 選(出雲)

[ありがとう] 金築 雨学 選(出雲)

参加費 2500円(大会誌、粗品、昼食呈)

欠席投句 1000円(切手不可10月15日必着)

投句先 〒691-0003 島根県出雲市灘分

町856-5 長岡 良一

TEL・FAX0853-62-5214

平成19年栃木市民川柳大会

不二見川柳社古希祝記念大会

日時 10月7日(日) 10時開場
会場 アプロニー 5F

(東武・JR栃木駅北口徒歩一分)
栃木市河合町3-26

TEL 0282-22-8743

(駐車場はありますが、出来るだけ乗り合わせ下さい)

宿題(各2句吐)

「好感」 東京 播本 充子選
「描く」 茨城 植木 紀子選
「道具」 宇都宮 菊池 可津選
「陶酔」 埼玉 佐藤美枝子選
「近い」 足利 浜田 あや選
「ぎりぎり」 千葉 米島 暁子選
「手腕」 茨城 太田紀伊子選

席題(各2句吐)

出句締切 12時(欠席投句拝辞)

大会披講 13時30分(予定)

会費 2千円(昼食・大会誌呈)

呈賞 合点20位まで授与

主催 栃木市教育委員会・不二見川柳社
問合せ 事務局 福田 一二三

TEL 0282-23-2298

神戸川柳祭'07

第30回神戸川柳大会

日時 10月21日(日) 10時開場

兵庫県民会館9F大ホール

JR元町駅から北へ7分

兼題「差」

村上 氷筆 選

石井 冬魚 選

「古い」 嶋澤喜八郎 選

「このこ」 奥田みつ子 選

「財」 濱邊稻佐嶽 選

「式」 赤井 花城 選

「収穫」 大森 一甲 選

講演「沖繩の島守」 田村洋三氏(作家)
震災遺児のためのチャリティ色紙展
(初参加の方に粗品進呈)

会費 2000円

各題2句・欠席投句拝辞・席題なし

出句締切 11時30分・開会13時

各題秀句呈賞

主催 神戸川柳協会

共催 ふあうすと川柳社・時の川柳社

後援 神戸市・神戸市教育委員会他

第22回国民文化祭・とくしま2007

渦藍 踊り 文化ふれあう阿波の里

日時 10月28日(日) 10時30分～16時

会場 徳島県教育会館大ホール

当日投句の部(未発表作品 一人各題二句)

「遍路」 平田 朝子 選

「徳」 進藤すぎの 選

「わくわく」 島田 駱舟 選

第二次選者

磯野いさむ・今川乱魚・定本広文

西出楓楽・山倉洋子

賞(予定) 文部科学大臣賞・国民文化祭実行委員会会長賞・徳島県知事賞 他

入賞作品は作品集として刊行し、応募者全員に無料配布します。(小・中・高校生は入選者)

事前投句は締切済み

問い合わせ

〒770-8571 徳島市幸町2-5

徳島市文化振興課内

第22回国民文化祭実行委員会事務局宛

TEL 0888-6221-5178

FAX 0888-6224-11281

文化庁・徳島県・徳島県教育委員会

(社)全日本川柳協会・徳島県川柳作家

連盟・徳島市他

柳界展望

八月の今日は一日中折る

播本 充子

○第29回津山川柳大会の同人の特選句に追加

熱のある言葉に雨が降り

やまぬ 小谷美ツ千

○第38回奈良新聞川柳大会は7月29日、奈良県文化会館にて199名の出席で開催。

同人の秀句は次の通り。
妻というとても上手な皿
直し 吉川 寿美

巡らした知恵に溺れてい
る人科 倉益 一瑤

哀しみを喉のあたりでカ
ットする 新家 完司

フィニッシュへこっそり
力溜めている 倉益 一瑤

鳥取県川柳文芸大賞文芸賞
受賞句。

何事もなく父の日が暮れ
てゆく 伊勢田 毅

また当日成績の総合第一位
を倉益一瑤さんが獲得。

○川柳250年記念朝顔川
柳句会は7月8日、東京台

東区生涯学習センターにて
開催、参加144名、同人天位。

は出る 谷口 義
食べ頃のサインうぶ毛が
光る桃 木本 朱夏

▽御芳志御礼△

和歌山三幸川柳会、川柳塔
常任理事会から金一封拝受

▼計 報▲

松原寿子さん(常任理事)
の母升本チヨノさん(86)、
7月9日死去。

▽同人動向△

○7月8日、第10回鳥取県
川柳文芸大会出席のため、
板尾岳人相談役は鳥取市行。

○日本語の美しさを詩歌を
通して若い世代に伝える趣
旨の「綺麗な言葉」(美研
インターナショナル発行)

▽柳界動向△

番傘川柳本社8月句会(水
府忌並びに岸本吟一追悼句
会)は8月6日、大阪ベイ
タワーホテルにて開催。出
席者143名。川柳塔本社か
ら同人20名が参加した。去

8月号104頁中段15行目
「世話になる嫁に…」の句
を本人申出により削除。

同人名簿35頁、理事森田熊
生を削除。

▽柳界動向△

高野山合祀の件③②賞選考
について④規定の一部改定
について⑤役員推薦につい
て⑥定例確認事項⑦各部報
告事項⑧その他。

次回は9月7日(金)1時30分

森 田 明 子

楓楽・修・集一推薦

の中で奥田みつ子副主幹は、
川柳とエッセイを発表した。

○現代詩歌合同作品集「ま
なうら」(美研インターナ
ショナル発行)に同人山口
光久氏が川柳5句を発表。

▽削 除△

8月のお話は森中恵美子さ
ん。「つらは水に」と題
して吟一氏の横顔、思い出
などを語った。

常任理事会 8月7日(火)、
出席者16名①13回川柳塔ま
つりについて②役割分担③

高野山合祀の件③②賞選考
について④規定の一部改定
について⑤役員推薦につい
て⑥定例確認事項⑦各部報
告事項⑧その他。

次回は9月7日(金)1時30分

森 田 明 子

楓楽・修・集一推薦

の中で奥田みつ子副主幹は、
川柳とエッセイを発表した。

○現代詩歌合同作品集「ま
なうら」(美研インターナ
ショナル発行)に同人山口
光久氏が川柳5句を発表。

▽削 除△

8月号104頁中段15行目
「世話になる嫁に…」の句
を本人申出により削除。

同人名簿35頁、理事森田熊
生を削除。

▽柳界動向△

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳 藤井寺	16日(日)午後2時15分締切り 蛇・ぶんぶん	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
岬川柳会	16日(日)午後1時半締切り ゲスト・心配・無駄	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
もくせい 川柳会	17日(月)午後1時半締切り 呼ぶ・冗談・うまい・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曾根西町2-8-4 江見見清
川柳 さんだ	18日(火)午後1時より 鉛筆・幕・似る・自由吟	三田市中央公民館 〒669-1515 三田市大原1553-12 北野哲男
高槻川柳 サークル 卯の花	20日(木)午後1時半締切り 涼しい・義理・ぶつつり・台 自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-0826 高槻市寿町3-28-13 神野節子
岸和田 川柳会	22日(土)午後2時締切り あんた・癒やす・うれしい クラシック	岸和田市福祉センター 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-586 井伊東吉
東大阪市 川柳 同好会	22日(土)午後6時から 攻める・ボス・笑い・寺	東大阪市立社会教育センター3階 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
和歌山 三川柳 幸会	22日(土)午後1時から わいわい・欲・折る	県民文化会館4F 中会議室 〒640-8111 和歌山市新通7-17 古久保和子
富柳会	22日(土)午後12時半から 第57回 富田林川柳大会	富田林中央公民館 (8月号50頁参照) (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
川柳 ふうもん 社	23日(日)午後2時締切り ヘルシー・いじらしい・殿様	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0824 鳥取市行徳2-632 田中かをる
はびきの 市民会 川柳会	23日(日)午後2時締切り 膝・触れる・もりもり 「ベルト」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
南大阪 川柳会	24日(月) 吟行会 まち・歴史・化粧・500	市立枚方宿 鍵屋資料館 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
川柳塔 みぞくち	24日(月)午後7時半から 貫禄・墓・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々
京都 塔の会	25日(火)午後2時締切り しこり・痛い・化石	ハートピア京都 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽
川柳クラブ わたの花	28日(金)午前9時半から 跡・根性・ミステリー・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

9 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
城北会 川柳会	1日(土)午後1時開場 表紙・掃く・マーク	旭区老人福祉センター3F 地下鉄千林大宮駅3番出口左隣 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
倉吉会 川柳会	1日(土)午後2時締切り 丸い・糸瓜(へちま) 損(そこ)ねる	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔 唐津	3日(木)午後1時半から ピント・黄・不思議	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑
川柳塔 な	6日(木)午後1時から 任せる・仏・早速	奈良市立中部公民館4F (近鉄奈良駅④出口徒歩5分) 〒639-0251 香芝市逢坂2-720-20 大内朝子
尼崎 いくしま	7日(金)午後2時締切り 拾う・空・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
川柳塔 みちのく	8日(土)午後5時半締切り 爪痕・役立つ・少ない	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺花峯
川柳塔 打吹	8日(土)午後2時締切り 鐘・見る・ザワザワ	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-1 3 牧野芳光
川柳塔 まつえ	8日(土)午後2時締切り 釘・枕・渡る・さすが	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9-23-22 三島松丘
八尾市民 川柳会	9日(日)午後1時から 月光・こってり・鈍い・雑詠	八尾文化会館5F 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生
川柳塔 わかやま	9日(日)午後2時締切り 割引・岬・レシート・「金属」	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川柳会	10日(月)午後1時から 食べる・低い・貝・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 プレラにしのみや 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子
尼崎 尾浜 川柳会	11日(火)午後2時締切り パニック・与える・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 事務局 〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺鹿太
ほたる 川柳 同好会	11日(火)午後1時から 無料・体裁・ぎりぎり	豊中市立蛸池公民館 阪急・モノレール 蛸池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
堺川柳会	13日(木)午後2時締切り 百・貸す・「ケニア(折り句)」	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3 河内天笑
川柳 ねやがわ	16日(日)午後1時半締切り 棒・流れる・味噌・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉

編集後記

☆今月号に特別寄稿「二枚の写真」を頂いた古藤愛子さんは、本社相談役であった故東野大八氏のご息女です。今年七回忌に当たる大八先生には長年にわたり川柳塔誌に「川柳の群像」を執筆頂いていました。279回の連載、279人の川柳人を登場させ克明に人物描写をされてきました。川柳界での交流の広さ、深さ、文通量に驚いたものです。

膨大な資料や蔵書は今も愛子さんが、自宅に大八文庫と称して大切に保管をされています。

☆編集部でお預かりしている原稿が、また今月も活字にできなかったというような贅沢な悩みもあります。というのも誌面、ページ数

に制限があり、大会の予告等を優先にしていることと、なるべく偏らぬよう幅広く執筆をお願いしたい所存からです。お預かりしている原稿は順次掲載いたしますので、お待ちくださるようお願い致します。また幅広くエッセイ等応募をお待ちしております。

☆編集部から秀句鑑賞や、一路集選者の依頼を毎月お願いしています。再度のお願いとなる方もあると思いますが、よろしくお願い致します。誌面充実のためご意見等もお聞かせ下さい。

☆酷暑の夏も、この号が出る頃には峠を越して涼風が立ち初めていることでしょう。年々暑さ寒さに弱くなつていく私は、日本の四季から、春と秋がいよいよ短くなつていくように思われなくなりません。(希)

ひとこと

嬉しい誤算

第12回川柳塔まつりの時に河内天笑主幹より「神戸の地には川柳塔の灯がない。神戸市の山口光久さん何とか考えてみませんか」の勧めがあった。夜の懇親宴で伊勢田毅、両川無限両氏に声を掛けるのと、諸手を挙げて「やりましょう」の力強い応援を得、三本の矢ができた。句会として発足するか、全くの初心者を対象に勉強会から始めるかの議論の末、勉強会として

発足することになった。

川柳に興味を持ち、これから始めてみようという人への宣伝と口コミが武器であるところから、チラシ500枚を駅頭で配り通行人に呼びかけた。

最初の勉強会は初心者参加を5名位と予想した。ところがいざ蓋を開けてみるとなんと25名の人が集まり大盛況となった。

会場側から定員オーバーを指摘され、次回の会場探しに頭を悩ましていた次第。(山口 光久)

○「品格」が大流行です。てきたのかと思われます。

「国家の品格」が大ベストセラーとなり、続いて「女性の品格」が昨年十月発売以来、また売れています。書店の本棚を眺めると、「男の品格」「企業の品格」という泥鰌も並んでいました。

○国家の品格には、国民の品格が欠かせませんが、この「品格」の流行は、バブルの発生、崩壊を踏まえ、国民に反省の機運が生まれ

た。健康被害の垂れ流しで、国家の品格はもとより国民の人間性も疑われています。○日本でも政治資金、官製談合など、トップに立つ人たちの品格が問われ、民間では、一流会社の欠陥品問題や保険金不払い、偽装請求などが頻発しています。○人間の品格とは何でしょうか。昨今の風潮から逆説的に考えれば、権力志向、拝金志向に陥らず、正義感、責任感、倫理観をもって潔く生きることでしょうか。○世の中を風刺すべく川柳を詠んでいて、その材料の余りにも多いことから、この国の将来を憂えざるを得ません。しかし、国民が「品格」にその意識を向け始めたことは、日本人の叡智を示すものと思われ、喜ばしいことでもあります。(尚)

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(11月号)

地名

都道府県
市
姓雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようにお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201



檸檬抄投句用紙

「飛ぶ」 (9月15日締切)

11月号発表

西口いわゑ 選 — 共選 — 鈴木 公弘 選

B A

--	--

B A

--	--

地名

市都
道府

姓
雅号

地名

市都
道府

姓
雅号

切らないで下さい

左右に同じ句を書いて下さい



川柳塔誌新規購読申込書

年 月 日

氏名		住所	電話	紹介者
		〒 —	—	
年	年			
月 から 一年	月 から 半年			
9 8 0 0 円	5 0 0 0 円			
該当の方に○をつけて下さい				

〒543
-0052

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201
川柳塔社 (電話 06-6779-3490)

振替 00980141298479

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい



作品募集

初歩教室
一路集 (3句)
〔自「分」(3句)〕

〔「不思議」〕
〔「黄」〕
〔「ヒント」〕

檸檬抄「飛ぶ」
(2句)
〔「ヒント」〕

西口 いわゑ 共選

高橋 岳水 選

石谷 美恵子 選

亀岡 哲子 選

三宅 保州 担当

川柳塔 (8句)
水煙抄 (8句)
愛染帖 (3句)

河内 天笑 選
西出 楓 選
新家 完司 選

11月号発表 (9月15日締切)

12月号
檸檬抄「サイン」
一路集「走る」「荷物」
初歩教室「ゴミ」
初歩教室「十二月」

本社9月句会

とき 9月7日(金) 午後5時半開場・6時半締切り
開催時間、締切り時間にご注意下さい。
ところ アウィーナ大阪 4階 金剛
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06-6772-1441
おはなし

兼題 「わくわく」
「闇(やみ)」
「シヨック」
「避ける」
「内助」

席題 「」

岩崎 公誠
板尾 岳人 選
角野 仁清 選
亀岡 哲子 選
藤井 正雄 選
鴨谷 瑞美子 選
河内 天笑 選

会費 1000円
投句料 500円 (各題2句以内) (切手可)

本社10月句会は13回川柳塔まつり
として(10月8日)開催します。
(表紙裏を参照して下さい。)

第26年度 夜市川柳募集

第4回「越える」 倉益一 瑤 選
ハガキに3句 9月末日締切
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

定価 八百円(送料84円)
半年分 五千円(送料共)
一年分 九千八百円(同)

二〇〇七年(平成十九年)九月一日発行

発行人 河内 権治
編集人 山本 希久子
印刷所 美研アト
〒543-0052 大阪市天王寺区大道二一四一七
花野ビル201号室

発行所 川柳塔社
電話(〇六)六七九一三四九〇番
振替〇〇九八〇一四二九八四七九番

「川柳塔」への投句について

- (1)川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (2)愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (3)各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4)各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお問い合わせいたします。

鳥取県総合芸術文化祭

第31回鳥取県川柳大会

とき 10月21日(日) 10時開場 13時開会

ところ 倉吉市大平町 上井公民館 ☎0858(26)1736

(JR倉吉駅北へ徒歩10分ほど)

兼題と選者(各題2句・席題なし・出句締切11時半)

「壁」 西出 楓 楽選

「命」 大家 風 太選

「刈る」 長谷川 博 子選

「洗う」 政岡 日枝子選

「美しい」 西原 艶 子選

「誕生」 野口 節 子選

「投げる」 森山 盛 桜選

事前投句(ジュニア部門)「友」(2句・無料)土橋 螢選

表彰 鳥取県知事賞ほか

会費 2,000円(作品集・昼食呈)

欠席投句 1,000円(小為替) 9月30日必着、用紙自由

投句先(問い合わせ先)

〒689-0605 鳥取県東伯郡湯梨浜町園545-16

竹 信 照 彦 方

第31回鳥取県川柳大会実行委員会宛

TEL 0858(34)3345

主催 鳥取県川柳作家協会・文化団体連合会 後援 倉吉市ほか

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成十九年九月一日発行(毎月一日発行)
創刊大正十三年 通巻九六四号

柳 荅

九月号

定価

八百

送料

八十四円

オニザキの

すりごま

自宅の台所で始めた
手洗いのごま加工・販売
から50年。

オニザキでは、手作りの
風味にこだわり、独自に
開発した製法で、ごまの
香りと味わいを最大限
に引き出し、美味しい
すりごまを作り続けて
います。



株式会社 オニザキコーポレーションセルズ TEL 0120-30-5050

〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング